
東方洪水域

葬炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方洪水域

【Nコード】

N2543Y

【作者名】

葬炎

【あらすじ】

「あゝ、暇だ」と、ぶらぶらしていたら
「じゃあちよつとこつちにこい」「えっ」と呼ばれて気づいたら何も
ない空間だった……。ようするにテンプレで東方の世界に逝きます
「じゃねーよ！あんな世界じゃ3秒で死んじゃうわっ！！」
「……がんばって」ということで一般の高校生が東方にinn！

自己紹介及び主人公設定

どうもっ！葬炎です！

今回初めて小説を書き始めました。まだまだわからないことも多く、ぐたぐたな展開が多々あります。なので、こここの部分をこういうふうにしたらいよいよ！とか、このキャラはこういいうふうにして！などは言ってくれると嬉しいです！では主人公設定です！

名前：千夜

性別：男

年齢：17（不老不死になったため容姿が17で止まっている）

能力：水を司る程度の能力

容姿：普通よりちょっと上？でもやっぱりモブ

備考：前の世界ではどこまでも普通の学生だった。普通の家で普通に暮らし成績は下の中くらい（ようするにバカ）。ゲームや漫画の知識はちよつとはあるがオタクほどでは無い。将来の職業について悩んでいたが、東方の世界にきてしまったため関係無くなった。

ついでに神の設定

名前：吾輩は神である、名前はまだ無い（もう出番無し）。

年齢：んなもん数えてられっか！

性別：自由、精神は男

能力：東方風に言うと、創造と破壊を司る程度の能力

容姿：イケメン、1000人中1000人が振り返るくらい。 . . .
イケメン爆発しろ（ぼそっ）肉体の年齢は20くらい

備考：あらゆる平行世界を管理する神、でもある日あまりの仕事の量にぶち切れてそれぞれの世界に意識、いわゆる『世界意思』と呼ばれるものを創り自分で自分を管理するようにした。その結果暇になり今ではゲーム三昧。主人公が転生した理由は、やっとモンスター・ンターと呼ばれるゲームのミラ ルカンと呼ばれる（作者的に）最強のモンスターを初期装備で倒せたことに喜び、ちらっと世界を見たときたまたま目に入った主人公が「暇だ」と言っていたためその願いを叶えてやった。（ハイテンションなときだったので、まさにやっちゃった ミって感じ）

2011 11/7

全話編集

作者は削除されました

魔王（神）からは逃げられない！（前書き）

処女作です！

誤字脱字は教えてくださると嬉しいです。

駄文です。

魔王（神）からは逃げられない！

「あゝ、暇だゝ」

と、だれてるバカが一匹

「バカっていうなー！！」

だってバカじゃんw

「あーっもう！！」

暇な主人公はあまりにも暇なために友達が存在しない街を歩いていた。

「家に帰っても勉強しろって言われるだけだしなー、帰りたく無いなー」

”じゃあちよつとこつちにこい”

「えっ誰？どこだ（って何この光の玉は！元気　っぽいな！こつちくんは！！」・ダッ・

主人公は声の主を探していると光の玉が自分の方に向かってきたためとりあえず逃げ出した

”逃げんなっ！”

「無理っ！ちよつこつちくんになって！！」

”はっはっはー！俺（神）から逃げられるとでも思ったかー！
！”、ブウン、

「えっ早くなっただし！逃げ切れな、うぼあー！！」

主人公は光の玉に飲み込まれた・・・

しゅじんこうはめのまえがまっしろになった！

「じいじは誰？私は何じいじ？」（前書き）

感想をもらえると泣いてよろこびます！

「ここは誰？私はどこ？」

ここは何も存在しない空間

「いったいなんだったんだあの玉は」

”ようやく気がついたか”

声の主をみると見慣れない人間がっ！

「あんた誰？」

”ふん、聞いて驚く「まあ誰でもいいけど、ここはどこ？」俺の話
を聞けっ！”

．．．だが主人公にはどうでもいいようだ

「じゃあ聞いてやんよ。」

”（なんで上から目線なんだ？）まあいい、俺は神だっ！！”

「あつそ」

”あれ？”

神は期待していた反応と違ってて混乱している

「で、俺はどうなの？」

” いやいやいや！反応薄いな！”

「だって信じて無いし、正直誰でもいいし」

” いや本当に神だからっ！”

「ふーん、で？俺はどうなの？」

何も無い空間より、いきなり現れた神（？）より自分がどうなるのが心配なようだ

”（もういいやorz）お前に転生をしてもらう”

「わかった〜」

”（・・・もう突っ込まんぞ）じゃあ逝ってこい！”

「パカッ、あゝ、穴があくとかありきたりすぎだろwちょっとはひねろーぜw」・ヒューン・

”・・・ちょっと調子がくるったな、まあもう会うことは無いだろう”

神と主人公の会話はこれにて終了。しかし神は再会フラグがたっているのに気づいていなかった！！

”あ・・・どこの世界か言っただねえや、まあなんとかなんだろう、じゃあお詫びになんか適当に能力つけといてやるか”

・・・主人公はどうなのやら、それは誰にもわからない。

”．．．隣で「転生したいっ！」って叫んでたオタクならもっとい
い反応してくれるかな？”

ここは誰？私はどこ？（後書き）

そして作者にもわからないw

やはり上手く書けない、ランキング上位の作者さんはマジで尊敬します！

この神の再登場はもう無いと思います。

最後のはフラグではありません

気がつけば森の中(前書き)

駄文！そしてぐたぐたw

気がつけば森の中

ギャー・・・ギャー・・・

今主人公が居るのはそこそこ危険な森の中

「ZZZZZZ・・・ZZZZZZ・・・んー、よく寝た
ー！」

どうやら主人公は寝ていたようだ

「あれ？さっきまでいたうざいくらいのイケメンは？」

・・・神はイケメンだったらしい

「なんか話してたけど眠くてほとんど聞き流してたしなー」

神の話をスルーしてたのは寝たくて話をぱぱっと終わらそうとしたからみたいだ

「ふあゝ、ってどこどこよ？」

「なんか話をちゃんと聞いてたほうがよかったかな？でももつどうしようもないし、ペラッ、ん？紙？」

「これを読んでもということは無事だったようだな、今お前がいるのは東方Projectというゲームの昔の世界だ、

「はあっ！東方の世界かよ！そんな世界じゃ俺すぐピチユるじゃん

「!!」

主人公はあくまで一般人です

「だがすぐに死んでしまおうとつまら．．．もといかわいそうなため
お前に特典を与える」

「今つまらないって言おうとしたな？．．．まあいい、それならな
んとかなるかな？」

「1つ目はお前が死のうと思わないかぎり死なない不老不死」

「うあw最初からすごいのがでたなw」

「2つ目はお前に合う能力」

「おおっ！やっぱり東方といったら能力がないとやってらんないっ
しよー！」

「これは後で座禅をくむなりなんなりして確かめてくれ、俺が決め
たわけじゃないから弱くても俺のせいにするなよ」

「どういふことかというと、主人公が深層心理で、こうなりたい、と
願ったことを能力にしたそうだ。」

「マジかorzじゃあつかえない能力の可能性もあんのかよ」

「3つ目は妖怪化だな、種族は無くても特徴も一切無い」

「んだとゴルアツ！じゃあ人外になっただけで意味ねえじゃねえか

「！」

「だがお前は不老不死だからな、生きていればそれだけで強くなれるからたとえ能力が弱くても最強にはなれるだろ。」

「なま言ってますみませんでしたm(´`´)m」

「以上だな、身体能力は妖怪化の影響で全体的に上がっているから注意しろ。」

「ありがとうございます様っ！今までの無礼をお許し下さい！！！」

「なお、この手紙は読み終わったら爆発します。」

「え、チユドーン！あの駄神がつ！今度会ったらぶち殺す！！！」

「あの空間」

「（ブルツ）うおっ！いきなりなんだ！まあいい、もうやる」と終わったしまったモンンでもすっか”

「再び主人公」

「ん、せつかく別の世界に来たんだし名前を変えよっと、何がいつかな？」

「親に貰った名前を変えるとは、」

「ん、あっ！じゃあ千夜>せんやくな！」

「名前が決まったけどこれからどうなんだろう？」

ギヤー・・・ギヤー・・・

現在地：なんか危険そうな森

「・・・もしかして俺オワタ？」

気がつけば森の中（後書き）

中途半端

やせいのライオンがあらわれた！(前書き)

連投はしばらくしたらなくなります

「いやっ！はあっ！」

千夜はなにやら拳法らしき動きをしている

「・・・太極拳ってこうだっけ？」

「・・・今まで何をしていたのか小一時間問い詰めたい、それに能力を確認するのになぜ太極拳？」

「・・・さあ？」

↳さらにさらに1時間後↳

「ー飽きた」

千夜はあの後色々試してみたが、思うような結果が出なかったため飽き始めてきた

「まあそうそう他の妖怪に襲われることなんてがさっ「え”っ」

「グルルル」

「・・・！！(Bダツシユ)」

「ガオーッ！！」

「なんで日本？にライオンがいるんだよっ！」

日本です

「ちくしょー！なんで不幸なことばっか起きんだよ！」

ちなみに今千夜を襲っているライオン？は妖怪です

「うわー！とりあえずこのライオン（？）をどうにかしないとっ！！」

千夜の願いがつうじたのか、走っている先にそこそこ大きい川がある

「うおっ！ラッキー！もどきとはいえしょせん猫科っ！ならば水の中にはこないだろっ！！」

ーただし現実是非常だったー

「うおおおっ！ダイブ！！」

ーバツシャーンー

「ふう、これでだいじゅーバツシャーンーなにっ！？」

「グルルル」

「ギャー！まだ追ってくるー！」

「ガーーーー！！！」

「うわっ！食われー！ピキーン、閃いたっ！」

”水を司る程度の能力”

「はあっ！！」

「ぎゃうっ！」

「はっはっはー！我が世の春がキターー！」

千夜は襲いかかってきたライオンもどきを水でポケ　ンのハイド
ポンプのように水をはきだして撃退した

「はっはっはー！．．．はあ、落ち着いた。とりあえずこのライ
オン？は食えるかな？」

と、千夜がライオンもどきに近寄ると

「ん〜あ、いたいた。ってうわあ．．．グロッ、しかもライオン
と微妙に違うし」

千夜はライオンもどきの顔を見ると普通のライオンと違うのがわか
ったようだ

「なんかこのライオン？たぶん妖怪かな？に目が三つあるし、角も
生えてるし」

「．．．さすがにこれは、ぐ〜．．．まあ大丈夫かな？い
ただきます！」「がぶっ、

千夜はあまりに腹が減っていたため生のまま食い始めた

「うえ．．．マズ、でも我慢しよ」

やせいのライオンがあらわれた！（後書き）

どうしたらいい小説が書けるんでしょうかねえ？

俺の旅はこれからだっ！(前書き)

やっと東方キャラとエンカウント

俺の旅はこれからだっ！

「は、あのライオンもどきがありえないくらいマズかった」

「ん、どうしよっかな？とりあえず危ないから森から出よう」

「川に流されて行けば下流につくだろ、そして人を探す」

あきらかにバカな発想をした千夜

「ん？なんか悪口を言われたような？」

気のせいだ

「気のせいか」

「よし！じゃあこのままGO！」

そんな感じで千夜は川に入ったまま流されていったとき

「まあ妖怪だし風邪とかにはならんだろ」

流されてしばらくすると

「は、快適 かい、ゴスンッ！、痛ってー！」

「ガスンッ！、ゴスン！、ガブッ！、

「ぐはっ！、はっ！、はっ！、うぎゃあー！」

千夜は期待どおりになったようで、頭に岩がぶつかって、そのまま次の横にあった岩にぶつかり、最後に魚に食われかけたようだ。襲いかかってきた大きい魚は水の圧力を使って潰した。ちなみにバカは下流の方に頭を向けて流れていました

「・・・川から出て普通に歩こ」

「は、前途多難だ、ぐきつ、痛てー！」

石に足の小指をぶつけてしまったようだ

「俺に救いは無いのかorz」

いつかむくわれる日がくると信じたい

「・・・とりあえず森を抜けよう」

（1時間後）

「うわ〜！！今度は狼かよっ！！」、ダダダダッ、

川沿いを歩いてたら水を飲んでた狼に遭遇

「ちくしょうっ！ならばまた水でっ！」

「ーしかしMPがたらなかったため水を操れなかったー」

「MPってなんだよっ！東方にその概念は存在しねえだろっ！」

「がっがっ！」「タタタタッ、トンッ！」

「えっ？」「ガブっ」うわっ！」

（また1時間後）

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

どうやらなんとか逃げ切れたようだ

「は、川から離れちゃったしどうしよっかな」

「は、かさっ」だれだっ！」

「そっいうあなたこそ誰？」

音がした方を見ると変な格好をした美人がいた

「俺？俺は「ビュン！」うおっ！危ねえな！なにすんだよっ！」

「誰でもいいわ。完全に人型の妖怪なんて初めて見たから、私の薬の実験台になって？」

「いや怖いよっ！どんな薬を投与する気だよっ！」

「え？う、ん、妖怪にどんな影響があるかの実験とか、後は妖怪にどんな攻撃が一番有効なのかとか．．．色々よ」

薬だけではなく人体（妖体？）実験をするつもりらしい

「絶対に嫌だっ!」・ダッ・

「あなたに拒否権なんて無いわよ?」・タッ・

「俺の人権はどこに行った!」

「あら?あなた妖怪じゃない」

「ですよねー!」

「それより逃げないでくれるかしら?」・ひゅんっ・

「・ビュオッ・うおっ!なんでそんなに初速と到着時の速度が違うんだよ!」

「便利でしょ?この弓も発明品なのよ」・ひゅんひゅんひゅん!・!

「・ビュン・うおっ!・ビュン・はっ!・ビュン・こなくそっ!」

「中々粘るわね」・ひゅん・

「・ビュン・ほいっ!と、そんなにしつこいと何万年たってもお嫁に行けないぞっ!」

「(ビキッ)・・・本気で殺るわ」・ドドドドドドドドドド!・!・!

「えっ?ちょ、音がもう弓じゃ(っ)ピチューン(」

「安心しなさい、捕獲用の弓だから死にはしないわ、本気で殺ったから死ぬ程痛いと思うけど」

俺の旅はこれからだっ！(後書き)

それじゃあまた次回ー

えっ？永琳？（前書き）

キャラ崩壊、どうしてこうなったw作者はヤンデレが好きなのでちよっとそっちに行きます

えっ？永琳？

・・・ウーン・・・ガシャーンガシャーン・・・ギュルルルル・・・

「んん、ここは？」

「あら？気がついちゃった？」

「お前は！」

「ええさっk」・・・誰？」・・・あら？脳をいじりすぎたかしら
「？」

「・・・ああっ！あの妖k「殺すわよ？」「しませんm」
「m」

「それよりここはどこなんだよっ！お前は何者なんだよっ！俺をど
うs「うるさいからまだ眠ってて」えっ、ドスッ、ま・・・またか」
「ガクッ」

「ん、次はどこをいじろうかしら」

「・・・。。。」

（3時間後）

「・・・！！！！ガバツ、はあ・・・はあ・・・あの変な格好の
美人に改造される夢を見た」

「あら？美人だなんて嬉しいこと言ってくれるじゃない。でも”変な”は余計なお世話だわ」

「．．．！出たなシヨツ　ー！！」

「誰が世界征服を企む国際的秘密組織よ」 b y w i k i

「．．．なんでお前が知ってただよ！」

「さあ？なんかこう言えって電波が届いたわ」

「どうやら永琳は電波少女．．．いや年齢的に電波ババ」なにかしら？」．．．いいえナンデモナイデス

「．．．で？結局俺の体に何したんだ？」

「そうね．．．簡単に言ってしまうえば妖怪の弱点を探したり、妖怪を完全に消滅させる方法を探したり、後あなたの体の構造が人間と同じなのが解ったからそれを利用して人体に対する薬の影響を調べたり．．．後は」

「いやいや！もういいから！」

「そう？それとあなたはこれから私の家に住んでもらうから」

「はあっ？なんでだよっ！」

「だって実験が終わって処分しようとしても死なないし、どうしようも無いんですもん．．．それと薬のいい実験台になりそうですね）　ぼそっ）」

どうやら永琳は千夜を（丈夫な実験台として）気に入ったようだ

「おいまでゴルア！！今最後の言葉聞こえたぞっ！絶対そっちがメインの理由だろ！！」

「メイン？私には言葉の意味が分からないわ」

「いや絶対分からなくとも理解してるだろっ！」

「それじゃ私の家に案内するわ」

「俺の話聞けや〜！」

「じつちよ」

「うが〜っ！っはあ〜もういいや、．．．今のうちに逃げ、ザザッ

．．．（冷や汗ダラダラ）」

なにが起こったかわからない人に説明しよう！今千夜が解剖室らしきところから永琳が出ていった扉が直接外に出たためそのまま逃げようとしたら、今から戦争に行きます！と言わんばかりの装備をした人？に囲まれたのであった

「そいつらは機械よ」

「いやそれでも怖いよ！」

「それであなたの名前は？」

「（スルー!?）・・・俺の名前は千夜だ」

「そう、私はXXXXXよ」

「はあ?えーと?」

しっかり聞き取れたはずなのに言葉として理解ができなかったことに混乱しているようだ

「・・・あなたの頭じゃ理解できないと思うから永琳、八意永琳でいいわ」

「俺がバカだつて言いたいのか!」

「・・・いいえ?ちがうけど、よく言われるのかしら?」

「・・・はっはっはー!そうだよな、さすがに初対面の人にバカつて言われるはざー!っておい!その生暖かい目をやめろっ!」

「・・・(ちょっとは優しくしてあげようかしら?)」

「ちくしょう・・・ぐすっ、俺だつてな・・・ぐすっ、俺だつてがんばってんだぞー!。(ノ、(。、うわーん!」

千夜はガラスのハートなようです

「・・・そう、がんばったのね」(微笑)

永琳はまるで聖母のような眼差しで千夜を見ている

「うあう・・・泣かされた相手に慰められた・・・orz」

「さ・・・家に行きましようか」

「なんか最初に比べてだいぶ優しくなったような気がする。ぐすん」

「（泣いてる顔・・・ちょっといいかも）」

「（ぶるっ）うおう！なんかとてつもなく変態・・・もとい大変な
ことになってる気が・・・」

「（じゅるり）」

「（ぶるぶる）？なんか本能が逃げると言ってる気がする」「気のせい
よ」「おおう？いきなりなんぞや？」

「あまり痛い実験とかはしないから安心してこっちにきなさい」

「（ビクッ！）？まあそれなら（なんか行ったら引き返せない気が）」

「（ニヤリ）ええ早くこっちにキテ？」

「？ああ（ガシッ）・・・あれ？八意さ「永琳でいいわ」・・・
じゃあ永琳さ「さんはいらない」・・・永琳？このがっしりと掴ん
でる手をどかしてくんない？痛いんだけど」

「・・・ふふふふ」

「．．．あれ？永琳？目が逝っちゃってるんだけど？めっちゃ怖いんだけど！」

「．．．ふう、安心して」

「（賢者モード！？）．．．なにに安心しろと？」

「これからあなたにどこに居てもわかるように発信機とか何してるかわかるように盗聴器とかほかにも色々と貴方を改造するだけだから」

「え！？ちよつ俺のプライバシーは!？」

「．．．ふふふ、これから私の家で色々しようねー」

「俺の貞操の危機！いや相手が美人だからむしろバッチコイ？．．．でもちよつば無理矢理はいやー!!！」

「無理矢理はしないわ」

「え？ほんと？」

「ええ．．．まずは貴方を私がいけないと生きていけないようにして骨の髄まで私のことを記憶させてから自分から襲うような場面を作つてそれからそれから」

「怖ー！えつ東方の永琳ってこついうキャラだっけ!？」

「．．．ふふふふ夢が膨らむわぁ」

「それは夢じゃなくて妄想っていつんだよっ！え？いやまじで俺食われるの！？」

「さあ．．．一緒にどこまでも行きましょウ」

「いーいやーいー！」

それ以降千夜を見た人はいなかったと言う．．．

えっ？永琳？（後書き）

貞操は無事に守られるかっ！？・・・まあしばらくは童貞の予定で
す

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！（前書き）

四千字を超えたぜ！

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！

――キングクリムゾン！同棲し始めてから何百年か後！――

「は～～、マジ疲れた」

これから一人称視点に挑戦してみるぜ！

～ということでも千夜視点～

は～～、ん？初めての人は初めまして、主人公の千夜だ。突然だが俺の愚痴を聞いてくれ。あれは36万年前だったか、いや1万6千年前だったか、え？ネタはいらないうて？残念だな、エ シヤダイは好きなのに。まあいい、それよりも永琳と同棲しはじめたころは自分を守るのに必死（誤字にあらす）だったよ。そう．．．あれはあのころに起きた事件？だった．．．

～永琳と同棲を始めて次の日～

「せ～～んやつ」「ガバツ」

「ポスン、うおっ！いきなりどうした永琳？というか最初と比べてキャラ変わりすぎじゃね？」

永琳は抱きつくのが好きなようなんだが、正直に言うと胸が背中に当たって理性が大ピンチだからやめてほしいんだが

「え～～、別にいやじゃないでしょ～～」

「・・・いやもはやお前誰だよ」

「それとも・・・嫌？（ウルウル）」

「嫌な訳があるはずが無いー」

「（ニヤリ）じゃあいいでしょー」

「ーはめられた!」

感想：女は怖い

「・・・ふう、そろそろふざけてないで家でヤルことを教えるわよ
?」

「・・・今ヤルの発音が怪しかったんだが？」

具体的には犯るほうで・・・

「気のせいじゃない？」

「（は〜）で？実験台以外になにかあるのか？」

はて？俺はてつきり薬漬けにされて最終的にホルマリンに入れられるんじゃないかと思っていたんだが

「や〜ね〜、（今の）私がそんな（もったいない）ことするわけ無いじゃない」

「今いやな副音声が聞こえたんだが!？」

「気のせい気のせい 英語でいったらウツドスピリッツよ？」

「．．．絶対お前永琳に憑依した現代人だろ」

「じゃなきゃ今までの反応がおかしいだろ」

「違います」

「はっ、今久しぶりに神の声が聞こえた気がした！」

「．．．頭大丈夫？」

「やめろっ！俺をそんなに痛い子を見るような目で見るな！」

「私とお医者さんごっこをしましょうね」

「なんか惹かれるものがあるが遠慮をつ！？なんで剥いてるんだよ
！」

「気付いたら上半身が半裸になってたぜ！」

「はあ．．．はあ．．．！」

「怖い怖い目が血走ってるんだけどっ！ちょっと離れろっ！」

「永琳が顔を赤くしながら目を血走らせて迫ってくるとか、キャラ崩壊が激しいぜ！」

「はっい 脱ぎ脱ぎしましょうね」

「17歳の俺からしたら拷問以外のなにものでもないっ！そしてい
いかげんやめろ！」・ブンッ・

「ゴスンッ・きゃうっ！なにすんのよっ！まあ落ち着いたわ。 . .
いいところだったのに（ぼそっ）」

油断すると知らない内に大人になってそうだな . . .

「 . . . はあ、で？俺はなにをすればいいんだ？」

話がずれてるからな、立て直さないと

「そうね . . . あなたは料理とかはできるかしら？」

「？こんなに技術が発達してるんなら自動で料理する機械とかは無
いのか？というか自分で料理しないのか？」

言い忘れてたが、今居る場所は永琳が都市（現代から見ても明らか
にオーバーテクノロジーな都市、どれくらいかというト えもん
が生産されてそうな）と言っていたところの中心部辺りにあるあき
らかにほかの家とは雰囲気の違いの中で、簡単に言ってしまうば
周りの家は皆典型的な近未来な家なのに対して、この家は武家屋敷
のような物である。 . . . 永琳の自宅らしい。

「当然あるわよ？でもやつぱり人 . . . 貴方は妖怪だからわからな
いかもしれないけど、人が作った物は美味い下手関係なく嬉しい物
よ？後、私が作るのはちよっと . . . 」

ん？言葉を濁したな

「なんでだ？」

「~~~~／／／！料理が下手なのよっ！！！」

「うおっ！そんな叫ばなくとも・・・」

以外だな、永琳は全てに置いて天才だと思ってたんだが

・まったく、デリカシーつてもんが無いな・

「・・・で？俺はある程度は作れるが、そんなに美味しく無いぞ？あくまで一般家庭の味だからな。」

「・・・それでいい。いや、それがいいのよ！」

「・・・聞かないで置く、それでいいならいくらでも作ってやるっ
作るの嫌じゃ無いからな

「本当！？ありがと〜！！」「バツ・

「うわっ！・ギョッ・いきなり飛び付いてくんなって！」

「はっ！！・・・あうっう〜／／／」

永琳の顔が恥ずかしさで赤くなってるな

「（えっなにこのかわいい生物、持ち帰りはおkですか？）」

「うっうっうっ！(ボンッ)／／きゅ〜」

「あ、気絶しちゃった。．．．なんで今まで平気で抱きついてたのに今回は駄目だったんだろ？」

「／／きゅ〜」

「．．．まあ起きたら聞けばいいか。」

〜何時間か後〜

「／／うっ、恥ずかしいところを見せちゃったわね」

「ああそのことなんだが、なんでいままで平気で抱きついてきたのに今回は駄目だったんだ？」

「／／それは．．．あの．．．その．．．笑は無いで聞いてくれる？」

「(ぐおっ！美人の上目遣いはヤバイな！)．．．なんだ？」

「えと．．．正面から抱きしめたら顔が近くて、そしたら急に恥ずかしくなっちゃって／／／」

永琳は予想以上に初心^{ウッ}だった

「(ぐはっ！やめてっ！もう理性のLPは0よっ！)．．．そういえば毎回後ろから抱きついてたな」

そうなのだ、永琳と出会って一日しか経っていないのに抱きつかれ

た回数は10を超えていて、全て不意打ちぎみに後ろからされていたのだ。

「えっと、これからもよろしくね？／＼」・ニコッ・

「．．．．．ぐはっ！（吐血）」

「きゃー！どうしたの千夜！もしかして昨日の実験のせい!？」

「．．．永琳が可愛いすぎて生きるのが辛い」・バタッ・

美人＋上目遣い＋満面の笑顔＋恥ずかしさが残ってる赤い顔＝最強

「そんな、可愛いだなんて／＼．．．はっ！それより千夜をベッドに運ばないとっ!」

・そして千夜は次の日まで目覚めなかったとさ。．．．リア充爆発しろ（ぼそっ）・

く時は今!く

な？なかなか危ない事件だったろ？ほかに小っちゃい事件が沢山あったな。例えば風呂に入ってる途中に永琳が入ってきたり（確信犯）「普通逆だろっ!」って言ったなら「じゃあ私が風呂に入ってたら．．．覗いてくれる?／＼」って感じてあえなく撃沈（鼻血で）したぜ！ほかにはこんなこともあったなー！ー！

く何年前く

「おい永琳！飯ができたぞ!」

「はい」

「よしっ！じゃあ食つか！」

「いただきます！」

「むぐむぐ、あいかわらず普通の飯だな」

「あむあむ……ええ、でも徐々に美味しくなってきたわね
ギリギリギリ」

「……すごい悔しそうだな」

「女としてはちょっと思うことがあるの……」

そうなのか？男な俺には分からないんだぜ

「そんな小つちゃいこと気にすんなって」

「貴方からしたら小つちゃくても私からしたら大きいことなのよ！」

「ん、じゃあ俺が料理教えてやろうか？」

どうせ家から出れないから暇なんだよな、やることといたらネット、料理、ゲームだからな。（他の家事は機械がやってくれてる）

「本当！？」「キラキラ」

「めっちゃ楽しみにしてる……あ……ああ」

「やった！これで料理が美味しくなったら千夜にあくん（はあと）
つてしてみたりほかにも／＼／」

「ん？．．．あれ？おーいえーりん．．．駄目だこりゃ。トリッ
プしてるし戻ってくるまでゲーム（DS）でもやってっか」

ちなみにカセットはポケ　ンの白だ

くトリップ回復に3時間、そのあと羞恥心で部屋の端っこに2時間
の計5時間後く

「よしっ！時間もいい感じだし夕食の下準備を始めようか！」

「／＼／うう．．．まだちよつと恥ずかしいわ」

「（無視）それじゃあ調理始めよー」

相手してたら時間が無くなっちまう

「はい」

く千夜のお料理教室！会話のみく

・言葉の意味を理解しよう

「よしっ！じゃあまずキャベツを千切りにして．．．って永琳なに
してんのー！」

「え？だって千に切るんでしょっ？」

「そのメジャーらしきものは仕舞いなさいっ！よつするに細く切れ
つてことだよっ！」

「・・・こうかしら？」

「いやいや細すぎだつて！これもはや繊維じゃん！どつしたらこう
いうふうに切れんだよ！」

「・・・料理つて難しいわね」

「それほどか!?!」

・自分オリジナルの味は慣れてから

「じゃあ次はここに味噌を入れて・・・」

「・・・」

「そこで次はさいの目に切った豆腐をいれます」

「(そ〜)」

「!」

「(ビクッ)」

「今なにを入れようとしたのかな？かな？」

「その・・・ねえ？」

「ん？言ってみな？」

「えっと、ここで砂糖（甘み）を入れたら美味しいかな？」と

「なんでだよ！今作ってんの味噌汁だよ！？」

まあこんな感じだね、まさかここまで料理がだめとは思わなかったよ。これが天才とバカは紙一重ってやつなのかな？

「料理って難しいわ」

「・・・永琳が発明してる物よりは圧倒的に簡単だと思うよ？」

「そして時は刻みだす！」

まあそれから永琳は今までずっと練習を続けていてね、今ではたまにある失敗作を抜けば普通に美味しいってレベルにはなったよ。後は当然能力の練習もしたよ

「つい最近」

「ほっと！」

「うわー！すごいすごい！」「ワーワー！」キヤーキヤー！

ん？今なにしてるかって？それはだな、プール一杯分くらいの水を空中に浮かべてな、空飛ぶプールって作ってみた！

「いや、本当に最初のころに比べて能力が使いこなせるようになって

てきたな」

「本当にね〜。はあ、快適だわ〜」ザブザブ、

ちなみに今は夏でな、この空飛ぶプールは子供に人気なんだ！一日百円でね、落下防止用のネットがあるとここで空飛ぶプールを運営してる。あ！ちよつと前から街に行ったりしてるぜ！以外と人気者なんだ！まあ商店街とかでよく手伝いとかしてるからな、皆妖怪な俺を受け入れてくれたよ。まあ最初は近づいたら逃げられたけどな（遠い目）

「よつし！ここまできたらあの技使えるかな？でもさすがに都市で使うわけにもいかんしな〜」

前からやってみたかった技なんだが無駄に範囲が広くて特訓室じゃあ狭いしな、さすがに都市の外に出る許可は無理だったよ

・後々使う機会があるよ・

「うおつ！なんか嫌な予感がするんだが・・・まあそんな時はそんな時だな！」

「千夜〜？そろそろ帰るわよ〜？」

おっと、どうやら永琳は俺が考えてる間に帰り支度を終わらせていたようだ

「おつし！家に帰って夕食を作つか！」

まあこんな生活も悪くないか

「だがそんな平穩はすぐに壊れることとなってしまった。」

「？今フラグが立ったような気がする。」

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！（後書き）

どれくらいの話の長さがいいんでしょうかね？

戦争開始！・・・のちよつと前（前書き）

また短くなってしまいました、すみませんm（）（）mなるべく
五千字前後にしたいですね

戦争開始！．．．のちよつと前

「ハア．．．ハア．．．ハア！」

いきなりだが俺は今全力で走っている、なぜかって？それはな．．．

「トイレはどこだっ！」

――――

ふうふう、ん？ああこんな始まりかたで悪かったね、でももう我慢の限界だったんだ。ついでに言うとな今は都市が妖怪に襲撃されていとこなんだ。えっ？その割にはやけに落ち着いてるなだっ？．．．
．ああ、もう俺以外に都市には誰も居ないからな、焦る必要がないんだよ

「第一防衛ライン、突破サレマシタ。都市ニイル住民ハタダチニ避難シテ下サイ」・ウー！ウー！ウー！

「おお以外と早かったな、永琳に言っというて正解だったぜ」

何を言っただって？それはだな．．．

く回想く

ーただ今食事中ー

「そついえば、後何日かしたら大規模な妖怪の襲撃があるそつよ。予言の能力者が言っただわ」

「ぶほっ！いきなりだな！．．．そうか、都市は大丈夫なのか？」

予言の能力者というのは「夢で未来を見る程度の能力」という、簡単に言ってしまうえば正夢を見る能力なんだがやっぱり夢なため見たことが曖昧でね、いまいち使いにくい能力らしい（本人談）

「それが．．．わからないそうよ」

「そうか．．．」

ならば今しか無いな．．．

「まあ都市の防衛は完璧だから大丈夫でしょう」

「．．．いや、今こそ月に行くべきだな」

「．．．なんでよ！まだ、まだ大丈夫なはずだわ！」

永琳が焦ってる理由は穢れがどーのこーので俺は月に行け無いからな、実はと言うともう月に行くシャトルはできている。永琳がなんとか出発を遅くしてなければすでに別れ離れになっていたはずなんだ。月に行く理由はな、穢れを無くして不老不死になるためとか妖怪の脅威から逃れるためとか色々言われてるがどれが本当の理由なのかはわからない

「．．．永琳、今回はもう危険だつてわかってるだろ？」

そう、襲撃はこれで初めてでは無い。すでに何回かしていて、回数が増えるごとに妖怪の恐怖から新しい妖怪が生まれ、さらに人間が

地球から脱出しようとしているのがわかっていているのか日本中から妖怪が集まってきている。恐らく今回の襲撃は耐えられ無いだろう

「．．．それでも！」

「ポン、永琳、少し落ち着くんだ」

「．．．そうね、落ち着いたわ」

まさか永琳がここまで俺のことを思っていてくれるとは思わなかったよ

「．．．俺は絶対に死なない不老不死だってわかってるだろ？なら永琳が生きてればまた会えるさ」

「．．．絶対よ」

「ああ．．．」

ちなみに転生者だということは言っていない、べつ別に忘れてた訳じゃ無いんだからねっ！．．．うえ、気持ち悪

「．．．いまさら俺は転生者だ！っていってもな（ぼそっ）」

「ん？なんか言ったかしら？」

「いや、なんでも無い」

「そっ？？」

さてと、あれ（・・・）の準備をしないとな

「さて、せつかくの大イベントなんだからど派手にいこうか」

「・・・あれをやるつもりね；（妖怪が可哀そうになってきたわ）」

ふふふふふ、こんな事もあるつかと、あるつかと！今まで色々やってきたのだ！

「やっとあれが解禁になる時がきたか・・・！」

「・・・正直普通に戦っても勝てると思うわよ」

「それではつまらないだろう！俺はつまらないのが大っ嫌いなんだ
！」

「・・・なんだかんだ言っただけあなたも妖怪なのね」

まあな、長い生に退屈は毒なんだよ

「（・・・はあ、私はあなたと居るだけで満足なのに）」

・裏話だが、別に千夜が月に行ってもなんの問題も無い。だが、千夜（妖怪）が人気者なのが気に入らない人間や、千夜が妖怪だといっただけで気に入らない人間が結託して、適当に理由をつけて地球に残そうとしている。ちなみに永琳はこのことを知っているが、そういう人間は上にも居るためどうしようもなかった。

「やっぱり私も地上に残ろうかしら？」

「それはやめてくれ、俺が恨まれる」

ただでさえ妖怪が都市にいてることでお偉いさんに睨まれてるのに

「・・・そうね、再会するのを楽しみにしてるわ」

「おう、そうしていてくれ」

「ええ・・・じゃあシャトルの最終整備に行ってくるわ」

「ああ、行っていい」

「ボタン・・・行ったか、じゃあ俺も妖怪襲撃のための準備をしようかね」

「ギイ、あまりやりすぎちゃ駄目よ？、ボタン」

・・・俺そんなに信用無いかな？

「・・・まあいつか」

よしっ！じゃああれを出してっつと、ふひひひひ

「（・・・すごい心配だわ）」

戦争開始！・・・のちよつと前（後書き）

次回戦争、千夜が準備したものは！・・・どうしよう？そんなに期待しないで下さい

戦争の始まりだ！（前書き）

俺前に五千字超えたいって言ってたよな？すまんありや無理だった。今回も四千字くらいです。今後もこれくらいの一話の長さになると思います。

戦争の始まりだ！

「ドカーン」バカーン」ズドドドドドドドドドド...

「ワーー！」ギャー！」ひでぶっ！...」

え？今なにしてるの？だって？それはな...

「ダダダダダ、ははははは、見ろ！妖怪がゴミのようだ！」

妖怪を殲滅中なんだぜ

「ダダダダダ...プスン、あ？...ああ、水（...）
）が切れたのか」

そう！俺が準備していたのは大量の水だ！...ん？今「なんだ、ただの水かよ」って思った奴居るだろ、水舐めんな！人間が科学で作ったアクアカッターなんて言う汎用性が高すぎるものがあるくらい水はすごいんだぞ！それにこれはただの水では無い、何百年も間ずっと圧縮しながら妖力を込めつづけた俺特性の水なんだ！

「ひゃっはー！」「ザシュツ」ザシュツ、

ようするに水は全て俺の思うままに操れる

「そらっ！水爆弾だ！」ドカーン、

ちなみに爆発音の正体は圧縮した水の圧縮を解いただけさ。でも圧縮した量が半端ないからそれだけで脅威だぜ

「それっ！」、ズパッ、

今使っているのはまんまアカッターだな、違う所と言えば圧縮されてる量がだんちなのと、水は使い捨てじゃ無くして循環している（ノコギリのような物です）のと、さらに操れると言うことだ！

「ガオオオー！」

「おお、俺の弾幕をかいくぐるとはやるな！」

弾幕の構成：水爆弾（一定の距離を進むと複数の弾に分裂する）水の銃（速度がヤバイ上に一定の距離を進むと大きくなる。連射性が高い）水の剣（不規則に動きながら追尾してくる、軌跡は消えない上に無限に伸びる、そして複数）水レーザー（速度が（ryただし真っ直ぐ、そして長い）この弾幕が視界を埋める量でくる。結果――

「グオオオオー……」

「あらら、せつかくここまでこれたのにねえ」

「――これなんて無理ゲ？ by 妖怪の皆さん

「ちえ〜、もうちょっと踏ん張ってくんないかな〜」

視界を埋めるほどの死体死体死体死体――

「おっ？」

「ーその中で無傷で立っている妖怪がいた

「．．．ちっ、あんだけ居た俺たちがこんな短時間で全滅するとはな」

「そういうお前は、容姿から考えると鬼．．．なのか？」

「ああ．．．」

角を生やし筋肉がムキムキで下は腰衰だけのー

「ー変態だ！」

「ちがうわっ！」

「ーそう、容姿がほとんど人間の男と変わらないためただの変態にしか見えない

「ん？お前よく見てみるとー」

「．．．なんだ？」（警戒中）

「ーいい男だな」

「．．．！（明日への逃走）」「ダッ、

ガチムチに好かれたくねえよっ！

「おい！なんで逃げ出す！」「ダッ、

「俺にそっちの趣味は無い！」

「そっち・・・？ああ！ちげえよ！戦闘相手にちようどいいって意味だよっ！」

「そっやって俺が油断したところで後ろからズプリと・・・」

「だからしねえって！」

「それから似たような言い争いを一時間ほど」

「「はあ・・・はあ・・・」」

「・・・わかった、理解しよう」

「ようやくか、なんか無駄に疲れちゃったぜ」

「それより戦闘を始めようか」

「ああ！楽しみだ！」

「それじゃあ、都市最強の妖怪千夜！押して参る！」

都市には妖怪が俺しか居無いからな、間違えでは無い

「じゃあ俺も、鬼神の剛鬼くごつきく！全てを破壊しようか！」

おお！そのセリフかつこいいな！俺もなんか考えとこ

「「いざ・・・勝負！」」

――

「はああああ！」・ガキンツ！ガキンツ！

「ウオオオオ！」・ブンツ！ドシン！

ちくしょう！なんで当たってるのに水の剣も銃も効かないんだよ！
ついでに剛鬼の攻撃は当たるとやばそうだからがんばって全部避けてる

「ハアツ！」・ヒュン！

「フンツ！」・パシツ

な！？表面は高速で水が流れてるから触れただけで切れるはずだぞ！

「ソラツ！」・バキン

「うおつと！」・パシヤツ

「・・・水か、壊しても再生するし厄介だな」

ちよっ！こんだけ圧縮した水（だいたい水の剣一本で一つの町を沈めることができる）を握り潰すとかどんだけ力が強いんだよ！

「ん？斬れないことに驚いてるな」

「・・・ああ、なんかの能力か？」

「そつだ。なんなら教えてやるつか？」

「本当か！？」

「鬼は嘘をつかん」

「．．．そんだけ自分の能力に自信があるってことか」

「．．．教えてくれ」

「おう、俺の能力は”干渉を否定する程度の能力”だ」

「．．．なんだそれ、チートじゃねえか」

「まあ自分への干渉しか否定できないがな」

それでも攻撃が効かないってことだろ．．．

「勝てる訳が無い！」

「あーっはっはっは！なににもこの能力は無敵って訳じゃ無いんだ、当然抜け穴もあるんだからがんばって探すんだな！」

そんなこと言っただけで俺はそんなに戦闘のセンス？って言えばいいのかな？があるわけじゃ無いんだから戦闘しながら弱点を理解するなんてできるわけが無いだろ！

「考えるんじゃ無い、感じるんだ！」

「無理！俺は感じるより考えるタイプだ！」

・そしてバカなため考えて空振りすることがほとんど・

「（タイプ？）お前と会ってまだ間もないが、絶対そんな性格では無いと断言しよう」

「なぜだー！」

おかしい、俺は友達に「お前ってたまにすごい（バカな）発想するよな〜」って褒められたことがあんだぞ！・・・あれ？褒められたんだよな？

「それよりお前の能力は？」

「・・・」水を司る程度の能力”だ」

「ほお、お前の能力も凄い能力じゃないか」

「・・・そうか？」

確かに水を操れる（・・・）のは凄いと思うが

「・・・さてはお前、自分の能力を全部理解して無いな？」

「いやそんなはずは無いんだが・・・」

「（やっぱり理解してないな）・・・このままじゃつまらんから少しだけヒントをやるっ」

「・・・」

「お前の能力は”水を操る程度の能力”では無く”水を司る程度の能力”なんだぞ？」

「・・・つまりは？」

「（やっぱりバカだなこいつ）・・・水に関係することはなんでもできるんだ、そして全て生物にはとある水が流れている。これは妖怪も例外では無い」

「・・・！血か！」

よしっ！それじゃあさっそく・・・

「・・・そうなんだがな、それじゃあ俺は倒せんぞ？」

「・・・ああ！お前の能力を忘れてた！このチートめ！」

まあいい、俺は死なないんだから弱点がわかるまで納豆のごとく粘ってやる！

「（ぶるり）・・・今果てしなくめんどくさいことになった気がする」

「俺が諦めるまで殺し合いに付き合ってもらっぜ！」

「おおっ！どちらかが死ぬまで楽しもうか！」

そんなこと言ったら俺は絶対に負けないぜ？

「不眠不休の戦闘が一ヶ月ほど」

「ウオオオオー！」

「まだ殺し合いは続いていた」

「はあ．．．はあ．．．、殺しても死なないとか勝てるわけねえだろ！」

「はあ．．．はあ．．．ちくしょう、まだ弱点がわかんねえ！」

そろそろ戦闘を終わらしたいんだがな、どうしたらあの能力を突破できるんだ？

「ウオオオオー！やけくそじゃい！」・ブンッブンッ！．．．ドドドドド！．．．ドカーンドカーン！

水を大量につかって一斉発射だ！
フルバースト

「．．．！ちいっ！」・ダッ！．．．スタン！

．．．避けた、だと？

「．．．ばれたか」

「．．．もしかして一つの干渉しか否定できないってことか？」

つまりは、水の剣を使っていた時は斬るといふ干渉だけを否定して、水の銃を使っていたときは貫通することだけを否定していたってことか？

「ああ、そういうことだ。致命傷は回避できるんだが、衝撃とかは否定できないから地味に傷を負っているんだよ」

おお、よく見てみれば結構ダメージ与えてるな

「てゆうか、それだけを気付くのにどれだけ時間がかかってるんだよ！」

「しょうがないじゃ無いか！」

一人が相手だったから剣と銃は別々に使ってたんだよ！爆弾は性質上水を回収できないし水の消費が激しいからあんまり使わなかったし

「・・・はあ、鬼である俺があまりのめんどくささに心が折れそうだったぜ。何回弱点を自分から教えそうになったことやら」

・・・ようするに、あまりのめんどくささに自殺しそうになったと？

「諦めるなよ！諦めるなお前！！どうしてそこでやめるんだそこで！！もう少し頑張ってみろよ！！」by 熱血なテニスプレイヤー

「途中で諦めそうになったお前が言うな！」

ちっ、ネタが通じない奴め！

・忘れないように言いますが、今は遙かに昔です。ネタに反応できた永琳がおかしいだけです・

「はあ、負け決定か」

「・・・そういえば、なんで負けるのがわかってて逃げなかったんだ？」

「鬼は戦闘を至上とする妖怪だからな、例え負けるとわかってても逃げるなんて論外だ！」・ドンッ！・

うおっ！あまりの信念の強さに剛鬼の体から・ドンッ！・って聞こえたような気がするぜ！

「・・・じゃあ止めをさせてもらっぜ」

「ああ！来い！」

「これが俺の・・・全力全壊！」・ズドン！・・・ズパパパ！・・・ガガガガ！・

剛鬼に能力について教えてもらったからな、できるかな？って思っ
て空気中の水分を使って大量の水を召喚しようと思っただけだぜ！

「ぐはっ！色々教えてやったのに躊躇いも容赦も無いな・・・」
ガクッ・

「悲しいけどこれ、戦争なのよね」

色々と教えてくれた剛鬼に敬礼！（、ー、）・ビッシッ・

「さてと・・・しっかり後始末をしないとな」

剛鬼と戦った後で疲れてるんだけどな・・・

「感慨深いが、この都市が残っていると厄介だからな、消させてもらっぜ！」

残っている力を振り絞って能力全開！

「ウオオオオオオオー！！」・ドッカーン！！

く、もう力も妖力も残って無いぜ、ちょっと眠るか・・・な・・・

・そしてこの日から千夜を見た者は居無いという・

「まだ・・・死んでねえよ！」・ガクツ・

・・・・どうやら今の叫びで正真正銘力尽きたようだ・

戦争の始まりだ！（後書き）

やっと一段落したぜ！次からは日本を放浪すると思います。

またキャラ崩壊が変態なこと・・・(前書き)

――こんな小説で大丈夫か？――

――大問題だ――

またキャラ崩壊が変態なこと．．．

「はあ．．．」

いきなりだが主人公の千夜だ、ただ今テンションがありえないくらい下がっている

「見つけたわよ、千夜」

その理由はな．．．

「さあ、諦めて私のものになりなさい！」

大人になったルーミア．．．俗に言うEXルーミアと言われる妖怪に（貞操を）狙われている．．．なんで最初からキャラ崩壊してんだよ！って思った奴いるだろ？じゃあ例のごとく回想をどうぞ

〈回想〉

戦った。気に入られた。

〈以上〉

「ちょっと！私の回想がやけに短いわよ！」

あん？なに叫んでんだ？

「ちゃんと私との出会いを思い出しなさい！」

ちっ、キャラ崩壊しすぎだろ。しょうがないからもう一回回想ON
くこんどこそ回想く

はあく、あの戦争（月では第一次妖怪大戦と呼ばれている）から特
にすることが無くなって今は日本を放浪している

「ああ、暇だ」

都市に居た時は暇つぶしのための道具がいっぱいあったからな、前
は日常だったネットが今では恋しい

「ガオーー！」

「ん？ほっ！と」「ボンッ」

「ドスン……ガウウウ……」

ん？今のはなんだって？妖怪が襲いかかってきたからちとグロイが
体内の血液を爆発させただけさ。にしても……

「ギャー……ギャー……」

「……はっ！」「ダァンッ……」

「ギャウツ！」

「今日の昼飯確保」

妖怪がだいぶ増えてきたな……こりゃまた人が増えてきたのかな？

「ジュージュー……今だっ！上手に焼けました！……
なんだ今の？」

妖怪は動物に妖力が宿って突然変異したようなものだからな、妖力をどうにかすれば普通に食べる

・ここではそういう設定です。原作がどうかは知りません・

「ガブガブ、調味料が欲しいな」

今食ってるのは鳥（プテラノドンのような妖怪を血抜きしてからそのまんま焼いたもので、当然味が無い

「ん、なんか暇つぶしになるものは無いかね」

そんな感じに俺の旅は続くのだった……

「旅を始めて何年か」

よしっ、なんかいつもどおりに放浪してたら村が見つかった……
でも予想道理に「昔の村」ですって感じがするな……都市が異常
だっただけか

「あの、すみません」

「はい、ここは藻我の村です。」

え？藻我の村？もしかしてモンスターンターか？

- これでわかる人いるかな？ -

「ええと、町の名前では「はい、ここは藻我の村です。」いやだか
「はい、ここは藻我の村です。」・・・だ「藻我の村って言うてん
だろうが！」・・・はい、すみませんでした」

理不尽だ！・・・多分あの人はあれしかしゃべれないだろう。他
の人に話かけようか。・・・皆ああたったら速攻でこの村から出よう
- 無限ループって怖いよね -

「あゝ」

「はい？なんででしょうか」

あ、よかった普通の人だ

「あの、俺旅人でなにも持ってないのですが、食料をなにか分けて
もらえませんか？」

「ええ、いいですよ」

やった！

「ありがとう「ただし、「え？」

「少し外のお話を子供にしてもらっていいですか？」

「ええ、それくらいでいいならいくらでも！」

よし！これでしばらくは味のある飯が食えるな！

く村にきてから一ヶ月くらいく

「ほかにもな．．．」

「えー！そーなのー！」「ワー！．．．キヤー！」

まだ村に居候しています。いやいや畑仕事の手伝いとかしてますよ？でもそれ以上にまた子供に好かれてね、旅に出ようとすると大人と協力してあの手この手で阻止すんだよね。え？大人も止めるのかだつて？そうなんだ、あいつら俺を便利屋扱いしてんだよ！一回「俺は妖怪だぞ！」って言ったんだけど、「ふん、そうなんだ。それよりこれをやって貰いたいんだけど．．．」って反応だったな．．．お前ら信じて無いだろ

「それじゃあ今日はこれで終わり！」

「えー、もつと！もつと！」「ブーブー！」

「うるさい！もうネタが切れかけてんだよ！」

もうすでに旅の話は終わっているからな、前世（現代）で有名な子供用の絵本を読んでやってるんだ（当然絵が無いから口頭だけで）

「．．．そろそろ旅に出るか（ぼそっ）」

「．．．！」「キラン！」

．．．なんかまた阻止されそうなのがする

「おーい！大変だ〜！」

ん？なんかあったようだな

「が村の何処にもいないんだー！」

何！　　がいなんだと！？・・・で？誰なんだ　　って

・ただの脇役なので気にしないで下さい・

・・・まあいい、それよりも捜しに行くか

「おーい　　！どこに居るんだー！・・・　　ちゃんどこー」

！・・・あなたー！　　が見つからないのよー！・・・おお

よ、死んでしまうとは情けない・・・なに不吉なこと言ってんのよ

！・・・バキッ・・・アッー！・・・

・・・最後の二人は余裕だな、これを機に旅を再開するか

「「「「「じー！・・・」」」」」

「・・・なんだお前ら」

「お兄ちゃん！」「いなくなっちゃだよ！」「まだまだあそびたいんだから！」「むらにもどってきてくれるよね？」

「・・・ごめんな、俺は出たらもう戻ってこないんだ」

「どうしてもだめ？」

「ああ、このままだと村に住み着いちゃいそうだから」

「それでいいじゃん！」

「・・・いや、俺は妖怪だからな、人の中では生きていけんさ」

都市は一般人でも自衛手段があつたし、何より永琳っていう絶対的な味方がいたから妖怪な俺を受け入れてくれたんだしな

「コクン・・・コクン」「」「」

「よしっ、もしかしたら　　が危ないかもしれないから俺はもう行くな！」

「コクン・・・じゃあねー！」「」「」

よしっ！そろそろ本当に行くか

――青年捜索中・・・――

む？強い妖力がゆっくり、でも目的を持ったように真っ直ぐ歩いているな・・・こりゃ　　が大妖怪に襲われてる可能性があるな、急がねえと

「いやー！・・・」

むむ！女の子の悲鳴！この子が　　かな？

「ザザザッ・・・バンッ」「え？・・・ビュウン！・・・キャアッ！・・・バ

ツ！・・・ゴロゴロ！・・・スタン！「俺、参！上！」・・・ババーン！
なんか金髪のえらい美人を蹴りそうになったような気がしたけど、
それでも無かつたんだぜ！

「・・・ポカーン！」

「さあつその少女よ！妖怪はどこだっ！」

「・・・お兄ちゃんが今蹴りそうになったのが妖怪さんだよ？」

「ん？・・・くいつくいつ・・・なんだ？今取り込み中なんだ」とりあえず
死になさい、ブオンツ！・・・」うおっ！・・・ヒョイツ・・・いきなりなす
んだよ！危ないだろ！」

「それはこっちが言いたいことよ！」

なんだいきなり逆ギレしやがって、そしてなんでこの妖怪は俺の足
下に転がってたんだ？なんかの流行りか？」

「あなたがいきなり蹴ってきたからでしょう！」

うおっ！俺考えただけなのに、なんかの能力か？」

「自分でしゃべってるわよ！」

おおっと、どうやら自業自得だったらしいな。ここは正直に・・・

「しめんなさい！・・・ビシッ！・・・」

「え？ええいいわよそれぐらい。．．．って違う！よくも私の食事を邪魔してくれたわね！」

「なんだ食事中だったのか、じゃあ邪魔しないように　と村に帰るわ、じゃあ邪魔したな！」・シユタツ・

「ええまたね、ってそれも違う！というか私の食料を取るな！」

おお！なんだこの妖怪、ノリがいいな！そしていじりがある。反応を見る限り地味に優しいしな

「ああ〜もう！ややこしいからあなたも食ってあげる！」

「え！？．．．初めてだから優しくしてね？／／／」

「なにを？．．．っ！／／／」

うわっwヤバイ永琳とは違う可愛いさがあるw

「／／／殺すっ！」・ブンッ！ブンッ！・

「顔を赤らめちゃって、かーわーい〜いー！」・ひよいつひよいつ・

この妖怪は黒い大剣つぼいのを持っているんだが、冷静さが無い大振りの剣なんて避けるのは簡単さ

「／／／うがー！」・ブオンッ！・

「おっと！」・ひよいつ．．．ギユッ・

「な！？／＼／＼．．．ぷしゅ〜／＼／＼キュ〜」・ガクツ・
なにをしたかって？一番大きい隙を突いて抱きついただけさ。どう
だ！羨ましいだろ！

「．．．なんか前にも似たような反応があつた気がするな」

「／＼／＼きゅ〜」

まああれは永琳の自滅だったけどな

〜そのころの月〜

「・ピキーン・はっ！」

「どうしたんですか？永琳様」

「．．．今千夜が私のことを考えた気がするわ」

・どうやら永琳はまた電波を受信したようだ・

〜地上〜

ん？今なんかあつたのか？

「とりあえず、もう　も村に着いたみたいだし。この妖怪を連
れてここから離れるか」

いつ　を送ったのかって？当然、この妖怪が俺に集中した瞬間
に水で　を掴まえて村の方に、うによ〜ん、って感じで水の触

手を伸ばして直接村の中に送つといた。今頃村は大騒ぎだろうな

〈回想終了〉

そんな感じでな。この妖怪、ルーミアって言うんだが、ルーミアが起きた後色々あつてしばらくは一緒に旅をすることになったんだ。

その途中でなぜか気に入られてな、ちよくちよく貞操を狙われてる。．．．ところでルーミアって容姿と名前に外国の妖怪なんじゃないのか？

・気、気にすんな！俺は気にしない！（ようにしてる）

まあ俺は関係無いから別にいいけどな。さて、

「また鬼ごっここの始まりだ！」・ダッ

「待ちなさい！」・ダッ

暇つぶしできるようになったってことでこの出会いも悪く無かったかな？

「今捕まって私と（ピーー）するか後で捕まって無理矢理（ピーー）されるか選びなさい！」

．．．でもできればもっとお淑やかな女性がよかつたな〜、最初のウブだったルーミアはどこに行ってしまったんだ！

またキャラ崩壊が変態なことに・・・(後書き)

また一人変態に・・・

また俺一人か・・・え？また原作キャラ？（前書き）

最初は意味不明なくらい駄文です。でも後半あたりからは結構気に入ってます。

今回はちよつと急展開、というか別れるの早すぎ

また俺一人か．．．え？また原作キャラ？

「それで、これからどうすんのよ？」

「ん〜いつも通りにあてのない旅でいいんじゃないか？」

おお、俺だ俺だ主人公の千夜だ。ただ今目的も無く森の中を放浪している

「はあ．．．なんで私もあなたも妖怪なのに人間を食っちゃ駄目なのよ」

「あれ？説明しなかつたっけ？」

どうやらルーミアは戦闘（弱いものいじめ）をするのが好きなようで、前回やけに反応がよかったのはこれが原因だったようだ。（一種の興奮状態）普段はわりと普通の性格だった．．．つまんねえ」

「つまんなくって悪かったわね。それよりあんな説明で納得できるわけないでしょ、」．．．はあ．．．

む？なにが悪かったんだ？俺は正直に言ったぞ？

「．．．わからん」

「．．．自分が言ったことをもう一度言ってみなさい」

「？．．．『よしっ！作戦は”命を大事に”だ！これから人を襲うの禁止！』．．．なにが駄目なんだ？」

命は大事にするものだろうか？

「私たちは妖怪なのよ？妖怪は普通人を襲わないと消滅してしまうわ」

「．．．って言うても俺たち普通の妖怪じゃ無いから襲わなくても生きられるしな」

本当、普通は人を襲わないと妖力が弱まるはずなのになんでだろ？

・ここでの妖怪の定義を詳しく説明しよう。まず妖怪は二種類に別れる、それは『自然』タイプと『生き物』タイプだ。『自然』はそのまんまであり、自然の脅威に人間が恐れ、敬い、それが形となり神や妖怪になる。『生き物』は人間が負の感情（恐怖、悲しみ、欲望 e t c）を持った時に生まれる『妖力』がなにかに憑依（無機物でも生き物でもいい）して、その負の感情が大きければ大きいほど周りに影響を及ぼし、さらに人間がその影響に恐怖したりする、いわゆる負の連鎖（なんか違う）ができる。

・ついでに例とすれば 『自然』妖精、隙間（？）、ルーミア（闇）、千夜（水） e t c 『生き物』天狗、鬼、吸血鬼 e t c 違いは、『自然』は数が少なく総じて最初から強い（妖精は別）。理由は自分の元（自然）がそのまま能力だから強力な能力が多いため。対して『生き物』は数が多く、有名なものは種族として確立する。ただし、同じ種族でも強さは千差万別であり、中には大妖怪に匹敵するのもいれば簡単に退治されてしまうものもある。

・最後に『自然』のタイプは自分の元となった自然が恐れられているかぎり（．．．）消滅はしない。つまり、もしその自然への恐怖

が無くなればたとえ『自然』の妖怪でも消えてしまう。(千夜は別、なぜなら神に与えられた不老不死があるから)(隙間なゆかり人も別、なにかしらの境界を操ってると思ってる下さい。．．．これ以上作者の頭では考えつきませんでしたorz)・

ちなみに上の設定が役立つことは無いと思われる。．．．なに言ってるんだ俺？

「まあ．．．今はそうでしょうけどずっとと言う訳には行か無いわよ?」

「そんなときはそんなときさ」

まあいつかはどう足掻いても全ての妖怪は忘れられるんだ。それまでに幻想郷ができるだろ、パキ．．．ん?

「．．．」

「どっしたの?」

．．．油断したか、何時の間にか囲まれてる

「．．．ルーミア、囲まれてるぞ、どっする?」

「．．．ええ、今確認したわ。全部妖怪ね」・ウズウズ・

「．．．お前一人で大丈夫だな?」

「もちろん!」

「・・・じゃあ俺の分「ハアアアアアー！」・・・聞いて無いな」

「ハイッ！ザシュッ！」「グアアアアー！」「ハアッ！ズシュッ
」「ギャアアア・・・」「アハハハハ！」「ギュウン！」「ズパ
パバ・・・」

・・・どっか行っちゃった。まあまたどこかで会うこともあるだろ
う（放置）。さてと、また一人旅か。またどこかの村？町？で暮ら
そっかな

「まあ明日は明日の風が吹くだろ。とりあえず今日の寝床を探そう」

「・・・アーッハッハッハー・・・」「ズパパパバ・・・」

・・・そんなにフラストレーション溜まってたのかな？

・しばらくルーミアは出ません、いつ再登場するかは気分しだい。
・てゆうかE×ルーミアはキャラがわかりにくいので、次出る時
は幼女化しています・

「ん～お！なかなか良さそうな所を発見、今日はここで寝ますか」

町搜索は明日ってことで！ではお休み～

～朝～

「ガオー・・・ガオー・・・」

ん～、朝か？まだ眠いな、寝よ

〜昼〜

「ふあ〜、久しぶりにゆっくり寝た〜」

おふあよう、千夜さんだよ。ルーミアが居た時はずっと貞操を狙われてたからな、まずゆっくり寝れなかった。しかもルーミアは能力的にも存在的にも夜は強くなるしな。経験値では圧倒的に俺が勝ってるんだが夜のルーミアは全快の時でも負けそうになるからな、前に眠さが限界（気を抜くと倒れそう）な時に襲われて危うく犯られそうになったんだがその時は抵抗をしなかった（できなかつた）。いざ俺を襲うぞ！ってとこで自分が犯ろうとしたことを想像（妄想）したのか、一気に顔を赤くして倒れたんだよ・・・べ、別に期待なんて（ry

「さつてつとつ、そろそろ捜しに行こうか！」
でもその前に、

「狩りの時間の始まりだ・・・！」
「シューバツ」

朝飯（兼昼飯）を調達するか

「もぐもぐ・・・ふー！食った食った！」

今回の献立：猪っぱいの丸焼きと村で教えてもらった食える植物のサラダ（苦いだけ）とそこらへんで拾った食べそうな木の实（これが一番美味かった。ちよっと胡桃に似てた）

「よし、出発！」

どっかに人いねえかな？

「そんな都合のいいことがある訳がな、キヤー！……あつたよ、ダッ、」

これがご都合主義ってやつかねえ

—————

——初の主人公以外の視点——

しくじったわ！今日もお父様が相手をしてくれ無くて暇だったから護衛を振り切って森まで来たのに妖怪に遭遇するなんて！……今日も皆あの女（……）の方に行ってるだろうからこの森には誰も居無いだろーし……べ、別に誰か（お父様）が捜しにきてくれ無いか？って期待してる訳じゃ無いのよ？ただちよつと暇だから抜け出しただけよ？

「これもそれもあの女のせいなんだから——！」

うっ！思い出しただけで腹が立つ！なんであんな女がいいのよ！私だって！……だって、その、い、今は胸とかは無いけど、将来はきつともつとこう、なんて言うか、バイーン……って感じになってるはず！うん、はず！

「ギヤオオオ——！」

「キヤー——！」

そつだ！今はそんなこと考えて・・・そんなことつて何よ！私にとつては大切な「ギャー！ー！」うわゝゝ！それより逃げなきゃ！

「もうお父様じゃ無くてもいいから誰か私を助け、ドカツ！」「ギヤウツ！？」え？」

「ガツ！・・・キキー・・・ピタツ！」「女の子の悲鳴を聞きつけ俺、参！上！」「ドカーン！・・・」

「・・・ほえゝゝ」

なんで爆発したんだろ？・・・でもなんかちよつとカツコイイかも

ー再び主人公視点ー

決まったぜ！いままで登場シーンの練習は毎日（頭の中で）してたからな！あと背後の爆発音は空気中の水分を使って手抜きで作った即席の水爆弾だ！

「その少女よ、怪我は無いかい？」、キリッ、

おい今キモいつて思った奴、俺んとこまでこいや

「ポゝゝ／／／、はっはいつ！大丈夫です／／／！」

ん？顔が赤いな。風邪か？

・あれ？千夜つて鈍感属性だっけ？つて思った人がいるでしょう。実は千夜は結構な鈍感です。でもどっかのとある不幸な主人公ほど

ではありません。はっきり言われれば気付きます。．．．態度はまったく変わりませんが。ついでに思わせぶりの行動をするだけでは気付きません -

「よしよし、とりあ「ガオーー！」．．．まだ死んでなかったか」

「あつ危な「ふんっ・バキッ・」「ギユガッ！」え？」

「ふん、俺に喧嘩を売ろうなど三日ぐらい早いわっ！少なくともただの裏拳ぐらい耐えられ無いと自然界では生きてゆけんぞ？」

「三日なんですか！？それよりあれは”ただの”って言える威力ではありません！」

「なんだ？ただの裏拳で50メートルぶっ飛ばすくらい誰でもできるだろ？」

・千夜の周りが異常だっただけです・

「まあいい、それより無事か？」

「え？ああはい、大丈夫です。ありがとうございます」「ペこり・

「ん」「なでなで・

「ふあっ／／／」

「なんだ？嫌だったか？」

「いいえ！そうじゃなくて．．．その／／／（お父様以外に撫でら

れるの始めて／＼／気持ちいいな・・・」

・テテテッテテー！千夜はナデポ（幼女及び少女限定）を手に入れた！これは好意のある人間（と妖怪）にやると好感度が上昇します！ただしやりすぎると中毒になりますので注意してください！

「それより町に案内して貰いたいんだがいいか？（なかなか上等な着物を着てるし、町くらいはあんだろ）」ぱっ

「（あ、もうちょっとしてほしかったな・・・）・・・はい、いいですよ！私の家に案内します！」

「え？いや町まででいいんだ」さあっ！行きましょう！「グイッ」
・・・まあいつか」

どうせならしばらく居候させてくれないかな？無理だな、この少女が許しても親が許さんだろ

「それより名前はなんて言うんだ？俺は千夜だ」

「千夜さんですね！私は妹紅、ふじわらのせいら藤原妹紅って言います！」

えっもこたん？なにそれ怖い。俺原作キャラに会いすぎじゃね？

・それが主人公の運命ださだめーby 作者

「それより町に行きましょう！」

「あ、ああ」

まあいつか。それよりまた次回会いましょー

また俺一人か・・・え？また原作キャラ？（後書き）

もこたんinしたお！作者はもこたんが好きなので変態にしない予定です。これから不定期になると思います、ご了承して下さいm)

——) m

最後に！こんな小説を読んでくださる皆さんに敬礼！（、——、（）
ビシ

もこたんの家にINしたお！（前書き）

いやっふー！5000字いったー！

やっとだよ。。。ん、ん。。。まあ時間がかかってしまいましたが

それでは本編をどうぞ！

もこたんの家にINしたお！

「どっ？大っきいでしょ！」「ドーン」

「・・・はっ！」

「鼻で笑われた!？」

俺は千夜だぞ！・・・いやなんでも無い。今妹紅の家についたとこなんだ、にしても・・・

「・・・まさに豪族の家だな」

「・・・あまり驚か無いのね」

「ん？たしかにお前の家だが別にお前が当主じゃないんだろ？それにいいとこのお嬢ちゃんだったことは着物からわかってたさ」

「・・・私が貴族だから助けてくれたの？」

「そんな訳ないだろ、悲鳴で駆けつけたんだから姿なんて確認して無いし」

まあ無事かどうかのためチラリと見たからいいとこのだってことはわかってたが、それがもこたんだとは思わなかったんだぜ！

「そ、そう（やっぱりカツコいいかも／＼）」

「お？いきなり黙ってどうした？」

「な、なんでも無いわよ！」

「うおっ！いきなり叫ぶな、驚いただろ」

「それより家に入りましょ！」

そう言えば家の前で言い争ってたな

「じゃあお邪魔しますよつと」

「ええ、客人よ歓迎するわ」

「・・・今更貴族ぶつても遅いぞ」

「ひるさい！」

俺は素のほづが好きだけどな。正直だし、可愛いし

「えっ！？かわつ／＼／」

ん？また声にでてたか、まあ・・・

「実際そう思ってるしな」

「／＼！／＼／」

おお、恥ずかしさで言葉が出ないか

「／＼！／＼／」、バツ、

「あつ、行っちゃった」

大丈夫かあいつ？顔を赤くしたまま屋敷の中に入っていったが、俺も入っていいのかな？

「ギギイ．．．すみません、妹紅様にお客様が来てるので歓迎して貰いたいと言われたのですが、貴方様がお客様なのでしょうか？」

「おおう？そうだ俺が客人だと思うぞ？一応」

「そうですか、ではこの屋敷を案内させていただきます。この屋敷の使用人です」

どうやら屋敷にいくらまっても入ってこないから不審者か？って疑われていたようだな

「それでは客室に御案内させていただきます」

「ああ、すまないな」

「いいえ、これが仕事ですのでお気になさらず」

．．．なんか月なお姫様（望月）に出てくる主人公のメイドに容姿と性格がちよつと似てるな。さすがに髪はあんな色じゃ無いけど

「ま、気のせいかな」

「ええ、私は別に完璧と言えるほどの能力ではありませんので」

「．．．とりあえずなんで考えたことにピンポイントに反応できるんだ！とか、いやいや充分有能でしょ、とか言いたいことはあるが、それは置いといて能力があるのか？」

「はい、あります」

「．．．なんて言う能力？」

「それはお答えできません」

．．．まあ初対面の奴に能力を教えてくれるはずが無い、か

「それよりここが客室となっております。こちらで不比等様が帰ってこられるのをお待ち下さい」・ペこり・

「あ、ああ」

「それでは何かあればお呼び下さい。失礼します」・スタスタ・

「．．．ぱっぱっと言うことだけ言ってどっか行っちゃったよ」

まあもう会うことは――

・作者が結構気に入ってるのでまた登場します・

――ありそうだな

「．．．それよりどうしようか？たしかに豪華な部屋なんだが、当然暇つぶしのための道具なんて無いしな」

さてどうするか・・・

「とりあえず寝るか」

やることも無いしね。それじゃあお休み

（何時間か後）

ん〜、なんだ？なんか腹あたりに重さを感じるんだが

・こそこそ・「（今のうちにイタズラしちゃおっと）」「妹紅様、そう言うことはしてはいけませんよ？」「（しー！千夜が起きちゃうでしょ！）」「それならもう起きてしまっているので問題無いかと」「えっ!?!」

・・・なんで起きてるのがわかったんだ？

「おはようございます・ペこり・乱れていた呼吸が規則的になっていたようなので」

「・・・おはよう、それよりナチュラルに心を読むな」

「いいえ、そう考えていそうだったので。後応接間にて不平等様が待っております、準備ができました来たい来て欲しいと申されておりました」

「ああわかった。すぐに向かおう」

「・・・あれ？私空気？」

・強く生きて下さい・

よし、じゃあ行くか！

〈青年移動中・・・〉

「こちらが応接間となっております」

「おお、案内ありがとうございます」

「いいえ、それでは失礼します。ペこり・・・」・スタスタ・

「よし、入る。ちょっと待ちなさいよ！」妹紅居たのか？

「始めから居たわよ！」

そうなのか？まったく気付かなかった

「それよりお父様に会いに行くんでしょう？だったら私もついて行くわ」

「なんでだ？」

「私が居た方が説明しやすいでしょう？（それと無いとは思っけど変なことを言わないようにね・・・）」

そうだな、よし！応接間に入るか！

「お父様入るわよ」・スパーン！・

「ちよつ！娘とは言えそんな入室の仕方でもいいのかよ！」

「ん？妹紅か、いつも言ってるだろう襖はゆっくり開けなさいって」

「別にいいでしょう？」「ぶーぶー」

「そんなんじゃ娶ってもらえんぞ……」「はあ……」

「余計なお世話よ！」「ビュン」

「おっと、パシッ、まだまだ甘いな」

「……え？この家って一応貴族の家だったよね？なのになんでこんなにアグレッシブなの？」

「妹紅よ、客人が戸惑ってるからいいかげんやめなさい」「パシッ
パシッ」

「……しょうが無いわね」「スッ」

「客人よ、よく我が家に来てくれた。歓迎するぞ」

切り替えが早すぎる……

「私の名前は藤原不比等ふじわらのふひとうと言う。よろしくたのむ」

「ああはい、お・いや私は千夜と申します。どうかよろしくお願
いします」「ペコー」

「おおよろしく。それより自分の喋りやすい喋り方でいいぞ？」

「．．．貴族がそれでいいのか？」

「いやなに、誰でもこうという訳では無いよ。ただ妹紅を助けてもらったんだしそれくらいはいいだろう！って思っただけさ」

まだ説明して無いはずなんだが．．．

「あれ？妹紅が言ったのか？」

「ええ、あなたが寝ている間にお父様が帰ってきたから軽く説明しといたわ」

「そうか、ありがとう。それよりなんて呼べばいい？」

「不平等で構わない」

「そうか、では不平等よ、頼みたいことがあるんだが．．．」

「なんだ？だいたい言うことは聞いてやるっ」

「そうか、ならちよつと言ってみよつと。ふひひひひ．．．」

「妹紅を俺に下さ「死にたいか？ジャキン」いえいえ冗談ですよ」

怖っ！なんか不平等の両手に刀が出てきたんだけど！どこに仕舞ってたんだ？

「・・・／＼／＼（フリーズ中）」

「ん？おーいもこー？もーこたーん？・・・反応がねえな」

「それより本題はなんだ？さっきのが本題だつて言ったら斬り捨てる・・・！・チャキン・」

「うおっ！その刀仕舞えつて！で、本題はしばらくこの家に泊めてもらえないか？つてことなんだが・・・大丈夫か？」

「・・・できたら拒否したいとこだが妹紅を助けてもらった恩があるしな」・ギリギリギリ！・

「いやいや！そんなに嫌なら拒否していいって！」

「じゃないと妹紅に触れただけで斬られそうだよ！」

「拒否したいと言つのは冗談だ。歓迎しよう」・スッ・

「・・・絶対目が本気だつた」

「気のせいだ」

「はあ・・・俺は不死だが痛いもんは痛いんだよ」

「それよりもお前ー」

「ん？なんだ？」

なんかあつたっけか？

「――妖怪だろ」

「・・・！！」・ババツ！！

油断した！一応妖力を抑えてたのにバレるなんて！

「ああ警戒しなくていいぞ。退治する気は無いからな」

「・・・なんでだ？」

「私には能力があつてな、それが、本質を見抜く程度の能力、なんだ」

「・・・つまりは嘘が効かないってことか」

「・・・と言うことは俺が妖怪だつてことを見抜き、そして害が無いってことを見抜いたってことか」

「そうだ。でもお前の本質はバカだつたのによく理解できたな？」

「誰がバカだ！」

ちくしょう！なんだよ本質：バカって！

「それよりもここに泊まりたいって話だったな。別にいいぞ」

「そうか、・はあ、」

ん〜疲れちまったな。また寝るか

「後泊まるんなら対価として妹紅の護衛と話し相手になってもらいたいんだが」

「．．．対価取るのかよ。まあそれくらいなら別にいいけどね。たのまれなくてもしてただけ」

妹紅のことは気に入ってるしな

「．．．そうか、ありがとう」

「ん、聞きたいことがあるんだがいいか？」

「．．．私が妹紅の相手をあまりしていない理由か？」

「ああそうだ」

おそらくだが、妹紅があんな森の中にいたのは不平等が理由のはず。ならば今言った相手をしていないのが理由だろう

「．．．実はな、今町で噂になってるかぐや姫という者に興味があつてな、いつもどうにかして会えないかと考えているんだかなかなか会えない。これはどうしたものか？と思いつけていたのだがそのせいで最近そのせいで妹紅の相手をするのを忘れてただけのこと」

「．．．バカなのか」はあ．．．

「バカにバカとは言われたく無いな」

「・・・お前は子供か（ぼそっ）」

「にしてもそうか、妹紅が突然家を抜け出したのはこれが原因か。危ないことをしたものだな」・はあ・・・」

「・・・わかったなら妹紅の相手をしてやれよ」

「それはまだ無理だ」

「なぜだ？」

俺が思うに不平等は妹紅に冷たい訳ではない、むしろ親として愛してると言っつていいだろう（今禁断の親子愛だとか思っつた奴表に出ろ）。なのに何が駄目なんだ？

「今はかぐや姫に会つてみたいからこれから家にも家に居る時間は少ないからな」

そうか・・・ん？いや待てよ？確か東方のかぐや姫つてあれ（・・・）だよな？なら不平等の能力は本質を見抜くんだからあれに会おうなんて思わないはずなんだが・・・

「なあ不平等よ」

「なんだ？」

「かぐや姫の本質は見てないのか？」

「・・・私の能力は本人を直接見ないとわからんのだよ」

そうだったのか・・・

「だがかぐや姫を娶るのは難しいと思っぞ?」

「ん?誰がかぐや姫を娶りたいと言った」

え?

「違うのか?」

「ああ、ただの興味だ」

マジかよ・・・

「なら別にいいじゃねえかよ!」

「何を言う!世界で一番美しいと言われてるかぐや姫だぞ!一回ぐらい会ってみたいだろう、例え中身がきたなくとも」

・・・はい、ここのかぐや姫は中身が怠けることと暇つぶしを考えてばっかです。絶対本質を見たらなにこれ?って思うよな

「・・・そうか、がんばってくれ」

「ああ、後お前の世話は翠みどりにまかせる」

「翠?」

「お前をここまで案内した使用人だ」

「・・・あああの人ね」

「まあこの屋敷に居る使用人は翠だけだな」

・・・え？マジで？

「このでっかい屋敷を一人でどうにかするってどんな化け物だよ・・・」

あの完全で瀟洒なPA 長だってメイド妖精を雇ってるんだぞ（あまり役に立って無いようだが）

「それは翠の能力でどうにかなってる」

「・・・本当にどんな能力なんだよ」

すっげえ気になる

「それは翠に聞いてくれ。それより妹紅、そろそろ起きろ」「ブン」

「・・・ガスツ、痛い！なにになんなの!？」

・・・ずっと居たのに喋らなかつたのってまだフリーズしてたのかよ

・決して作者が忘れてた訳ではありませんよ？ええ違いますよ？・

「そんなことより今はもう暗い、今日のところはもう寝てしまいなさい」

「痛たたた、そうね、もう寝ようかしら」

「そうだな、眠いし寝るか」

「・・・あなたはずっと寝ていたでしょう？」

「それでも眠たくなるもんだよ」

「それでは失礼、私も寝させてもらおう」

「ああお休み〜」

「お父様お休みなさい」

「また明日の朝に会おう」

それじゃあ眠るか・・・

「客室はこちらです」

「いや、俺は覚えているからいい。それよりそこで船を漕ぎだした妹紅を部屋に送ってやってくれ」

「・・・」
「じつくり、じつくり」

「そうですね？ならばそうさせていただきます。妹紅様、部屋はこちらですよ。千夜様、お休みなさい」
「ペこり」

「・・・ん」
「じつくり、じつくり」

「ああお休み」

さて、寝るか

もこたんの家にINしたお！（後書き）

やべえ．．．船を漕ぐもこたんを想像したら鼻から赤い情熱が出そう（>人<;）

そんなことよりこんな小説を読んただきありがとうございます！これからもできたら応援してやって下さい！

．．．俺この家に来たのは早まったかな？（前書き）

ちなみに今の妹紅は黒髪的美少女です

さあ今回も頑張ろうか！

「．．．俺この家に来たのは早まったかな？」

ういつす、俺は千夜だ。ただ今ちようど起きたとこなんだが．．．

「．．．食事はどこでするんだ？」

そうだ、どこに行けばいいかわから無いんだ

「．．．まあ適当に歩いてた」「おはようございます。千夜様（ペー）
り」「うおっ！いきなり後ろに出てくんなよ！」

「すみません。食事はこちらです」

「．．．うん、反省して無いよね？」

「これから気をつけさせていただきます」

「．．．そうか、案内してくれ」

もう諦めたよ．．．

「かしこまりました。こちらです」・スタスタ・

「ああ、朝から疲れたよ。もう寝ていいかい．．．？もこラッシュ」

あれ？なんか必殺技の名前みたいになっちゃった

「．．．」・スタスタ・

しかも反応が無いし

「こちらです」

「そうか、ありがとう」

「いいえ、それでは失礼します」・スタスタ・

本当にやることだけやってすぐどっか行っちゃうよな。家政婦のタです。的なの？あそこまで常識知らずでは無いけど

「まあいい、それより朝食を食うか」・スー・

「これは私のよ!」「何を言う!私の皿から奪うな!」「いいでしょう!育ち盛りなんだし!」「大人しく座って食いなさい!」「じゃあその変わりこれを貰うわ!」「どんな理屈だ!」「ギヤーン!・・・シュバン!・・・バキヤン!・・・

「・・・」・スー、ストン・

俺は何も見なかった。さて部屋に戻る「スパーン!」何をやってるの千夜?早くこっちに来なさい!・・・逃げれなかったか、と言うかなんで箸であんな音が出るんだよ・・・

「・・・なんでこんなに争ってるんだ?」

「何を言う(ってるの)?食事は戦争だぞ(だわよ)?」「

「・・・息ぴったしですね。それはもう俺が入れ無いくらいに」

できれば俺はこの二人と別な場所で食いたいな

「何を言うんだ、この家に居候するならこれくらい慣れてもらわないと困るぞ?」

「?これが普通じゃ無いの?」

「断じよう、これは絶対に普通じゃ無い」

これが普通でたまるか!

「そうなの?あまり外と交流が無いからわから無いわ」

そういえば妹紅って隠された娘って設定だったっけ?確か妹紅は三女より上って... 忘れた

「...そうなのか」そーー

「そうよ。で?沈んだふりしてどこに行こうとしているのかしら?」
「ガシッ」

「ビクン!...いや聞いちゃいけ無いこと聞いちゃって気まずいから俺は一旦出て行こうかなって思って「気にして無いから。座りなさい」ズウン!...はい」

なんなんだこの威圧感は!剛鬼(第10部参照)よりも怖いぞ!

「...」パクパク

不比等は我関せずずっと食いつばなしだし...

「あー！お父様それを渡しなさい！」・・・シュピーン！・・

「．．．ふん！」・ガキヤーン！・

俺こんな家でやってけるかな．．．はあ

――――

「それでは行ってくる」

「．．．またあの女のとこに行くの？」

「ああそつだ」

「なんでよ！別に行かなくてもいいじゃ無い！」・ダン！・

おお千夜だぜ！ただ今食事が無事に終わった（不平等と妹紅ってずつとおかずの取り合いをしていたがさすがにこつちまでこなかつた．．．慣れてきたら俺も狙われそつだけど）ら今度は親娘の修羅場を見せられてる．．．正直もう腹一杯なんだが（二つの意味で）

「それでも行くんだよ。」

「なんで．．．なんでなのよ．．．！」

あ、それを聞きちゃ

「好奇心だ！」・ドン！・

「・・・え？」

「やっぱりそういう反応になるか。ていつか今まで説明して無かったのかよ」

「不比等よ、妹紅に説明して無かったのか？」

「ん？ああ聞いてこなかったからな」

「・・・そんな理由で今まで私の相手をしてくれなかったの・・・
？」・プルプル・

「そうだ！」・ドン！・

「なんでさっきから不比等はドヤ顔なんだよ、後気付いて無いようだが妹紅が怒りでプルプル震えてるぞ？」

「お父様なんて・・・」・プルプル・

「ん？どうした妹紅？廁なら向こうだぞ？」

「あーあ、それは言ったら・ブチン！・・・なんか切れてはいけ無いものが100本くらい同時に切れた音がしたぞ」

「お父様なんてもう帰ってくるなー！！」・ガオーー！・・・ブウン！・・・

「どうした妹紅？そんなに猛って」・ヒュパン・

「なんでそんなに冷静なんだよ不比等！」

今あったのは妹紅が殴りかかってそれを不比等が横から平手打ちをして受け流したんだ。にしても女性の本気の怒りはマジで怖いぞ、昔永琳と居た時にちょっとしたミスで本気で怒らせた時があったんだがあの時は確か・・・（ピーーーー）駄目だ思い出してはイケナイ、詳しく描写するとR18指定になってしまう（もちろんグロテスクな方で）

「ん？妹紅はたまにこうなるからな」・シュツ、パァン！・

え？何それ怖い

「ウガーーー！」・ビュビュビュビュ！・・・

「はっ！」・シンシンシンシンシン！・

・・・なんだあれ？お前ら本当に人間か？妹紅が拳を分身してるように見えるくらいの速さでパンチして、それを不比等が受け流す。・・・言うのは簡単だが実際にやるのは不可能に近いぞ？不比等なんて受け流しが完璧すぎて妹紅のパンチが自分からそれてるように見えるし

「それでは行ってくる」・・・ピシン！・・・

「あ痛！」・バツ！・

「・・・ああ行っていい」

今の戦い：勝者不比等、決まり手はデコピン

「うっっっ！お父様のバカー！」

「ほらほら俺が居てやるから元気だせ」・なでなで・

「むっ／＼／＼」・ポスン・・・

「おおっと・ストーン・どうした？」

なんか妹紅を後ろから撫でてたら寄っかかってきたからバランス崩して倒れそうになったからあぐらをかいた状態で座ったらその足の間に妹紅が座ってきた

「ん・・・こてん・疲れたからしばらくこのままでいさせて？」

「・・・別にいいぞ」

「ん・・・」

・・・やべえ、俺ロリコンじゃ無いのに甘えてくるもこたんにやられそう

「・・・スー」

「・・・寝ちまったか」

できれば今居るところが玄関（に近い場所）だから移動したいんだが・・・こんな時に翠さんが居たら「お呼びしましたか？・スツ」
うおっ！

「いつから居たんだよ！」

「?今きたばかりですが、なにか問題でも?」

「いやいやタイミングが良すぎるだろう!」

「そうですね、それでは妹紅様を寝室まで送ります。千夜様はどうなさいますか?」

・・・もういいや

「・・・俺も寝させてもらつよ。今日は朝から疲れたし」、はあ、

「そうですね。おやすみなさいませ。ペこり、それでは失礼します」、ヒョイツ・・・スタスタ、

ああ、まだ朝早いけど寝るか。信じられるか?あんなに色々あったのにまだ起きてから一時間もたつて無いんだぜ?だつて起きた朝食 修羅場 不比等出発だもん。それでも俺は寝るけどな!

「スタスタ・・・スタン、よし客室に着いた。さてと寝るか」

それでは皆さんお休み

〜昼時〜

ふあ〜、まるで夜更かしした後みたいにならずと寝てただぜ!まあ夜更かししなくてもこんなもんだけど

「さて・・・起きるか」、グ・・・ポスン、

あら？なにかが抱きついてて起き上がれ無い、「ううーん、もぞもぞ」・・・今の声は・・・

「バツ・・・なんで妹紅が俺の布団の中に入ってるんだよ・・・」

「ん〜、あれ？千夜起きたんだ〜」にぱ〜、

お前は某なく頃にの魔女か・・・しかし不覚にも萌えてしまった。
「ズめっちゃ寝ぼけてるし・・・」

「なんで俺の布団の中に入ってるんだ？」

「ん〜それはねえ、おこしにきてきもちよさそうにねてたからわたしもねむくなっちゃって〜」ほにゃ〜

・・・やべえ、可愛い・・・俺ロリコンでいいかも

「それよりみどりがちゅうしょくできたって〜」

「そうか、わかった」

「じゃあはやくきてね〜」トテテテテ〜

ああそんな寝ぼけてるのに走ったら「ぶぎゅ!?!どてっ〜」やっぱりころんだか

「それじゃあ俺も行くか」

「「ご馳走様でした！」」

「お粗末様です」「ぺこり」

ふー！食った食った！特に何も無く食事が終わった（妹紅は大人しかったぜ！）。それにしても翠さん「翠で構いません」・・・そうか（考えを読まれるのは諦めた）、翠が作った飯は美味しいな！できれば嫁に欲しいぜ！」

「あー！何を言ってるの！翠は私の家の大事な使用人なんだから渡さないわよ！（それに千夜は私と！・・・何考えてるの私！？）」

なんだなんだ、また声にでてたか。妹紅は怒ったり赤くなったり忙しそうだな。・・・そういえば翠からの反応が無い

「・・・／／／」「ぼ〜」

「・・・翠？どうしたんだ？」

「／／／・・・はっ！し、失礼しやせていただきます！」ドタドタ

・・・珍しく翠が焦ってたな。そんなに俺とそうなるのがイヤか？

「やっぱりこいつバカだ」

「・・・（翠も千夜のが好きなのね・・・！）も”って何よ”も”って！）」

「ふー、じゃあ俺は散歩でも行ってこようかな？」

「．．．（いやたしかに千夜のこととはかつこいいし気に入ってるけどそれは別に好きって訳じゃあ．．．あれ？好きってなんだろう？もしかしたらこれが．．．）」

「ん？あー、また妹紅が反応無い状態になってるし、しょうがないから翠に「ガシャーン、キヤー！」．．．は無理そうだな。黙って出てくしかないか」

え？行かないって選択肢は無いのかって？そんなのは存在しない！俺は今どうしても散歩に行きたいんだ！．．．決して暇だからという理由では無いぞ？

「それじゃあ出発！」

「いやいや他の理由である可能性も．．．ぶつぶつ」「バシヤーン、うみゅっ！」

．．．後ろから聞こえてくる音は気にしないで行こう．．．なんか翠の悲鳴がやけに可愛いかったぜ

．．俺この家に来たのは早まったかな？（後書き）

翠がちょっとでも可愛いと思ってくれれば嬉しいです

そんじゃあまた次回！

ぐーやとの遭遇（前書き）

PV10000突破！ユニーク10000突破！

果てしなく今更ですね（ ）ゞそれでもこんな小説を見て下さ
つてる皆様に感謝を！！

まあ小説検索の新着順の一番上にあつたから読んだって人が大半な
んでしょっね・・・

そ、そんなことより本文をどうぞ！

ぐーやとの遭遇

「あなたちよつと待ちなさい！」、バツ、

「だが断る！」、ひらっ、

俺が千夜なのさ！ただ今町の中を爆走中です。理由は後ろで追いかけてきているなよ竹のかぐや姫（笑）のせい

「あなたのせいで私は……私は！」、ビュウン！、

「ズパン！……うおっ！俺とお前は初対面のはずだぞ！」

都市にいた頃はずっと永琳の家にいたし、最終的には繁華街とかが行ったけど俺は妖怪だからお偉いさんには会えなかったし（会おうともしなかった。永琳もお偉いさんだが都市最強でもあるので別）

「あなたのせいよ！私が永琳にお仕置きされたのは！」

「知るか！お前は早く讚岐造ちぬきのやしろの家に帰れ！」

讚岐造っていうのは竹取の翁の名前な

「あの家は暇なのよ！……確かにお爺さんたちはいい人たちだから居心地はいいんだけどね……」、しよぼん、

（無視）では出会った時の回想をどうぞ

〈回想〉

「ふう．．．これでだいたいは回ったな」

ういっす！今はもうだいたい町を見終わったときだ

「あゝ、竹取物語の舞台になる翁の家に行つて無いな」

せっかくだし行くか

〈青年移動中．．．〉

「ここか．．．」

思つてたより大きくないな．．．

・それは藤原の家を先に見てしまったからです・

「まあいいや、それより人で溢れかえつてると思つたんだが一人もいないな．．．」

・今はもう竹取物語でいうと色好みの5人の公達しかいない時期です。ようするに興味だけでぐーやに会おうとした人たちはまったく会えないので諦めた頃です。．．．じゃあこの不平等はなんなんだろうか？・

「んゝ、とりあえずもう見たから帰つてもいいんだがな。それはなんか負けた気がするから家の周りを一周したら帰ろう」

〈青年巡回中．．．〉

以下感想

「おお、あの壁にある棘は不審者対策か？」

「あそこは・・・やけに部屋がでっばってるな」

「お？地面に穴が空いてる・・・やけに深いな。掘った人頑張りすぎだろ。」

「ん？あそこに怪しい人影が・・・」

感想終わり

ん、あれは見た感じ女かな？

「・こそこそ・（人がいなくなったから家から出よつと）」

む、警告するべきなのか問答無用で捕まえるべきか・・・

「ん？・・・黒い髪、黒い目、普通な容姿・・・そして決めてはバカっぽい雰囲気！さてはあなたが千夜ね！」

「ちよつと待て！」

なんでそんな特徴で俺だって断定すんだよ！絶対俺よりバカがいるつて！

・バカがバカをバカにしてるのつてバカっぽいよね・

「そんなことはどうでもいいのよ！あなたが千夜なのね?!」

「ああそうだがお前は誰だ？」

はて？こんな美人（失笑）に会ったなら覚えてるはずなんだが？

「ふん！私の姿を見てなんか思わないのかしら？」・ピシッ・

なんか決めポーズをとりだしたんだが・・・たしかに素材がいいだけに中々決まってるんだが性格を考えるとちよつと・・・

「・・・なんか反応しなさいよ！」・ビュッ！・

「・・・おっと」・シュパン・

不平等の受け流しが真似できたぜ！

「なによ！当たりなさい！」・ババババツ！・

「ほつと」・パンパンパンパン・

でもさすがにあそこまで完璧にできないな・・・要練習かな？

「~~~~！こうなったら！」・ジャキン・

「ん？刀か？・・・」

おかしい、こいつは発言と容姿から察するにかぐや姫（爆）なはず・・・
・ならば未来武器的なものを出すと思ってたんだが

「それっ！」・ブウン！・

「そんな大振りが当たる訳がなあっ!?」・ズッ!

なんだあの刀は!今軌道が90°以上に曲がったぞ!水の盾が無かったら一刀両断されてた...

「残念だったわね!この刀は都市製で自動追尾機能がついてんのよ!」

「なんかドラ もんでもそんな道具あつたな!」

・名前は忘れまして・

ちくしょう!あのかぐや姫(確定)は俺を殺す気か!

「三十六計逃げるに如かず!」・ダッ!

「あ、待ちなさい!」・タッ・

意味がわからないのに切られてたまるか!

〈回想終了〉

「ちょっと...はあ、待ちなさいよ...はあ」

「...お前体力無いんだな」・ふう...

まだ走り始めて10分たって無いぜ?

「仕方ないでしょう!私は生粋のお嬢様なのよ!」・キーー!...

「その割にはお嬢様っぽく無いな」

「・・・あなたは永琳相手にお嬢様な性格でいられると思うっ？」

「・・・なんかすまん」

「もういいわ」「はあ・・・」

「それよりなんで俺は追いかけられたんだ？」

もうだいたい落ち着いてるし聞いても大丈夫だろう

「ああそれね、それはこういうことだわ」

くぐーやの回想ON

ーカゲヤsideー

・こここそ・・・今私は永琳の部屋に潜入しようとしてるわ

「まったくもう・・・私は勉強なんてしたくないって言ってるのに」

こうなったら永琳の弱みを握って勉強を無くすお願い（脅迫）しな
いと・・・

「ふゝ、ここが永琳の部屋ね」

いつも部屋に入れてくれないから中がどうなってるのかわからない
けど・・・あんだだけ嫌がってたってことはなにかあるでしょう！

「カチャリ．．．失礼しまーす．．．」

．．．よし、畏は無いわね？

「ゴソゴソ、ん、なんにも見つからない」

おかしいわ、私の感がなにかあるって感じてるのに．．．

「ん、ゴソゴソ、むむ！ キュピン、そこだ！」 ガシッ、

ん、なになに？これは日記かな？

月×日

今日は面白い妖怪を発見した。完全な人間型の妖怪だ。今まで鬼など人間に限りなく近い妖怪は発見されていたが完全なのは今回が初めてだ。だからはその妖怪にこれから色々実験させてもらう。

ふむふむ、永琳らしいわね

同日 夜

彼のことが気に入った！千夜と言う名前らしい。これから一緒の家に住むことになったから色々教えてあげようかしら？ふふふふふふ．．．

えっ！？今の短い間になにが！？

月×日（次の日）

彼が時々わからない言語を使うことを理解した。確か言ったのは「最初から最後まで」くらいまっくす”だぜ！（逃走中）”とか「俺の好きな言葉は”ぱわーおぶじゃすていす”だ！（特訓室で雑魚敵相手に無双中）”とか所々にわからない単語がある。これを理解すれば千夜のことのもっとわかるはず・・・

ん？最後にちょっと怪しいかな？

月×日（何ヶ月か後）

千夜の言うこととの状況と展開がわかってきた。でもそんなことよりなんで千夜は襲ってくれないのだろうか？結構誘ってるつもりなのだけどここまで何も無いと心配になってくる・・・

あれれ？

月×日（千夜が町に出ることが許可されてからしばらく）

・・・なによなによなによ！なんなの女どもの色目は！千夜は私のものなのに！こうなったら千夜に色目を使ったらその女を監禁して調教してあと・・・（ここからは赤く染まって

いて見れない)

「ひいっ!」「ばっし」

早くここから逃げないと!

「ダダダダ!」・・・!「ガチャガチャ!」なんで扉が開かないのよ!」

どうしたら!「カグヤ?私の部屋でナにヲシてイルのかしら?」ひい!

「あ・・・あ・・・あ・・・ガクガクガク」

「ちょっとO H A N A S Iをしましょうか?」「ズルズル」

いやーーーーー!

〜回想終了〜

「ということなのよ!」「でん!」

「完全に八つ当たりじゃねーか!」

それにしても・・・仲のよかった女性(見た目24歳くらい)が突然引越したのって・・・「ガタガタ」

「まあそのことはもう気にしてないからいいわ」

「とういかなんで俺がその千夜だつてわかつたんだ？」

今の回想では出てないはずなんだが？

「ああ、それは簡単に言つとその日記の最初の紙に千夜の詳しい情報と絵があつたからよ」

そうだったのか・・・

「ふう・・・暇はつぶれたけど疲れたわ。そろそろ家に帰って寝るとしましょう」

「そうか、それじゃあ縁があればまたな」

「ええ、また会えたら会いましょう」「ザッザッ」

それじゃあ俺も帰るか

↳藤原の家に到着

「おいつすー、戻つて「千夜ー！ー！ドーン！ー！」「ぐほっ！ー！」「ビターン！ー！」

「なんで急に家からいなくなったのよ！」「ブンブン！ー！」

「ちよっ、妹紅頭がヤバイからやめ・・・！」「ぐえっ！ー！」

翠はそこで見てないで止めてくれよ！

「・・・」「ぼー！ー！」

まだ回復してないのかよ！

「…………ピタッ」

お？止まった？

「…………今私じゃなくて翠のこと見てたでしょ」

え？

「なんで…………なんで翠のことばっか見て私のことを見てくれないのよ！」ガッ」

痛！妹紅に足の爪先でガッってされたんだけど！

「なんで！なんで！」ガッガッガッ」

「痛い！痛いって！別に翠だけじゃなくてお前のこともちゃんと見てるし！」

「…………／／／」プシユ」

「…………／／／」プシユ」

あら？妹紅と翠が同時に顔を赤くして止まっちゃった

「…………こそこそ、ねえ翠」

「…………こそこそ、なんでしょうか妹紅様？」

「ここは私たちが争うよりも協力してこれ以上女を増やさないようにしたほうがよくない?」

「そうですね、妹紅様がよろしいならば私はそれで「私は貴方の意見が聞きたいの。ただ主の言うことを聞くだけの使用人なんて私はいらぬわ!」ドン!」

「そう、ならばこれからよろしくね?」

「はいっ!」

「・・・なんか俺の話題のはずなのに俺の関係が無いところで話が進んでる気がする」

気のせいかな?それじゃまた次回

ぐーやとの遭遇（後書き）

また次回へ

日常？（前書き）

駄ぶ（ry グダグ（ry それでもいいという方だけどうぞ！

日常？

むいゝ、千夜なんだぞ。今すごいダレてるよこなんだ。最近なんかイベントがたくさんあったからね。ああ、一人旅をしていた頃が懐かしい……

- まだもこたんの家に来てから三日しかたっていてません -

まあそんなことよりも今日はゆっくりするか「スパーン！千夜！旅の話をして！」……妹紅がきちまった

「今日はゆっくり寝てたいんだが……」

「えー！そんなの私が暇だからいやよ！」

「は、仕方ない。じゃあ少しだけ話てやろう」

めんどくさいな……

「ワクワク」

「うわっ！また翠が急に出てきた！」

しかもワクワクって言うてんのが棒読みだし！

「お気になさらず続きをどうぞ」

あ、ああ、そうだな……ゲフン、あれは俺が一人旅をしていた頃の日常だったな……

く思い出す

「はあっ！」、バンバン！、

もつと！もつとだ！

「はあああああ！」、バババババ！、

うおおおおお！

「ひゃっつっはー！ー！ー！、バカー！ー！ー！、

ふう、落ち着いた。え？何をしてたって？

「ぐおおお．．．」「ぎゃう．．．」「．．．」

ちよおつと実験をね

「この技は強いけど疲れすぎるな．．．」

ちなみに今回やってたのは、水爆弾は手で投げるからどうしても弾速が遅くなってしまう、ならば水で銃身を作って一つの水爆弾を火薬としてもう一つの水爆弾を弾にしてみたんだ。それでそこら辺にいた妖怪に攻撃（爆撃）してみたら予想以上に威力が高かった。今までの水の銃は銃身の中にある弾を水で押し出すって感じだったからな

「それにしても．．．この打った感じはハマルな」、じゅん、

「テテテテッテテ！千夜は”トリガーハッピー”の称号をてにいられた！これから水の銃を使うと凶化する変わりに弾幕が強制的にルナティックモードになります」

「おっと、この妖怪の血の臭いで新しい妖怪がくる前に逃げるか」

別に来たら殺せばいいんだが今は疲れてるからめんどくさい

「タッタッタ・ふう〜、とりあえずここまでくれば大丈夫かな？」

さてどうするか、実験は終わっちゃまったし何もすることねえや・・・

「・・・暇だし修行でもするか」

（青年修行中・・・）

（一部抜粋）

「水の剣」

「まずは水の剣を練習するか」

今まで剣道すらやったこと無いからな。戦争の時は適当に振ってれば当たったし、なにより妖力に反応して自動追尾にしたからな。これから強い妖怪と会った時に自動追尾だけじゃ効かない奴が出てくるかもしれないしな

・水の剣は自動追尾がありますが、それは追尾するだけで後は剣に鋭さ（切れ味）だけで斬っている。つまり触れるだけで斬っている状態です

「さて、素振りでもすればいいのかな？」

よしっ！物は試しだな！

「せいっ！ーブンーはっ！ーブンー」

〜一時間後〜

「・・・せいーブンーはあ、ーブンー」

〜二時間後〜

「・・・ブンーーブンー」

〜三時間後〜

「・・・飽きた」「ぽいっ」

どうしよう・・・お！そうだ！

「これなら...」

・おや？どうやら千夜は何かを思いついたようですな・

「はあー！九・頭・龍・閃！」ズパパパーン！

はい！思いついたのは漫画・アニメのパクリでしたー！

・ちなみに今やった九頭龍閃は単に水の剣が9本に別れて斬っただ

けです。元ネタはるる に剣心 -

「正直我流はできる気がしないからな、いろんなどこから技を貰ってがんばるか」

じゃあ他の武器もそうすっかな

く水の銃く

「あーっはっはっはー！」「バンバンバンバン！」

・千夜はスキル”トリガーハッピー”が発動した・

「ヒーーーーハーーーー！」「ダダダダダ！」

・千夜が暴走中のためしばらくお待ち下さい・

「はあ・・・はあ・・・」

あれ？なんでこんなに疲れてるんだ？

・スキル：トリガーハッピー（凶化）は強くなる代わりに体力をとっても消費します。そして本人は凶化していることに気付いてません・

「ふう、疲れたが他のもやんないとな」

く水爆弾く

は特に無し

く水レーザーく

「・・・そういやこんな攻撃もあつたな^{レーザー}」

・見直すまで忘れてました(>人< ;) ・

「まあいいや、とりあえずレーザーも追尾するようにならうかな?」

く千夜レーザーの使い道を考え中・・・く

「ん、そうだ!じゃあレーザーはマスパみたいにしようかな?」

・さらに千夜の弾幕の鬼畜度がアップ・

「けどな、あれじゃあ燃費が悪そうだしな。どうしよ?」

ん、そうだ!

「じゃあ拡散型のレーザーにしよう!」

上の方に一発マスパ並に太いのを発射して上空でレーザーが留まっ
てそこからちよつとずつレーザーが降ってくる的な?

「とりあえずやってみるか」・シューウウウウ・・・

「はっ!」・ドオン!・・・

・ゴオオオオオ!・・・

「お、うまくできそう!」・ビビビビビ!・・・な、なんだ!?」

「ブシャアアアー！」

「うわっ！これじゃあ無差別破壊兵器だよ！」

今な、上空に行ったのはいいいんだが遠くなりすぎて水のコントロー
ルが悪くなってな、当初の目的だったちよつとずつ降ってくるよう
にできなくてすごい量が降ってくるんだよ。まあレーザーだから軌
道が真っ直ぐなのが不幸中の幸いかな？

・そういうことなので千夜と弾幕ゴツゴをやると千夜は強制的にル
ナティックモードになります・

「まあレーザーはこれでいいだろ」

そろそろ疲れたし寝床を探して寝るか

〈修行終了〉

「……がさがさ……どこか寝れる場所無いかな」

まあ別に水のバリアを張つとけばどこでも大丈夫な訳だが……そ
こら辺は気持ちの問題なんだよ。例え安全だとしても虫とかがワサ
ワサしてる所で寝たく無いだろう？寝たい奴がいたらそれはただの
変人だ

「ん……がさがさ……を？広い場所にでたな」

今居るのが何も無い草原だ

「ん〜ちらっ．．．森の中で眠るよりかはいいか」

もうだいぶ暗くなってきたしな

「じゃあもう寝るか」・ふあ〜

お休み〜

〜思い出終了〜

「と、旅の途中はずっとこんな感じですよ〜いい暇だったんだよね〜。

・ていうか妹紅はもう寝ちゃってるし」

「〜ぐ〜．．．ぐ〜．．．」

「すみませんが、妹紅様は話始めた頃にはもう寝ていました」

「早いなおい！そんなに寝たかったんなら最初から自室で寝てろよ
！」

喋り損だよこのやろう！

「私は聴いておりましたので喋り損では無いかと．．．半分以上
理解できませんでしたが、ぼそっ」

・まあ昔の人だからアニメの技とか修行の話とかされても意味がわ
かないだろうしね？それに翠は色々と規格外だけどあくまで一般
人だから・

「あ、そうか翠が居たんだよね。で？どうだった？俺の思い出は」

「．．．素敵だったと思いますよ?」

「．．．素敵に思えたのかよ」

昔の人の感性が俺にはわから無い

・いいえ、理解できて無いのでとりあえず素敵って言っただけです・

「まあいいや、妹紅が寝たし俺も寝るわ」

「はい。お休みなさいませ」・ペリリ・

「ん」

さて寝るか

（千夜睡眠中）

「ぐー．．．ぐー．．．」

「．．．妹紅様?」

「びくん．．．ぐーぐー」

「わかりやすいですよ?」

「．．．何よ」

「お部屋に戻らないのですか?」

「．．．私はちょっとやることがあるから翠は仕事に戻っていいわよ?」

「．．．私もすることがありますので妹紅様はお部屋に戻って下さい」

「．．．翠?あなたは私の従者なんだから主人の気遣いを無下にしては駄目よ?」

「妹紅様に”言うことを聞くだけの使用人はいらぬ”と言われてしまったので」

「．．．あの翠が言うようになったじゃない．．．!」

「私は自分の意見を持ちましたので。だから言わせて貰います．．．抜け駆けは駄目ですよ?」

「くっ．．．はあ、しょうがないわね、その代わり翠も抜け駆けしちや駄目だからね?」

「はい．．．妹紅様」

「なに?」

「．．．やはり私は主人の言うことを聞くだけの従者の方がいいのでは無いかと思う」それはだくめ!私は今の翠の方が好きだよ」
．
．
．
「．．．そうですか」

「じゃあ翠も一緒に寝ましよう!」

「えっ！・・・／＼千夜様とい、一緒にですか!？」

「そうよ？それ以外になにかあるかしら？」

「い、いえ・・・では失礼します／＼」・ぽふん・

「あー！主人より先に入ってるー！私もー」・ぽふん・

「／＼」・ぷしゅー・

「・ニコニコ・

く
昼く

はく、よく寝たく。最近朝起きてまた寝るっていう二度寝が多くなってきたな。それじゃあ起きるか、よっ・・・ぐっ・・・すとん
・あら？また起きれない。ってことはまた妹紅かなつと・ばさっ・

「・・・／＼（顔を赤くしながら幸せそうに寝ている翠）」

「ぶほっ!？」

なんで翠が俺の布団の中に入ってるんだよ！

「・もぞもぞ・千夜ー、うるさいわよー」

「ああ、すまん。じゃない！なんで翠がここに居るんだよ!」

「なによく、翠がいちゃいけ無いつて言うのく?」

いや、そういう訳じゃ無いんだが・・・

「・・・はあ、いいや、それよりも昼飯はどうすんだ？」

「そんなの翠がいつでもどつり作ってくれてるでしょ？」

「・・・いや、その翠がここに居るから聞いてるんだが」

「・・・あつ！」

気付いてなかったな？

「・・・しょうがない、今回は俺が作るか」

「えっ!？」

なんだよ

「そんなに意外か？」

「・・・ええ」

「じゃあ作ってくるから待ってる」

（青年調理中・・・）

「できたぞー！」

「できたの？」

「申し訳ございません！お客様に料理をさせるなど！どうか私にお仕置きを！．．．お仕置き．．．どんなのなんでしょうか／＼／」

．．．あれ？また変態増えた？．．．

「．．．いやお仕置きなんてするつもりは無いんだが」

なんか翠から悪寒がするんだが．．．ぶるり．．．（最後のほうは聞こえてなかったようです）

「いえいえ！こんなことをさせてしまった私にどうか罰を！」．．．はあっはあっ／＼／．．．

「翠が暴走してる！？しつかりしなさい！とりあえず食事が冷める前に食べるわよ！せっかく千夜が作ってくれたんだから！」

「千夜様の手作り．．．！そうですね、とりあえず食事をしましよ
う」．．．キリ．．．

．．．相変わらずこの家は切り替えが早いな

「．．．はあ．．．．翠は落ち着いたのか？まだ落ち着いてないようだったら翠は食べちゃ駄「落ち着きました！」．．．そうか」

キャラ崩か（ryとりあえず食べるか

「．．．いただきます！」

（食事中）

「食事終了」

「「「ごちそうさまでした」」」

ふう、食った食った。まあ相変わらず普通の飯だったけどな

「・・・orz」

「・・・なんで妹紅は落ち込んでんだ？」

見事に綺麗なorzのポーズだな

「妹紅様はお料理がまったくできませんのでお料理ができてしまった千夜様に対し”私もお料理できないと駄目かな？”と考えたのだと思います」

・・・なるほど、それで料理ができないという現実にはぶつかってorzとなったのか

「「「りゃどうしようもないな、とりあえず俺は散歩に行ってくるわ」」」

「行ってらっしゃいませ」・ペーりー

さて、今日もぐーやにエンカウトするのかな？一応不平等がぐーやの家に行ったみたいだし、不平等の様子見がてら会いに行くか。今竹取物語で言ったらどれくらい話が進んでるのか知りたいし

「よしっ！目的も決まったし行きますか！」

ぐーちの家族GOO!

日常？（後書き）

小説書き始めて毎日投稿してる人のすごさがわかった。・・・（ノ）
（ノ）。。。とてもじゃないけど俺には無理です。

それではまた次回！

千夜です・・・この時代の価値観がわからんです・・・(前書き)

なんかして欲しいこと・ネタがあれば感想に書いて下さい!できる
だけ努力します!

千夜です・・・この時代の価値観がわからんとです・・・

「あゝ、この感じは五つの難題がでるところかな？」

よお、千夜だ。ただ今姿を隠して五人の公達が集まって何かを待っている所を見てる。このシーンは竹取物語でも有名なところだからわかる人も多いだろ？

「・・・暇だな」

さっきからずっとこの状態でいつまでたってもかぐやがでてこないんだ

「・・・お？翁が出てきたな」

五人が姿勢を正してる。ということはかぐや登場か

「んゝ、やっぱり姿は隠してるか」

なんて言えばいいんだろう？なんか簀の子型のカーテン的な？竹とかを細かく縦に裂いて隙間が無いように紐で一本ずつ繋げてるやつ。
・・・名前がわかんね、まあいいや。それでかぐやの影しか見えな
い感じになってる

「・・・なんかかぐやに言われてるようだがこんなところだから聴
き取れないな」

いる場所が50mぐらい離れてる木の上だからな。見ることはでき
るがまったく聞こえない

「・・・お？終わったつばいな。五人とも顔をしかめながら家から出てったぞ。・・・いや、不比等はそうでも無いな」

一見なんか考えてそうだがあれはなににも考えて無い顔だ

「・・・もしかして俺に任せるつもりか？」

いやいやそれはさすがに無いだろう

「・・・とりあえず不比等のところに行くか」

（合流中・・・）

「いたいた、おーい不比等ー！」

「おお千夜。こんなとこまできていったいどうした？」

「ちょっと不比等のことが気になってなー」

「・・・私にそんな趣味は無いぞ？」・ズザザ・

「いや俺にもねーから！だから尻を隠しながら後ずさるな！」

「冗談だ」

またかこの野郎！不比等は真顔で冗談言うからシャレにならん；

「ああそうだ。千夜に聞きたいことがあるんだが・・・」

「・・・なんだ？」

やっぱり蓬菜ほうさいの玉たまの枝えのことかな？

「・・・かぐや姫に会ったことがあるか？」

・・・ほう

「なんでそう思ったんだ？」

「ふむ、当たりか。理由はこの家まで真っ直ぐきてたよつだからな」

・・・なんだと

「一応気配は消してたつもりなんだがな」

「・・・いや、なにがと言うほどの訳でもないのだが」・ちらり・

ん？言葉を濁したな

「・・・気付いてなかったのか？」

「なにがだ？」

「・・・お前の後ろの方で妹紅が騒いでるぞ？」

・・・は？さつきから雑音が聞こえると思っていただけだ

・どうしよー翠ー、千夜見失っちゃったー・妹紅様、千夜様はここまで真っ直ぐにきていたようですからこの先にあるなよたけのか

ぐや姫の所に行ったのかと……またあの女かー！まってなさい千夜！私が目を覚まさせてあげるわ！……あまり無茶をなさらないようにお願いします。

「あゝそういうことか」

「そついうことだ」

そりゃあんなに騒いでたらわかるか……あれ？

「じゃあ他の公達にも聞こえていたのか？」

「いや、私以外はぐや姫に集中してて気付いた様子はなかったぞ」

「……よかった」・はあゝ・

覗いてたことがばれたら打ち首、良くてももうこの町にはこれないだろうからな

・豆知識：五人の公の名前は石作皇子、車持皇子、右大臣の阿倍御主人、大納言の大伴御行、中納言の石上麻呂で、そのうち車持皇子のモデルが藤原不比等と言われている。それがどうしたと思った人は先にGO！ -

「千夜、正直に答えてほしい」

「なんだ？」

かぐやのことか？

「かぐや姫の姿が美しいのは直接会ったわけではないが雰囲気ではなくなわかった。ならば中身はどうなんだ？その様子だと直接会って話ぐらいはしたのだろうか？」

「．．．あまりオススメはできないと言っておこう」

「そうかそうか」・クッククク・

「．．．なんなんだよおい、その笑い方は気持ち悪いんだが」

オススメはできないって言ったからさらに興味がでちまったのかな？

「いやなに、つまりは中身は綺麗ではないということだろうか？そんなこと言われたら余計見たくなってしまうではないか！」・ババーン！・

やっぱりか、ここで中身も美しいとかありきたりなことを言えば興味がなくなっただかもしれないのに、選択をミスったな．．．

・ようするに怖いもの見たさですね？自分もよくあります・

「そうか．．．なら蓬莱の玉の枝をどうにかして準備しないとな。千夜！なにか方法はないか？」

「ん〜それはな〜」

都市に居たころは普通の宝石店で売ってたんだけどな。まあそれは蓬莱の玉の枝に似せて作った宝石で出来た偽物なだけだな

・蓬莱の玉の枝は、蓬莱山にある金の根と銀の茎で白い玉の実がな

る木の枝のことである。また、東方の輝夜は本物を所持している。理由は後で・

「・・・どうするかな」

「わからないならそれでよい。自分で考えよう」

「偽物を作るでは駄目なのか？」

「そんな物では意味が無いだろう？」

「どういうことだ？確か竹取物語の車持皇子（不比等）は偽物を作らせてそれを持っていったんじゃないか？」

「そんなこととして会ってもつまらないだろう？どんな困難でも打ち破って会ってやるさ！」

「困難を打ち破れなかったらどうするんだ？」

「会えなかったら今までの苦勞が水の泡だぞ？」

「そのときは私がそれだけの男だったってだけさ」

「・・・無駄に男らしいな」

「そうか、ならどうすんだ？本物の蓬萊の玉の枝なんて存在すんのかもわからないんだぞ？」

「大丈夫だ。一応あてはある」

「・・・ならなんで俺に知ってるか聴いたんだよ」

最初から俺に聞く必要ねえじゃねえか・・・

「なに、確実にあるのならそっちを優先したほうがいいだろ？あてがあると言っても絶対あるという保証は無いからな」

「なるほど。で？そのあてってというのは？」

蓬萊の玉の枝があるかもしれないあてってなんだ？

「それはな・・・」

「おおーっと！この商品の値段はなんと・・・買ったー！・・・それは俺のだー！・・・かゆ・・・うま・・・ちよっ！噛み付くな！・・・ワーワーギヤーギヤー！・・・」

「ここだ！・・・ドヤッ・・・」

「ただのオークションじゃねえかよ！」

ドヤ顔うぜえ！しかも客の中に明らかに危ない奴がいたし！

「ここは本当にいろんな物が売り出されるんだぞ？」

「いやっ！確かにそうだろうけど伝説の物がこんなところにあるわけがなっ！」

「おおーっと！この商品はすごいぞ！海外から流れてきたもので名前は”竜玉”と言うらしいです！この玉の特徴は玉の中に星の模様があり、7つ集めると願い事が叶うとか……今度こそ俺が……うるせい！俺が買ったー！……かゆ……うま……あ”ーあ”ー」

なんでドラゴ ボールがあんだよ！しかもやばい奴が増殖してるし！

「ん？玉系の商品がでてきたってことはそろそろか……」

「そんな！？……はあ、もう驚くのが疲れたよ……」

もうなにもかもがめんどくさい……

「次の商品はこちら！……特に特徴らしき特徴もない普通の>蓬菜の玉の枝くです……なーんだ。ならいいや……うん、俺もちよつとな……かゆ（ry……あ）（ry……うわー！何時の間にかに妖怪がいるー！……」

いやいや普通って、伝説の物だぞ？そして気付くのが遅い！

「ふむ……スツ……なら私が買おう」

「おおーっと！ここでまさかの不比等様の登場だー！お買い上げありがとうございます！……おおー、不比等様がいる……おーい！不比等様ー！……か（ry……」

「……皆ノリが軽いな」

「私はよくここにきているからな。あるていどは人付き合いがある

んだよ」

「．．．お前そんなんでいいのかよ」

一応貴族だろ？

「ふむ、そんなこと気にしてはいけないぞ？」

「まあ．．．お前がいいなら別にいいんだが．．．」

人の性格に文句を言っちゃいけないな。うん

「それよりも蓬莱の玉の枝は手に入ったんだ。今日はもう寝て期日を待とう」

「それもそうだな」

なんか疲れたしゆっくり寝るか

「ん？．．．なんか忘れてるよな．．．」

あ．．．妹紅達を忘れてた

「あー！千夜が帰ってきたー！」

「おかえりなさいませ。不比等様、千夜様。」

「ああただいま」

「俺客人だけとただいまでいいのかな？　．．．まあいいや、ただいま」

「それよりも千夜！あのかぐや姫に求婚する気ならやめなさい！あの女は絶対にいい女ではないわ！」

いや求婚する気ないし

「なんでそんなにはつきりといい女じゃないって言い切れるんだ？」

「女の感よ！」「ドン！」

「．．．そーですか」

俺には女がわからないんだぜ．．．

「いいんだけどよ、かぐや姫に求婚する気なんど無いぜ？」

「え？」

「．．．なにを勘違いしてるのやら」「はあ」

素を知っている俺としては間違ってもぐーやとは結婚したく無いな。容姿だけはいいんだけどな、容姿だけは．．．

「あ．．．あはははは！そうよね！千夜ならわかってると思ってたわ！」

「．．．なあ翠」

「なんでしょうか千夜様」

「なんで妹紅はあんなに喜んでるんだ？」

「それは「そのことは私が説明しよう」「. . .」

「不平等、いたのか？」

もうすでに自室に行ったのかと思ったぜ

「最初からいたわ。まあいい、多分妹紅はお前がかぐや姫に盗られる（泥棒猫的な意味で）とも思ってたんじゃないか？」

「盗られる？別にかぐや姫に盗られる（普通の泥棒的な意味で）よ
うな物はないんだが？」

あのお姫様が庶民の俺からなにを盗むと言っただ？

「（これは. . . 誤解釈してる顔だな）私がかぐや姫に夢中で妹紅の相手をしてやれなかったからな、お前もそうなるんじゃないか？
って心配してたんだろっよ」

「. . . あゝ、そういうことね」

ならばやることは一つだな

「あははははは、ポン、ふえ？」

「なでなで」

「せせせ千夜／＼！？なにをしてるの！」

「いやなに、そんな心配をしていた妹紅が可愛いなー、と」
「なで、
なで、」

「・・・あううううう／＼／／／」
「プシュ／」

おっと、妹紅が倒れちまったな。妹紅の部屋まで運ぶか「千夜様、妹紅様をお渡し下さい・・・！」
「ゴゴゴゴゴ・・・！」

「うおっ！翠はなんでそんなに怒ってるんだよ！」

「・・・怒ってませんよ？ええ、完璧な従者である私が怒るわけがありません。ありえません。」
「ズズズズズ・・・」

いや絶対怒ってるって！さっきの「ゴゴゴゴゴ」でできた地面の亀裂からなにかが出てきそうだし！

「千夜！こうすれば翠が止まるぞ？」
「こによこによ・・・」

「・・・そんな方法で止まるのか？」

俺にはとても止まりそうな気がしないんだが・・・

「ああやってみろ。絶対止まるって」

・・・仕方ない、やってみるか

「止まれって、翠」
「ギョッ」

「ふあっ／＼／」

お？止まったでいいのかな？ただ抱きついただけなんだがな・・・

「・・・むきゅ／＼／」がくん

「翠！？・・・気絶しちゃった」

「・・・さーてと、私はもう寝よう」

「ちょっと待てや！お願いだからこんな力オスな状況で一人にしな
いでー！」

「うううううう／＼／」

「むきゅ／＼／／」

・・・それではまた次回とかつ！（現実逃避）

千夜です・・・この時代の価値観がわからんとです・・・(後書き)

それじゃあーまた次回

にちじよお (前書き)

うれしい感想をいただきました！ありがとうございます！

こんな小説でも需要があることに驚きましたw

それではどうぞ！

にちじょうお

よお．．．千夜なんだぜ．．．あの後妹紅と翠をそれぞれの部屋に運んだはずなんだが．．．

「ぐーぐー」

「すーすー」

「．．．はあ」

なんでまた二人が俺の布団に潜り込んでるんだ．．．

「．．．せつかく運んでやったのにこれじゃあ意味がねえじゃねえか」

「けしからんとかじゃなくてそっち（運んでやったのに）なんです
ね？」

「ったくもう、とりあえず二人を起こすか」

「おい！朝だぞー！二人とも起きろー！」ゆさゆさ

「．．．んー？」もぞもぞ

「すーすー」

．．．これは驚いた。翠より先に妹紅が起きるとは

「・・・せんや〜？いましつれないなとかんがえた〜？」

「いやいや俺のログにそんな記録は無い」

「・・・？、ならいいや〜」「ふあ〜」

やべえ、寝ぼけてる妹紅が純粹すぎて俺が汚く思える

「もう朝だぞー、いいかげん起きろ！今起きないと口付けしちまうぞー！」

「「「・・・」」」

これなら二人とも嫌がって起きてくるだろ。ドヤツ。

「ぐ、ぐーぐー／／／」

「・・・すー／／／」「すー」

「おい妹紅！お前は起きてただろ！翠！さりげなく口をこっちに近づけるな！」

え？普通は嫌がるもんじゃないの！？・・・ああ、今は昔だから俺の常識が通用しないこともある。つまり、この昔では常識に囚われてはいけないのですね！

・千夜暴走中。どっかの脇巫女2Pのようなセリフを言っております。
す。

「・・・早く起きないと朝飯抜きにするぞ」「起きた（ました）！」

「・・・」

・・・もういいや

「ふう、じゃあ朝飯でも作るか」

翠が作らないのか？って思ったやついるだろ？それはな、前に作ったことがあつたらう？その時に妹紅と翠の二人に「たまにでいいからまた作って」って言われたんだよ。だから今回は俺が作ることにした

「わーい 千夜の作ったご飯だー」

「・・・(ちよつと複雑ですね・・・)」

・まあそりや今まで妹紅に自分が作ったのにいきなり現れた千夜に(たまにとはいえ)出番を取られてしまったら複雑でしょうね・

「・・・まあ千夜様のご飯が食べられるならまったく構いませんけどね」

・・・・どうやらまったく心配は必要無いようです。・

「よし、じゃあ作るか」

く青年調理中・・・

「で」「できたのね」(のですね)「！」「・・・なんで後ろにいるんだよ」

ビックリしたわ！

「そんなことより運んで食べましょう！」

「それでは私は不比等様を起こしてまいります」「ペーリ-

あ、不比等のこと忘れてた；

「ああ頼む。」

「……（千夜様が私に頼みごとをしてくれました／＼／）はいっ
！まかして下さい！」

「……なんだろう？」

やけに気合が入ってるな……それが空回りしそうで怖いぜ

「（よしっ！行きま）ガッ！…えっ？…ひゅううう……きや
ー！…ぺしゃっ、あううううー……」

「あーあ……」

襖の段差に足引っ掛けてころんじやったよ。もしかして翠って意外
とドジっ娘？

・ピロリロリン 翠はドジッ娘？の称号を手に入れた！称号説明：
ドジっ子？いいえドジッ娘です！-

「あううー／＼／」「ふらふら-

「翠大丈夫かしらね？」

「．．．大丈夫だろ」

あれでも今までこの屋敷を一人で支えてきたんだからこのくらいな
んの問題も無いはず

「よしっ、今度こゝガスン！…うみゃっ！…ゴスン！…うみゅっ！
…ビターン！…うううううー…」

大丈夫．．．だよな？

「なあ妹紅」

「なに？」

「本当に今まで翠一人だけでやってたのか？」

とてもじゃないが今の翠を見てると無理そうなんだが．．．

「そうよ？（でも千夜がくる前は怖いくらい正確で無表情だったの
に。本当、恋って人を変えるのね）」

そうか．．．

「まあ今はそんなことより料理を運びましょ」

「やけに上機嫌だな」

なんか嬉しいことでもあったのか？

「そう？そうね、私は今がとても幸せだわ・・・（そう、それが無理だとわかっててもこんな日常が一生続きますようにって願ってしまふくらいには・・・）」

「？、微妙に話はずれてる気がするんだが。まあいい、運ぼうか早くしないとせっかく作った料理がさめてしまう

「そうね」

（青年少女運搬中・・・）

「不比等様を呼んでまいりました」

「ふあ〜・・・二人ともおはよう。今日は千夜が朝飯を作ったらしいな？美味しい飯を期待してるぞ」

「ん〜、あまり期待されてもな〜」

そんなすごい美味いってわけでもないし

「まあいい、それじゃあ全員で・・・」

「いただきます！」「」「」

（食事中・・・）

（終了）

「・・・ずずずずずず・・・ことん、ふむ、なかなか美味かったぞ。」

「そうか？ありがとう」

「どうお父様？千夜の飯は美味しいでしょうー！」

「いやいやなんで妹紅が威張ってるんだ？」

「ひそひそ、それは不比等様が『美味しいと言っても普通だろ？』とおっしゃったからです」

「・・・何時の間に俺が料理を作った話をしたんだ？」

「すくなくとも俺は言ってないんだぞ？」

「千夜様が寝ている間にです。」

「・・・そうか」

「それでは今日はどうするのだ？私は特にないから寝て「不比等様？仕事が溜まっております」・・・私は自室で仕事してある。なにか用があればきてくれ」・スツ、スタスタ・

「そりゃな、今までぐーやのところに通ってたからな。仕事の量がすごいことになってそうだな・・・」

「・・・がんばれ不比等、骨は拾ってやる、ぼそっ・・・」

「千夜はどうするの？私は翠の手伝いで家事をしてるわ」

「妹紅って家事の手伝いしてたのか？」

てつきり全部翠がやってるのかと思ってたんだが

「はい。最近始めて、千夜様が振り向いてくれるようにと」
「たまたまよっ！たまたましたくなっただけよ／＼！」
「．．．だそうです」
「クスクス」

？そうか

「なら俺は散歩に行つてこようかな？」

「行つてらっしゃいませ」
「ペー」

「行つてらっしゃい」

じゃあ行くか

（青年散歩中．．．）

――町中での会話――

――家具屋――

「ああー！強盗だー！」

「なんだと！？」

どこだ！

「．．．ああすまん、ありやわしの妻じゃった」

「おいその奥さん商品を持ってってるぞ！しかも一つの棚にあった物全部！」

・商売になっただけかな？・

「すぐ飽きて売らなから大丈夫じゃ」

「・・・そうか」

――魚屋――

「ここはなににもなさそう、っておい！」

「なにか用かの？」

「お前さっきの家具屋だろ！」

二つの店を持つてるのか？いやそれよりも見た目ただのおじいちゃんなのに何時の間にかに追い越された！？一本道をここまで真っ直ぐ歩いてたから他の道もないし・・・

「家具屋はわしの弟じゃよ」

「ああ・・・そういうことが」

――肉屋――

「へーいらっしやいらっしやい！その目の前にある腐った肉屋よりこっちのほうが安いよー！」

「なんだとごらあ！お客さん！こっちの店はあそこの屑みたいな肉よりこっちの肉のほつが美味しいよ！」

「んだと！」

「やるかじるめー！」

「死ねー！！！」

「……」

いやいや周り皆引いてるから：

くぐーや〜

「いやお前なんで町中に普通にいるんだよ！」

「いちや悪いのー！」

「屋敷で爺さん婆さんが心配してるだろうよ！」

「ああ、それなら問題無いわ。身代りは置いてあるから身代り？」

「そんなのすぐバレるだろ……」

「……都市の技術ってすげえいわよね〜」

．．．よつするに未来技術でなんとかしちやった訳ね

「ということは今使っている眼鏡も都市製か」

認識阻害的な？

「．．．本当にすごいわよね」

本当にな．．．

〜散歩終了〜

町中でぐーやに会ったのは驚いたぜ

「それよりも私の家に来てみる？っていうかこい」・ぐいつ・

「なんでだよ、あんまり行きたくないんだが」

俺の勘がめんどくさいことになるって告げてるんだぜ！

「暇だから私の話し相手になりなさい」

「やっぱりめんどくさいことだな．．．」

「めんどくさいってなによ！こんな美人と会話できるんだから泣いて喜ばなさいよ！」

「お前は美人（笑）だしな」

普通の美人なら喜んで話し相手になっただけだな．．．

「美人に変わりないから大丈夫よ」

「．．．もういいや、俺をどこにでも連れて行け」、はあ．．．

「じゃあうちまで連れてくわ」、ぐいつ、スタスタ、

「．．．手離せよ」、スタスタ、

「ぐーやの部屋」

「さあ、私にあなたの今までやってきたことを話なさい！」、キラ
キラ*

「いや、なんでそんなに興味津々なんだよ」

「月では妖怪大戦（第10部参照）は有名だからね、その大戦以降
のあなたの軌跡を知りたいのよ！」

「そんなに有名なのか？」

「ええ、あの大戦はテレビ中継してたわよ？途中から電波が悪くな
って無理だったけど。電波が直った時には大きな爆発後があっただ
けで人も妖怪も見当たらなかったのよ」

「ああー、俺と剛鬼の妖力で結構荒れてたしな。俺が見当たらなかつ
たのは剛鬼と戦ったときに吹っ飛ばしたり吹っ飛ばされたりして
都市から離れてたしな。最後の都市破壊は遠隔操作でやったし。そ
の分余計に疲れたけどな」

「そんなことよりなにがあったか教えてよ!」

「ああ、あの頃の話をしてやろう・・・」

色々あったよなあ・・・

く千夜の記憶く

ー前略ー

あの時はさすがの俺も死を覚悟したね、だってあれは・・・

ー後略ー

く終了く

「・・・っていうことがあったんだ」

「すごい・・・そんなことがあったなんて・・・!」

ん?略したところが気になるって?それは大人の事情ってやつだよ

「ふあゝ、そろそろ暗くなってきたし帰ってもいいわよ?」

「なんで上から目線なんだよ、帰るけどな」

早く帰らないと妹紅、翠が心配する。不平等はまったくしないどころ
うが

「じゃあな」「ひらひら」

「ええ、またね」・ぶんぶん・

よし帰ろう

く藤原家く

「帰ったぞー」

「あ、千夜だ。お帰り」

「千夜様、お帰りなさいませ」・ペこり・

「おう、不比等は？」

「もうお休みになっております」

やっぱりか

「じゃあ俺も疲れたしもう寝るわ」・スタスタ・

「お休みなさいませ」・ペこり・

「お休み」

今日はもう寝よつと。じゃあな

に　ち　じ　よ　お　（後書き）

かた次回

やーしてこじなった〜 (前書き)

誤字脱字がありましたら言ってください！

どーしてこうなった？

千夜だぜ！ただ今俺がいる場所は・・・

「これが”仏の御石の鉢”です」「ごとん・・・

「どうなのじゃ？かぐや姫よ」

そう、ぐーやの家の中です。しかも持ってきた宝を提出するところ。

・・・俺は不比等に無理矢理連れてこられた

「お爺様、それは偽物です。」

「なっ！？なんで偽物だとわかったんだ！？」

「あなたが今自分で偽物だと言ったからです」

「しまっ・・・ぽいっ、それよりも私の妻になるといいことがあるぞ？例えばだな・・・」

「しっこいです」

「ガシッ」

「なんだお前ら！私を誰だと思っておる！」「ぎゃーぎゃー！・・・

あーあ、しっこすぎてこの家の護衛してる人につれていかれちゃった

・・・この嘘がばれて、鉢を捨てて言い寄ったことから面目ないことを

”はぢを捨てる（恥を捨てる）”と言うようになった。

「次の方」

「私はこの”蓬萊の玉の枝”を持ってまいりました。」・ことん・

「おおっ、これは！かぐや姫よ、これは本物ではないかの？」

「・・・！（えっ？ちよつと待ってよ！私は絶対に結婚したくないから噂で聞いたことがあるあきらかに存在しないような物を選んだのに！）」

「どうなのですか？かぐや姫よ」「ドヤッ」

いやいやお前オークションで買ったただけだろうが、ドヤ顔すんな

「・・・でもこれは本物っぽいし・・・まさか不平等とかぐやが結婚しちまうのかな？」ぼそっ

まさかこんなところで（東方と竹取物語の）原作ブレイク？

「・・・それではかぐや姫の婿は「ちよつと待ってくれい！」曲者か！？」

・・・なんか職人風の男が出てきたよ

「それはおいらが作ったものだけい！（しっしっし！蓬萊の玉の枝だか上海の玉の枝だか知らないが、こう言っておけばかぐや姫からご褒美が貰えるだろうよ！ああ・・・俺ってなんて天才なんだ・・・！）」

「・・・？お主は誰だ？私はすっかりと本物を買ってきたんだぞ？」

「（そうなのか？だったらこう言い返すぜ！）そのお前に売った商人に売ったのがおいらなんだよ！」

「・・・いや、買ったのは集団売買所だから商人ではないんだが」

「それは・・・！」

さて、どう答える？

「そ、そうだ！間違えた！その集団売買所に売ったんだよ！」

言い訳がきついな・・・

「じゃあその場所の名前を言ってみろ」

あ、詰んだ

「それは・・・！そ、そんなことよりあの玉の枝はおいらが作ったんだよ！だからなにかご褒美をくれ！」

「・・・。」

さて、ぐーやはどう判断するのかな？

「・・・そうですね、その職人には後でご褒美を授けましょう。

不比等様には悪いですが本物が偽物かわからぬ物では仕方ありません（本当はこんな屑みたいな男が嘘を言って褒美を貰おうとしている

のはわかってるけど、今回はそれを利用して貰うわ」

「・・・そうですか。でもそれはかぐや姫に差し上げます」

「・・・ええ、大事にさせて頂きます」

残念だったな。あの男は後で10分の9殺しにして妖怪の前に置いてごう・・・

「それでは気を取り直して、私が持ってきたのは・・・」

・そんな感じで話は進んで行き・

・・・ふー！やっと終わったよ！結局本物の宝を持ってこれた奴はいなかったな

「残念だったな不平等、こんな結果になっちゃって」

ちなみにあの男はきっかり10分の9殺しにして妖怪の前に置いてきたぜ！どうなったかは知らん（黒笑）

「いや、私は会いたいだけだからな。まだ方法はある」

「・・・前向きだねえ」

少なくとも俺だったら怒り狂うな

「しかしその時を待たないといけないからしばらくは暇だな・・・」

「仕事はいいのか？」

「あんな物この前に部屋でやった時に一週間分終わらせたわ」

早いなおい

「じゃあとりあえず家に帰ろうぜ」

「そうだな、帰って寝るか」

よし！じゃあ帰るか！

〈藤原家〉

「「ただいまー」」

「お父様、千夜、お帰りなさい」・ニコッ・

「不比等様、千夜様、お帰りなさいませ」・ペーリ・

「なんか妹紅の対応が柔らかいな」

なんかあつたのか？

「・・・そう？私はいつもこんな感じ」千夜様は優しい方のほうが好きかなと妹紅様が言って「わー！わー！わー！／＼／＼」

「なんだ翠？よく聞こえなかつたんだが」千夜は気にしなくていいのよ！／＼／＼「そ、そうか」

少し気になるけど・・・ま、いつか

「翠よ、夕飯はもうできておるか？」

「はい不比等様、御夕飯はもうできております」

「それではぱっぱつと食って寝るとしよっ」

「そうだな」

「承知しました。それではもう準備はできておりますので食べましょっ」

「そうね、私もそろそろお腹が空いてきたわね」

「よしっ！じゃあ食いませうか！」

「～食事中・・・」

「～終了～」

感想：翠の作った飯は普通に美味しかったです。

「いちそうさま」

「うむ、いつも道理に美味しかったぞ」

「美味しかったわよ」

「お粗末様です」

んじゃ、寝るとしますか

「お休み〜」・スタスタ・

「ああ千夜、また明日」・スツスツ・

「お父様〜千夜〜、お休み〜」・テクテク・

「お休みなさいませ、皆様」・ペ〜り・

じゃあ客室に戻るうか

〜千夜の部屋（客室）〜

「よ〜し、寝るか!」

と、その前に・・・

「・・・なんでついてきてるんだ？妹紅」

「・・・ビクン!・・・に、にゃ〜」

「なんだ、猫か・・・って騙されるわけねえだろ!」・ヒュンツ・

「・スコーン・あ痛っ!」

そこら辺で拾った石を投げたら見事に命中したぜ!

「なにすんのよ!これで傷ができたら責任取ってもらっからね!」

「責任つて．．．なにすればいいんだよ」

そんなこと言われても困るんだが．．．

「えっ／＼／それは．．．その／＼／」・もじもじ・

何をやらせる気だよ!?

「死ねとかそういうのは駄目な」

だって俺死ねないし

「そんなこと言うわけじゃない!．．．ただちよつと大人なことをして貰おうかな」って．．．／＼／駄目?」・うるうる．．．

うおい! 涙目で上目遣いとか．．．／＼／やべえ、すっげえ可愛い。こりゃけーねもあなるわけだ．．．でもな

「大人なことつてなんだ?」

そう、それがまったくわからない

「．．．え?」・カチン・

あ、固まった

〈妹紅視点〉

予想外だわっ! 断られるとは思っていたけどまさか言葉の意味を理解してくれないなんて!

「えーっと、あの．．．その．．．ねえ／／／？」

駄目だわ．．．さすがに言葉にしてあんなことを言うなんて．．．
／／／考えただけでも顔が赤くなって爆発しそうなのに／／／

「．．．？風邪なら早く寝るよ？」

無理だよ！せっかく勇気を出して今夜こそは！って思ったのに．．

．．．なんでこんなに気持ちが悪くないんだろ？こうなったら強硬
手段しか．．．

「．．．？（なにを悩んでるんだ？このままほって置くと大変なことになるって俺の勘が言ってるからとりあえず．．．）今日は一緒に寝るか？」

え？．．．千夜から誘ってくれた！？

「．．．シュバツ！．．寝る寝る！」

「うおっと、いきなり元気になったな。じゃあ寝るか」

やったー！

．．．どうやらさつきまで悩んでいたことはすっかり忘れたようです。こんな調子では千夜と（R18的な意味で）寝るのはいるになるのやら．．．まあ妹紅は良くも悪くもまだ子供というわけですね．．

「お休みな、妹紅。」

「お休み 千夜」

今日は気持ちよく寝れそうだわ

〈千夜視点〉

「くー、くー、」

「・・・すぐ寝たな」

やれやれ、あのお願いは一体なんだったのやら

「やっぱり寝顔は可愛いもだな・・・」

別に起きてる顔が悪いってわけじゃないぜ？でも寝顔はもっとこう・
・神秘的な？なんかそんな感じがするんだよ

「・・・っと、寝顔はつか見てないで俺も寝るか」

それじゃお休み

〈次の日〉

・・・ふあ、

「あ、よく寝た」

さて、妹紅はまだ寝てるようだし俺は起きるか

「よいしょっと・・・ん？」

ああー、なんか右側の布団がやけに暖かいな（妹紅は左側にいる）。
こりゃ翠も侵入してたか？

「ま、なんの証拠も無いしどうでもいつか」

にしてもなんで妹紅と翠は俺の布団の中に入りたがるかねえ・・・
俺からマイナスイオンでもでてんのか？

「とりあえず目覚まししてこよう・・・」

〈青年移動中・・・〉

――外――

外に出た理由は能力を使つてるところを見られないようになんだぜ！
まあ妹紅、翠、不比等はまったく気にしないだろうがな

「パシャーン、ふうっ、やっぱり顔を洗うと目がすっきりするな」
でも冬は勘弁な、あれはきつい

・この時代って井戸ってありましたっけ？

「さてと、目が覚めたし妹紅を起こして朝飯食いにいきますか」

じゃあレッツラGO！

〈青年移動中・・・〉

「おーい！妹紅起きろー！」・ゆさゆさ・

「・・・はにゃん」・「うるうる」

「・・・プシュツ、おーい、妹紅起きろ」・ポタポタ・

やべっ、不意打ちくらって鼻血が出ちった

「うにゅん？あせんやだ」・にへら・

「・・・プシャー・・・」

あああああああああ（ry

・千夜暴走中によりしばらくお待ち下さい・

・・・ふう、落ち着いたぜ。え？鼻血はどうしたって？俺の能力を
思い出してみ？最近まともに使って無いけど一応すごい能力なんだ
ぜ？鼻血を掃除すんのなんてあつという間さ！

・これぞまさしく能力の無駄使い・

「ん〜」・「じじい、ふあ〜、目が覚めたわ」

「やっとか」

「私は朝が弱いよ・・・って千夜大丈夫！？顔が真っ青なんだけ
どー！」

ありゃ？少し血を流しすぎたかな？頭が少しぼんやりとしてきたぜ・・・

「すまない．．．妹紅、後はまかせた．．．」、ガクツ、

「えっ、千夜ー！死んじやいやー！」、わぐん！

くそっ、俺はまた誰も守れなかったか．．．ははっ、かつこ悪いな．．．

・注意：シリアスではありません・

「なによっ！なにが一体千夜をこっつ風にしたのよ！」？あなたです

「．．．」

「千夜ー！」

「．．．なに？」

「あれっ？」、ガクツ、

うっ、頭がクラクラするんだぜ

「大丈夫なの？千夜」

「ああ、でも鉄分を補給しないとやばい．．．」

不老不死でも体の調子はどうしようも無いからな、これぐらいなら一回木っ端微塵に死ねば体も再構成されるから治るんだが．．．さ

すがにそんな確実に妹紅のトラウマになるようなことしたくないし
・
・
・
なにより俺が痛いし・・・

「鉄分！？鉄分つてなによ！」

あ、さすがにわかんないか

「・・・とりあえず食事をすればいいってことだよ」

「わかったわ！じゃあ朝飯持ってくるからここで待ってなさい！」
ドタドタ・・・

ありゃりゃ、妹紅は相変わらず行動派だねえ

「あゝ、でもあんまり動きたくないから助かったな」

まあこうなった原因も妹紅だけだね

「まあそりゃ妹紅の可愛いさに負けた俺の自業自得ってことで」

次回までには回復しますか、それではじゃあね〜ノシ

どーしてこうなった
(後書き)

んじゃあまた次回

もこたんな一日(前書き)

閑話です。スルーしても問題ありません。

ほとんど妹紅視点

今回は少し短いぜ！

もこたんな一日

千夜だ（ry、最近あいさつすんのがめんどくさくなってきた・・・

「ん〜」・もきゅもきゅ・

「どうなの千夜？もう大丈夫なの？」・はらはら・

ああ〜、なんか不謹慎だけど涙目で心配してくれる妹紅に癒される・

・・・

「ん、もう大丈夫」

そんなに速く血ができるわけないんだがこれ以上妹紅に心配をかけるわけにはいかん。

「そう？」・ほっ・

「・もきゅもきゅ・・・よし、」ちそうさま

今日も美味しかったですよと

「じゃあ散歩でも「絶対駄目！」・・・もう大丈夫だって」

「それでも今日ぐらいは安静にしてなさい！」

ありゃりゃ、こりゃ本気で心配させちまったかな？

「とりあえず今日は散歩もなにも駄目！」

「・・・はい」

まあ今日ぐらいはしょうがないかな？・・・いや、暇だな

（妹紅視点）

もう！なにが原因かわかってないのに散歩に行こうとするなんて！
・・・まあなにが原因でああなってしまったのか千夜はわかってたみたいだけど・・・

「まあいいわ、客室に戻って寝てなさい。」

「・・・わかった（隙をみて脱出しよう）」

「・・・ついでに千夜」

ちよつと釘刺さないかね

「なんだ？」

「・・・もし、私が見に行った時に客室にいなかったら・・・」

「な、なんだ？（すっげえ嫌な予感がする；）」

ちよつと、ほんのちよつとよ？（黒笑）

「・・・あなたの男の勲章、踏み潰すからねえ？」、ヒュオオオオオ

・・・

く少女移動中・・・く

「翠ー！いるー？」

あ、いたいた

「なんでしょうか妹紅様？」

「今日もなにか手伝うことある？」

「・・・そうですね、なら洗濯物を干すのを手伝ってもらってよろしいでしょうか？」

「ええ！まっかせなさい！」

今日も頑張るわよ！

く妹紅仕事中く

くハプニング集く

「これを干せばいいのね？」

「はい。しかしそれはとても滑りやすい着物ですので気をつけないと「きゃあっ！バサッ・・・」・・・洗濯し直しですね」

あじっじっ、じゅめんなあ、いっ

ー掃除ー

「よししょっ、よししょっ」・ふきふき・

・ただ今雑巾掛け中・

「妹紅様、雑巾掛けはこういう風にやるのですよ?」・ふきっ、ふきっ、

へっ、後ろに下がりながら少しずつ前を拭くんだ・・・

「よしっ、私も」・ふきっ、ふきっ・

「あ、妹紅様、慣れないうちに勢いよくやってしまつと・・・」

「え?な、ゴチン!・いったーい!」・「ぐるぐる」

痛いよっ!柱に頭ぶつけちゃったー!

――料理――

「これは毎日(頭の中で)やってるから大丈夫よ!」

大丈夫!・・・よねえ?

「はい。それでは作業に入りましょう。」

「よし!汚名挽回するわよ!」

「・・・ええ、頑張って下さい(少し嫌な予感がしますね、警戒しときましょっ)」

千夜に美味しいものを食べさせてあげるんだから！

〈妹紅奮闘中・・・〉

――ハプニング続出――

「えっと・・・これ（砂糖）を入れればいいのね？」・ざらああ・

「妹紅様！入れすぎです！」

え？じゃあ・・・

「塩を同じ量入れればいいのかな？」・ざあああ・・・

「妹紅様――!?」

・今まで料理をしたことだあるんでしょうか？・

「んゝ、なんかどろどろした変な黒い物体になっちゃったけど・・・
・ま、いつか」

・それはいわゆるダークマター・

〈昼食〉

「昼食もってきたわよ」・トントン・

「おお、できたのか・・・な？・・・」・カチーン・

あら？固まったわ

「どうしたの？」

「それ．．．もしかして妹紅が作ったのか？」

「ええ、そうよ。少し失敗してしまったけど食べて感想を言ってくれると嬉しいわ／＼」・テレテレ・

「．．．．．（ヤバイやばいやばいー！なんか絶対に食べちゃ駄目な物体がー！．．．でも妹紅を泣かすわけにはいかん。ここは我慢して．．．）い、いただきまーす」・パクツ・

「ど、そう？」「ドキドキ・

「．．．ふっ・ボタン！．．．」

「千夜ー！？」

やっぱりまだ体の調子が悪いんじゃない！しつかり大人しくしよう
としないからよ！

・いいえ、間違いなく千夜が倒れたのは暗黒物質ダークマターのせいです・

とりあえず千夜を布団の中に入れてっと・ずずず．．．ずずず．．．
ばさっ・ふっ、予想以上に千夜が重かったわ

「ふっ、あー、私も眠くなってきたわ．．．千夜と一緒に寝よっ
と」

それじゃお休みなさい

「家事終了」

「ふあ、よくねた」

あれ？せんやはまだねてるの？

「んん、ぐぐっ、っはあ、よし、しっかり起きたわよ」

それじゃまた翠にやることあるか聞きましょう

「翠搜索中・・・」

「あーいたいた！翠ー！なにかすることあるー？」

「あ、妹紅様。今日の家事は終わってしまったのでもうありません」

あちゃ、ちよつと遅かったかしら？

「それじゃあ夕食を作りましょう」

よしっ、今度こそは失敗しないように作りるわよ！

「、ビクッ、。いいえ、あらかじめ作ってしまっていますので運ぶのを手伝ってもらえますか？」

「え、まあしょうがないわね」

じゃあ明日作りましょう

「・・・すみません千夜様、私には妹紅様を止められません」

「こんな感じでもこたんの一日は終わりました。え？千夜？さあ？あえて言うなら次の日は男の悲鳴が町中に響いたってことですかね

-

もこたんな一日(後書き)

意見・感想を待ってます！

アンケート

ただ今少しだけ迷っていることがあります。それは竹取物語編が終わったらっぱっぱと話を進めるかこのままゆっくり進めるかです。

まあ簡単に言ってしまうとこんな感じですよ

1、竹取物語編が終わったら適当な理由をつけて現代まで飛ばして幻想入り

2、何話か放浪編を書いてから幻想郷作りに関わり、古参妖怪にしたあとキンクリして原作の少し前からスタート

3、こんな感じの話を作って！や、（キャラの名前、オリキャラでも原作キャラでもいいです）を出して！など、つまりなんでもいいですよ

感想にどれがいいか書いて下さい。反応がなかった場合は作者のそのときの気分で決まります。

期限は竹取物語編が終わるまで

できたら協力して下さい、お願いします！m（）（）m

意見・感想も喜んで待ってます！

よつやく竹取物語の終わりがみえてきた・・・by 作者(前書き)

駄文です。申し訳ございませんm() () m

今回は少しセリフの前に名前を入れてみました

それでは本文をどうぞ！

ようやく竹取物語の終わりがみえてきた・・・by 作者

キングクリムゾン！！

くあの竹取物語的一幕から3年ぐらいく

あゝ、千夜だ。あの後何回か妹紅の料理を食う機会があつたのだが
・ 軽く死にかけた。それで三途の川らしきところに死神が居眠り
してたけど大丈夫かな？なんか怖い雰囲気のおっさんが後ろにいた
んだが・・・

- 確かこの頃はまだえーき様は地蔵のはずです -

「というか不死である俺がガチで死にそうになるって・・・」

ま、まあ気にしちゃいけないことだな

「さて、今日はどうしようか」

まだかぐやに月の使者がきてないしな。いったい何時くるんだろ？
てつきりすぐくると思ってたんだが・・・

「おはようございます、千夜様。」ペーじー

「・・・ああ、おはよう。とりあえず寝癖は直しとけ」

「・・・！！！！／／／」ちゅわっ！！！！

ちなみにまだ藤原家に居候してる。理由は竹取物語が終わって妹紅が不死化したら戦闘訓練でもしてやるうかと思っただがな、まさかここまで時間がかかるとは思わなかつたんだぜ

「そ、それでは朝飯を準備して待つております／＼」
「タッタッタ．．．」

「わかつた」

長い間ここにいてわかつたことは、翠は天然だつてことと、どうやら俺は瀟洒なPA 長になんか言える立場じゃなくなつたつてことだな（鼻から忠義的な意味で）

「じゃあ妹紅を起こしに行きますか、」

実は前までずっと一緒に寝てたのに最近寝なくなつたんだよ。やつと自分が女だつていう自覚を持ったのかねえ．．．まあ俺が妹紅に『そろそろ自分の部屋で寝ろ』つて言わなけりや今でも一緒に寝てそうだけどな。

「しっかし妹紅も女つぼくなつてきたねえ」

少し前までは小つさくて可愛い女の子だったのに．．．

「っと、変なこと考えてるうちに妹紅の部屋についたな」

それじゃさつそ「、ス、あ、せんやだ、ダキッ」
「．．．ふっ

「ふっふっふ、そんな何回も俺がやられるわけがなあっ！？、プシ

ヤッ！…ぐふっ、例え俺を倒しても第二、第三の俺が…」

「…すー、すー、…」

「…って聞いてないし」

これじゃあただの頭悪いやつの独り言じゃねえか

「おゝい、起きろ」…ゆさゆさ…

「…あえ？千夜がいる」

「さっからいたよ…」

別にいいんだけどな

「それより朝飯だ。食いに行くぞ」

「おゝ」

なんか妹紅の性格が原作と比べて丸くないか？

…たぶん原作のもこたんはかぐやのせいでは不平等が盗られ、そしてそれが理由で不平等になにかあったからあんなこと、作者は思いますが。まあこのもこたんにそんな悲しいことはさせませんが…

W -

「…とりあえず行くところか」

…青年移動中…

「それでは」

「「「「いただきます!」「」

「食事」

「「「ご馳走様でした」「」

「お粗末様です」「ペリリ」

よしっ、じゃあ日課の散歩に行こつと

「じゃあ行ってくるわ」

「いってらっしゃい」

「ふむ、なら私はあの案件をまとめるとしよう」「スタスタ」

「それでは私は家事を・・・スタスタ」

「あゝ!翠、私も手伝う!」「タッタッタ」

よし、行くか

「青年散歩中・・・」

「商店街」

- わかりにくいのでセリフの前に名前を書き入れました -

八百屋「おゝ、千夜の坊主じゃねえか！これ買ってけ！」・どすん
！」

「・・・おつちゃん、俺そんなに金持ってないって」

肉屋A「おおっ！千夜！この肉買え！」

肉屋B「なに言ってやがる！こつちの肉を買うに決まってるんだろ！
？」

肉屋A、B「なんだと！やんのかてめえ！」

「・・・だから金持ってねえって」

A「おらあつ！」・シュキン！カキン！・B「はっ！」・シュン！
シキン！・

人の話聞けよ・・・

家具屋「おおゝ坊主、この新製品を買わんかね？」

「じつちゃん、今金持ってきてないんだ。つか新製品なのに傷がつ
いてるし・・・」

家具屋「ああゝ、妻が少しぶつけてしまっただけじゃよ」

「さいですか・・・」

なんか俺もこの町に馴染んできたなゝと思うよ

おばさんA「ね、あの噂聞いた？」

おばさんB「あ、帝様がかぐや姫に夢中になっただっていうあの？」

おばさんC「あ、私も聞いたことあるわ！」

おばさんD「本当、なんであんな小娘だけがいい思いしてるんでしようね！」

おばさんE「妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい……」「ぶつぶつ、」

おばさんF「ちょっと！Eが暴走してるわよ！」

増殖する黒いG「かさかさ、」

おばさんH「それはしょうがないわね、Eは本気で帝様の玉の輿を狙ってたから」

おばさんI「本気だったん！？冗談だとおもってたわ」

おばさんS「……あーっはっはっはー！」「」「」

……無視したほうがよさそうだな。色々と突っ込みたいところがあるんだが、じゃあ暇だしかぐやの家に行ってみるか

〈青年移動中……〉

「ついた……あれ？」

やけに重装備の警備隊がいるな、なにかあったのか？

「あゝ、すみません」

警備員 A 「なんでしょうか！」「ピシッ」

警備員 B 「んゝ、あ？なに？仕事？しゃーなー、そこ坊主、なんか用か？残念だが中に入れることはできないぜ？」

片方はまさに警備員の鏡と言っていいくらいなのに、もう1人が憲兵っぽく見える・・・

「なにかあったんでしょうか？なにやら重装備なのですが・・・」

警備員 A 「すみませんが、私にそれをお答えすることはできません」

警備員 B 「あゝ、なんか月からくるみたいだよ、それで俺は雇われたんだよ」

あ、憲兵であつてたっばい

警備員 A 「こらっ！勝手に喋つてはいけなйдらう！」

警備員 B 「別にいいだろこんぐらい。契約書に事情を言つてはいけないなんて書いてなかつたぜ？」

警備員 A 「そこは人間の常識としてだな、そこのお家の事情を勝手に説明するなんて・・・」

警備員B「あーはいはい、とりあえずその坊主、今は色々慌ただしいから見学はできないぜ。騒ぎが収まったらまたきな」

警備員A「こらっ！まだ話は終わってないぞ！」

なんかめんどくさそうなことになってるな．．．ん？月からなんかくる？．．．つまりやっと竹取物語が終わるってことか？

「．．．何時くるかわかりますか」

警備員A「だからあなたは．．．」
「くどくどくど」

警備員B「ん？ああ、どうやら次の満月にくるらしいぜ？坊主、覗きにくるのはいいが見つからないようにしろよ？警戒度がすごいからな、例え町の人だとわかっても見つかれば一時的に拘束されるだろうからな」

「忠告してくれてありがと。でも俺が侵入すること前提だな」

まあ最初から侵入するつもりだったけどね。せつかくの竹取物語の終幕なんだから見なきゃ損だろ！

警備員B「ああ、お前の目を見てなんとなくそんな感じがしただけさ」

「そう、じゃあまたくるよ。見つからないように、だけどね」

警備員B「おう、もう会うことはないと思うがまたな」

じゃあ今日のところは家に帰りますか

く藤原家く

「ただいま」

「お帰りなさいませ」・ペーリ・

「お〜か〜え〜り〜」・だら〜」

「・・・翠、なんで妹紅はだらけきってんだ？」

でもこれはこれで・・・

「今日の妹紅様はとても頑張っております。目立つ失敗もなく、家事のほとんどを妹紅様がやっけてしまわれたので私の仕事がなくなくなつてしまいました」

「あ〜う〜、翠っていつも大変なことしてるんだなって身に染みたわ」

「そうか、いい勉強になったんじゃないか？」・なでなで・

「えへへへ／＼／＼」・ほにやつ・

「・・・（羨ましい羨ましい羨ましい羨ま（ry））」

・・・ろつと、また鼻血が出るところだっただぜ

「・・・お夕食の準備をしております」・スタスタ・

「おや？なんか翠が不機嫌っぽくなかったか？」

なんか怒らせたかな？

「・・・千夜、後で翠も撫でてあげて？」

「ん？なんでだ？」

「翠はいつも頑張ってるから褒めてほしかったのよ（さすがになにも無いのは可哀想だわ。翠も自分から甘えることができるようになるだけ）」

そうだったのか・・・

「わかった、後で翠を撫でるとしよう」

「それがいいわ」

じゃあ飯を食いにいきますか

～食事～

「」「」いただきます！」「」

「・・・いただきます」

ありゃりゃ、翠に元気がないね

～食事終了～

「「ご馳走様でした」」

「・・・お粗末様でした」・かちや・・・かちや・・・

ん、そうだな

「翠——！」

「・・・なんでしょうか、千夜様」

うっ、心なしかいつもより他人行儀だ

「こっちきて」

「・・・？はい」

「よしっ」「なでなで」

「ふえっ／＼／＼」「ぽふん」

おおー、顔が一瞬で真っ赤になったな

「いつも頑張ってくれてありがとな。」「なでなで」

「・・・ふえ／＼／＼」「ぷしゅ」

あやや、また気絶しちゃったか

「・・・相変わらず翠は初心ね」・ニヤニヤ

「そうだな、翠ももう少し積極的に千夜に迫ることができればいいのだが・・・」

「・・・妹紅、不平等、見てたのか？」

まったく気がつかなかった

「そりゃ〜ね〜、食事が終わった後すぐにするとは思わなかったわよ。てつきり後で自室に翠を呼び出してこっそりするのかと・・・」

「そしてそのまま翠を押し倒して・・・ということだな」

「きゃ〜」

「やるな、千夜」

・・・もうやだこの親子

「もう寝る」「ぷいっ」

「千夜が拗ねてしまったな。少し弄りすぎたか・・・」

「あ〜ん、ごめんなさ〜い」「だきっ」

「・・・まあしょうがない、妹紅は許してやろう。ただし不平等、てめえは駄目だ！」「ビシッ！・・・」

「なんでだ！？・・・私も抱きつけばいいのか？」

「やめろっ！」

気持ち悪いわ！

「・・・もういいや、本当に寝る」

「あーそう？お休みなさい」

「お休み」

さて、寝るか

よつやく竹取物語の終わりがみえてきた・・・by 作者（後書き）

なにか問題があれば感想まで！

妹紅が・・・ケレた・・・(前書き)

楽しみにしてる人がいるかわかりませんが投稿！

ではござい！

妹紅が・・・グレた・・・

「なによあんた！千夜は私の大事な人なのよ！（好きな人的な意味で）」「ぐいつ、」

「何を言ってるのよこの小娘！私はあんたが知らない千夜のおんあなことやそんなことを知ってるのよ！それに私のほうが千夜を大事に思ってるんだから！（遊び相手という意味で）」「ぐいつ、」

ういつす、千夜だ。なんか妹紅とかぐやが俺を両端引つ張りあつてるんだが・・・俺は綱引きの綱じゃねえんだぞ！二人とも結構本気で引つ張ってるから腕が痛えんだよ！

「にしてもこんなことになるとはな・・・」

あんなところで好奇心をださなきゃよかったな。それじゃ久しぶりに回想オン！

く回想く

「あゝ暇だ」

何時に月の使者がくるかはわかったが満月までまだ時間が結構あるからな

「じゃあ散歩行ってくるわ」

何もすることがねえし商店街にでも行くか

「・・・行つてらっしゃーい」

あれ？なんか気のない返事がきたな・・・ま、いつか

（妹紅視点）

「・・・行つてらっしゃーい」

そういえば千夜っていつも散歩に行つてるけどどこに行つてるんだろ？少し気になるわね・・・

・千夜はいつも行き先（商店街）を伝えていません。いちいち伝える必要も無いだろう。と考えているからです・

「・・・よしっ！」「妹紅様？」「ひゃわっ！」「ビクン！」

「今日は家事をなさりませんか？」

「驚かさないでよ翠！・・・ええ、今日は家事をしないわ」

「申し訳ございません・ペこり・ずっと呼びかけておりましたが返答がありませんでしたので」

「・・・ちよつと考え事してたのよ」

「了解いたしました。それでは失礼します」・スタスタ・

よし！千夜を追いかけよつと

（少女追跡中・・・）

やっと千夜を見つけたわ。．．．行くところって商店街だったのね、
もしも女と逢引だったならどんな手を使ってもぐちゃぐちゃにして
その女と別れさせようと思ってたのに（黒笑）

「それにしても商店街だったか、これじゃつまらないから家に帰
ろうかしら？」

きた意味がないわね．．．どうしようかしら？

「やっぱり帰るしか．．．あれ？千夜が商店街から出ようとしてる。
でもそっちの方向はうちじゃないし．．．もしかして！！」

向かってる方向にはあいつの家が！！

（少女尾行中．．．）

やっぱりかぐや姫の家だったのね．．．さて、家に帰ったら尋問し
ようかしら？（黒笑）

「ブルツ！」（なんか嫌な予感が．．．）

でもここにきてどうすんだろ？中に入れるわけでもないのに．．．

「ん？あの女は．．．」

女の私から見ても綺麗な顔、なんか神秘的な雰囲気．．．？、神秘
的というかなんというか．．．

- たぶん穢れがないから神秘的に見えるんだと思います -

「まあいいわ、たぶんあれがかぐや姫でしょう」

例えお父様が盗られても千夜は絶対に渡さないわよ！

（千夜視点）

．．．驚いた、まさか様子を見にかぐやの家に来たらかぐやに遭遇するとは

「お前こんなところに居ていいのか？」

「．．．久しぶりに再開した女に言う言葉じゃないわね」

「大丈夫だ。お前を異性として見てないからな」

「それどういう意味よ！」

だって．．．なあ？

「俺お転婆姫つてあんま好きじゃないんだ。めんどくさいし」

「なによそれ！性格なんだからしょうがないでしょ！」

俺は淑やかな女性がタイプなんだよ。（妹紅は妹みたいなものだから別）

「まあいいわ。暇だから私の話し相手になりなさい」「ぐいっ」

．．．まあ暇だしいつか「待ちなさい！千夜をどこに連れて行く気

よ！「あれ？妹紅？

「なによあんた、千夜は私の物なんだから私がなにしようが勝手にしよ」「ぐいつ、スタスタ、

いやお前の物じゃねえよ

「駄目っ！千夜は私の物なんだから！」「ガシッ、

いいや俺は誰の物でもねえよ。しいて言うなら俺は俺の物だ

「んぎぎぎぎ！」「ぐぐぐぐぐ……」

・引っ張り合い中・

あー、腕が折れ、バキッ、あ、折れた

〈回想終了〉

「……だー！」「バツ、

「キヤアッ」「バサッ、

「あら？」「ひよいつ、

さすがに我慢の限界だわ！でも見事に妹紅は避けたな

「なにすんよ千夜！怪我するとこじゃない！」

「はん！軟弱なお姫様ね！」

「なによー！」

「否定できないでしょ！」「アーツハッハッハー！」

「喧嘩すんなよ・・・」

めんどくせえな

「いい加減に静かにしろ」「ゴチン！」

「痛いっ！」「ゴロゴロ」

「うっ」「プルプル」

おおー、お姫様と一般人（貴族だけどね）の差が出たな。かぐやは痛さに我慢できなくて地面を転がり回ってんのに妹紅は我慢してうめいてる

「なのすんのよ！痛いじゃない！」「ブンブン」

「・・・ごめんなさい千夜」「しゅん」

「妹紅は素直だな」「なでなで、それに比べてかぐやは・・・ちらっ・・・はあ」

「なによー！言いたいことがあるんならはっきり言いなさいよ！」

お？いいのか？

「じゃあまず、なんでお前はそんなに我儘なんだ！そもそもお姫様と言つのはな、淑やかで物静かで上品な・・・」

（中略）

「・・・それでな、その世話してやった奴に子供ができてな、その時は人生最高！みたいな顔してたのに嫁さんが事故にあつてからガラリと人が変わつちまつてな」

「へ〜」

あれ？なんの話してたんだっけ？

「・・・そろ〜・・・」

「そこで脱出しようとしてる馬鹿ぐやは待て」・ガシッ・

「！？離しなさい！」・ジタバタ・

「今逃げようとしただろ？」

まったく、油断も隙もない

「だってあきらかに関係ない話になつてるんだもの！」

「・・・そうか？」

「・・・そうだったかしら？」

「あんだ達絶対おかしい！」

なにを言う、このどこからどう見ても常識人である俺に

「おかしいつてよ妹紅」

「おかしいかしら？千夜」

「俺はおかしいと思わない。ということでも数決的にかぐやがおかしい」「ビシッ」

「なによそれ！どうしようもないじゃない！」

そこらへんは・・・なあ？

「気合であんがいどうにかなるもんだぞ？」

「できるわけないでしょ！？」

「あら？お姫様はそれくらいもできないのかしら？」「プププ」

「・・・ブチン・ゴラァー！その小娘！あんまり調子にのつてると消滅させるわよ！」

怖っ！なににするつもりだよ！

「何言ってるの？そんなことできるわけナイじゃない。お姫様は馬鹿なの？死ぬの？」

妹紅も怖っ！なんでこんなにかぐやが嫌いなんだよ！

「（こんななんの役にも立たないような女に千夜を渡すもんですか！私が千夜を諦めらめるのは千夜に嫌われた時と、私以外の誰かを選んだ時よ！．．．まあ一夫多妻っていうのもありかもしれないわね。少し考えときましよう）」

「．．．アハハハハ．．．ブツコロス！」

かぐやが壊れた！どうしよう？．．．おろおろ．．．

「永遠と須臾の狭間に消え去りなさい．．．！」．．．ゴオオオ！」

・豆知識：須臾じゆしゆというのは極めて短い時間のこと。つまりPADと同じで時を操るタイプの能力。だが発揮されることはあまりない．．．ちよっ！？能力まで使うのかよ！

「死ぬ」「止めるって！．．．しゅばん．．．！」．．．ガパゴパ！」

ふう、止まったか。今やったのは水の玉を発射したんだ。この水の玉は相手の頭に当たったらその頭を覆って窒息死させる技なんだよ。まあ水棲の生き物にはきかないんだけどな

「．．．！（落ち着いたら早くこの水を解きなさい！）」．．．ゴボボボボ．．．

「おっと」「ぱしゃん」

「ウー！ゲホッゲホッ！．．．はあー、はあー、危うく死ぬところだっ

たじゃない!」

「お前は死なないから大丈夫だろ?」

「肉体的に死ななくても精神的に死んだら意味ないのよ!」

「そうか」

どーでもいいーな

「・・・ふう、私も落ち着いたわ」

「妹紅もだいぶ荒れてたな」

「ええ・・・少し許せないことがあったのよ(どうやらかくや姫は千夜のことが好きってわけではなさそうね。でも油断はできないわ)」

そんなに不比等が盗られたのが許せなかったのか?

・ちょっと違います・

「とりあえず落ち着いたな?二人とも」・なでなで・

「うん!落ち着いた!だからもつと撫でてノノノ」

「なに勝手に撫でてんのよノノノ!(ちょっとドキってしちゃったじゃないノノノ)」・バツ・

・ピコーン、ぐーやフラグが立ちますた。しかしこのフラグはあま

り好感度を上げすぎるとヤンデレフラグ（永遠の時を一生一緒に生きる）に変わりますのでご注意ください・

「おっと・ひょいっ・別に振り払わなくてもいいだろ」

まったく、このお姫様はなんでこんなに暴力的なのかねえ

「まったくもう／＼／＼、すー、はぁー、ふう、女性の頭は気安く触つていいものじゃないわよ」

「おや？かぐやがまともなこと言ってる。まあ正論だから素直に謝ろう。正直すまんかった」・ペこり・

「・・・なんか謝られたはずなのに馬鹿にされてるような気がするわ」

それは気のせいじゃないな

「まあそんなことより話を戻そう」

「・・・?」「こてん・

いや妹紅、首をかしげられても・・・可愛いけどな

「早くそうしなさいよ・・・」・はぁ・

「まあ元の話ついてもお前が暇つぶし相手になれって言ったことだけだな」

途中から妹紅が乱入してきて話がわけわからない方向に行っちゃっ

たけど

「そうだったわね．．．でももういいわ。なんか疲れちゃった」
はあ、

「あまりため息をつくとき幸せが逃げるぞ?」

「え? そうなの? 私あまりため息ついてないから幸せは逃げてないのかしら? (もしかしてため息ついちゃうと今の幸せがなくなっちゃうのかな?．．．絶対ため息なんかつかないもんね!)」

- 妹紅絶賛勘違い中 -

「うつさい! 余計なお世話よ!」

んゝそろそろ暗くなってきたな．．．

「じゃあ俺は帰るわ。じゃあな」

「帰るの? なら私も一緒に帰る」
「ギョッ」

「おっと、ぽふん、あまり抱きつくなよ? 町の人に勘違いされるぞ」
「?」

「えへへゝ、私はそれでまったく構わないわ (むしろそれが狙いだし．．．ね? ニヤリ)」

「ん、そうか。じゃあ帰ろう」
「スタスタ」

「おゝ」
「スタスタ」

「・・・(え?なにこの疎外感)はあ、帰ろう」「とぼとぼ」

よし、家に帰って寝よう

妹紅が・・・グレた・・・(後書き)

また次回も見てくださいと嬉しいかな！

感想・意見・ご要望をお待ちします！

竹取物語の終わりの前日・・・？（前書き）

作者は遊戯王が結構好きです

でもタクティクスはじょーのーち君レベル（T ^ T）

竹取物語の終わりの前日・・・？

（数週間後）

やあ、千夜だよ。ついに明日月の使者がくるんだ。確か東方だと月の使者にまじって永琳もくるんだっけ？久しぶりに会うな・・・変わってなけりゃいいんだが・・・

「他の話はー？」

「早く話なさい！」・ヒュン・

「おっと」・パシッ・

今は妹紅とかぐやと一緒に俺の旅の話の話を聞いてるんだが・・・何時の間に仲良くなってんだ？

「（まあ気に入らないけど・・・別に嫌いってわけじゃないしね）」

「（かぐや姫の千夜を見る目がちょっとだけ変わった・・・私の勘がかぐや姫を警戒しろって告げる）」

仲良きことは美しき哉・・・かな？

・実際は仲いいわけじゃありませんけどね・

「あ、そうそう千夜」

「なんだかぐや？」

「明日月の使者がくるからなんとかして」

「ぶほっ！いきなりだなおい！」

いきなりすぎて妹紅なんか口をポカッンって感じで開けてるし．．．
はしたないから口を閉じなさい

「そもそも一般人の俺になにをしろと？」

「．．．はっ！一般人（笑）」

失礼だな！

「そもそも人じゃ無いじゃない」

「いやそうだけどよ．．．」

あ、ここに妹紅居るの忘れてた

「．．．ぶくん、千夜って人じゃなかったんだ」
ゴゴゴゴゴゴ．．．

「ああ、そうだ．．．よ？．．．」

あれ？妹紅の後ろに般若が．．．

「．．．なんで」
ぼそっ

「ん？なに？」

「・・・なんで教えてくれなかったのよー！」「ウガーー！」

うおっ！??ビビるんならわかるけどなんでキレてんだよ！

「（千夜は人じゃない!?・・・つまり子供ができないってこと！
？それは困るわ!・・・それは今は置いて確認しなきゃいけないことがあるわね・・・）千夜？」

「なんだ？」

「・・・千夜は妖怪なのかしら？」

「そうだが・・・」

やっぱり身近な人間が妖怪だったことにショックを受けてんのかな？

「・・・妖怪って人を襲わないと生きられないのよね？」

「・・・?そうだけど」

俺は特別だが

「・・・じゃあ今すぐ人を襲ってきなさい！」

「・・・ええー!」

どんな超解釈したらそうなった!?

「（妖怪ってことは人を襲わないと生きられないってことは・・・

千夜はこの町にきてから人を襲ってないはずだし・・・このまま放つて置いたら千夜が消えちゃう！」

「やっぱり妹紅にとっては千夜が妖怪だろうが人間だろうが関係ないみたいですよ」

「いやいや！別に人を襲わなくても大丈夫だから！」

「・・・そうなの？」

「ああ、俺は少し特別だな。一回も人を襲ったことはないが消えそうになったりしたことはないぞ？」

「・・・よかった」・はあ」

あらら、心配かけちゃった

「・・・ゲフン！、もういいかしら？」

「ああ、かぐやいたのか？」

「・・・ねえ？なんか私の扱い酷くない？」

「酷くない酷くない」

酷くない・・・よな？

「それで、月の使者はどうにかしてくれるのかしら？」

「その前にまず聞かせてくれ」

「なに？」

「・・・お前は月に帰りたくないのか？」

都市は地上に比べてだいぶ住みやすいはずだ。暇つぶしの道具も大量にあるはずだし・・・なのになんで不便な地上に残ろうとしてんだ？

「嫌よあんなところ！」「ふん！」

「なんでだ？」

「変化も！事故も！暇も！果てはやることすらない！これほどつまらないことがありますか！いや、無いわ！」「どくん」

反語！？

「それでも暇つぶしする方法はいくらでもあるだろうよ」

「それでも、よ」

そんなもんかねえ？

「・・・へへ、かぐや姫って本当に月の民だったんだ」

「信じてなかったのか？」

「うん。だって月って言ったら空に浮かんでるあれでしょ？あそこ
に人が住んでるなんて誰も信じないわよ。だから私はただしつこい

求婚に嫌気がさしてどっかに逃げる口実だと思ってたわ」

なるほど、かぐやならありえる

「違うわよ。確かにあの貴族達の求婚は面倒臭かったし今も帝の求婚がうざったいけど、でも人に好かれるのは嫌いではないしね・・・」

「

「俺には理解できんな」

「私も（私は千夜がいてくれればそれでいいしね）」

「そう?」

まあ性格の違いだろ

「で?」

「そうだな、別にいいぞ」

原作がどう変わるかわからんが・・・とっくの昔に関わってんだから別にいいどころだろうか?

「そ、なら明日の夜にくるから準備しといて」

「都市製の兵器が出てくるんだろう?それはどうすんだ?」

「それは昨日瑛永琳から通信がきたのよ。『機械は私がどうにかするわ』だって」

そうか。まあ永琳なら心配ないだろ

「あ、そうそう。昨日通信したときに千夜がいるってこと話たら喜んでたわよ?」会いに行くから・・・どっかいつたらダメヨ?」だつて。・・・ちよつと雰囲気怖かったわ」

・ブルツ・あゝ、ちよつと嫌な予感がするなゝ

〜そのころ月〜

永琳「・・・うふふふフフフ」

月の使者A「(・ひそひそ・おい!なんか八意様が怖いぞ!)」

月の使者B「(ああ、あれは怖い)」

月の使者C「(いえ、あれは・・・恋する乙女の顔ね・・・!)」

月の使者B「(マジで!?)」

月の使者A「(・・・なんでそんなことがわかるんだよ)」

月の使者C「(乙女の勘よ!)」

A・B「(・)(いやお前男じゃん)(・)(・)」

C(男)(・)(うっさいわよ!)」

A「（あ、馬鹿！大きな声だすなって！）」

永琳「（千夜千夜千夜千夜千（ry）．．．うふふフフフ）」

B「（．．．気付いてなかったようだな。助かった）」、はあく、

C「（．．．危なかったわ、気付かれてたら前に永琳様を警護していたときに永琳様の考え事を邪魔して実験台にされたい男、ジュルリ、と同じ運命をたどるところだったわ．．．それはそれでいいかも）」

A「（ああ、ありゃ酷かったな。月で一番かつこいいと言われたやつだったのにその顔が．．．）」、ガタガタガタ！

B「（ああ、そうだな。そしてCよ、それ以上こっちに近づいてくるな！）」

C「（いいじゃない別に）」、にじり．．．にじり．．．

B「（くんな！）」、ダツ！

C「待ちなさい！」、ダツ！

A「おい馬鹿！」

永琳「．．．今日の実験台は三人カシラ？」

A・B・C「くくひゅゅ！」、「！」

- A・B・Cは現実リアルからログアウトしますた -

く地上く

．．．なんか変態が大変なことになってる気がする

「そうか．．．」

「まあ永琳はあなたのことを嫌ってるわけじゃないんだからなんとかなるでしょ」

「だといいんだけどね」

「．．．せーんや」「ニッコニコ」

「なんだ妹紅？」

やつけにニコニコしてんな

「永琳って誰かしら？」「ニッコニコ」

「俺が昔お世話になった女性だ（むしろ世話してやったやつかな？）」

例えば実験の後片付けやったり料理作ってやったり部屋の片付けやったり朝起こしてやったり気付いたら台の上に寝そべってたり．．．あれ？

「あんまりいい思い出がねえぞ．．．？」

「そうなの？（じゃあまだ大丈夫かしら？．．．いえ、十中八九そ

の女性は千夜が好きね」

「しかし、それなら俺が行く意味が無いんじゃないか？」
戦いぐらいしかできんぞ？

「ええ、無いわ」・キツパリ・

「・・・そうか」

「でもあなたは月の民に対しての牽制になるのよ」

「どういうことだ？」

よくわからん・・・

「あなたは月では有名妖怪だからよ」

「・・・なんでだ？」

「第一次妖怪大戦、別名”最終戦争”で千夜にあだ名がついたのよ。
”抹殺の使徒””開闢の使者””終焉の使者”その他・・・つまり
千夜はそれだけ月にとって脅威なのよ。(実際噂では”全てを破壊
しつくした破壊の化身”と言われて、永琳の話では、都市の事情に
巻き込まれた哀れな妖怪、って言ってたし、実際に会ってみると永
琳の話が合ってそうだわ)」

俺はカオス・ソルジャーでも混沌帝龍でもないっつもの！

・かぐやは知らない話だが、・破壊の化身、と言ってるのは千夜の

ことを嫌っていた一部だけで、商店街など千夜と関わりがあったところでは、都市のために戦ってくれた英雄、となっている。

「だから月の使者は全員殺さず、無傷のまま月に送り返してあげて？」

「ん？殺さなくていいのか？」

もう始めて人を殺す覚悟はできてたんだが・・・

・千夜は今まで10分の9殺しや、人に限りなく近い形の妖怪（鬼）を殺したことはあるが純粋な人間を殺したことはない。

「ええ、なぜか月の使者は皆やる気が無いみたいなのよ。だから適当に言い訳ができればなにもしないで帰るわ。そう、例えば相手に最凶の妖怪がいた、とかね？」

なるほど・・・

「さっぱりわからん！」

「なに堂々と言い切ってるのよ！」・スパーン！

「痛っ！」

刀の峰で叩くなって！

「・・・千夜？単語の意味がわからない私でも理解できたんだからそれはどうかと思うわよ？」

．．．ぐふっ！

・妹紅に非難された！千夜は精神的に9999（カンスト）のダメージ！

「だからようするにね．．．」

く たったそれだけの説明に2時間く

「．．．おk、把握」

「．．．本当？」

「大丈夫だ、問題無い．．．はず」

「（．．．本当に大丈夫かしら？）」

「じゃあ理解できてなかったら一つ言うこと聞いてもらうからね！」

「．．．いや、かぐやがそれを言うならわかるけどなんで妹紅なんだよ」

妹紅はかぐやが説明してんのを横で見てただけだろ？

「駄目！絶対言うこと聞いてもらうんだから！（できれば千夜からシテもらいたかったけど．．．そんなに悠長なこと言ってもらえない状況になってきてるし、このまま私の部屋に連れ込んで．．．／／／」

「あら？なら私も聞いてもらおうかしら？」・ニヤリ・

なんか妹紅からはピンク色のオーラがでてるし、かぐやにいたっては完全にイタズラするつもりだな

「それじゃあ明日の夕方ぐらいまでに私の家に来てね」

「わかった、今日はもう帰って寝ようか。お休みなかぐや」

「お休み、かぐや姫」

「ええ、お休みなさい二人とも」

じゃ、帰ろっか

竹取物語の終わりの前日・・・？（後書き）

まあ竹取物語が終わっても竹取物語編はまだ終わりませんけどね。

こいつら腐ってやがる・・・！（前書き）

腐女子って怖いよねー・・・

それでは本文をどうぞ！

「いつら腐ってやがる・・・！」

綺麗な満月だな・・・

月の使者A「うわゝ、まじで”開闢の使者”だ!!”

月の使者B「いや、”終焉の使者”のほうがかっこいいって!!”

なのになんでこんな奴らの相手しなきゃいけないんだよ・・・いや、お前ら月の使者だったはずだよな?

「久しぶりね、千夜」

「・・・ああ、久しぶりだな。永琳」

「どっ?ちゃんと聞いたとおりやる気がない人だけでしょう?」

「・・・こいつらの人選は永琳なのか?」

「そっよ」「ドヤッ」

ドヤ顔すんな。なんでこうなったか振り返るとしようか・・・

〜今日の朝〜

ふあゝ、今日もいい朝だなって

「よいしょっゝぐっ・・・ポフィン、あら?」

前にもこんなことがあった気がするな・・・

「・・・バツ、やっぱり妹紅だったか」

最近は潜り込んでこなかったんだけどな

「・・・まぶしい」・ギョツ・

「うおっ！ちよつとまで妹紅！そこはまずい！」

妹紅は今腰のちよつと下らへんに抱きついてる。・・・詳しくは言わなくてもわかるだろ？

「ん〜スリスリ、あつたかい」

・グググ・・・やめろー！俺の息子よ！今はまだ出番じゃない！！

「今やらないでいつやるんだ！」

くそっ！幻聴まで聞こえてきやがった！

「そうそう・・・早く・・・早く・・・あなたも本心ではやりたいんでしょ？」・「はあ・・・はあ・・・／／／」

「そっだよっ！！ってあれ？」

今普通に声が聞こえたような・・・

「気のせいかな？・・・」

「・・・スー／＼／」

「って騙されるわけないだろ！」・スパーン！

「痛い！」

まったく、俺が混乱してる間に催眠術をかけようとするとは・・・

「うう、寝ぼけてる間に催眠術作戦も失敗ね・ボソツ」

まったく、油断も隙もない

「とりあえず朝飯を食べにいこう・・・

〈食事室〉

「おはよう千夜」

「ああ、おはよう不平等」

「おはようございます。千夜様、妹紅様、不平等様」・ペこり

「それより千夜」・ニヤニヤ

「・・・なんだ不平等」

気持ち悪いニヤケ顔しながら

「妹紅とやったんだろ？どうだったんだ？」

「・・・あれはお前の入れ知恵かー!!」・ビュウン！

「おっと」・ひょいつ

ぶっ殺す!

「死ねー!!」・ダララララ!

最近出番がなかった水の銃を改造したもので、水マシンガンだ!

・水の銃の連射力が大幅に上がりました

「ふっこんなもの・・・ピキーン!」見切った!」・バババババ
!

うおっ!てめっ本当に人間かよ!

・千夜の攻撃!ミス!不比等には一発も当たらなかった!

「ふん、こんな攻撃を私に当てようのど、百年早いわ!」

「・・・」・ガチャン、ガチャン

「えっなんで玉を発射する装置が二つになってんの?」

・・・アハ 弾幕二倍!

「死ね!」・ガガガツガガガガ!!

「・・・私は風になる!」・ダツ!

「まてやー！」

「鬼ごっこ終了」

「．．．空しい勝利だったぜ」

「．．．」

「へんじがない、ただのしかばねのようだ」

「じゃあ不比等をつれて屋敷に戻りますか」・ガシツ、ズルズル、

「屋敷」

「ただいま」

「お帰りなさつ．．．お父様はどうしたのかしら？やけにポロポロ
なんだけど？」

「ああ、転んでたから持ってきたぞ」

「．．．いや、服に大量の穴が「転んでたんだ」いや、だから「転
んでたんだ」．．．い「転んでたんだ」．．．はあ、もうそれでい
いわ」

「勝った！」

「それより早く朝飯にしましょ。待ってたんだから」

「先に食ってればいいのに、不比等はどうすればいい？」

「そこらへんに投げときなさい。そうすれば勝手に復活するわ」

．．．妹紅の不比等の扱いが酷いな。やっぱりかぐやに付きっきりで妹紅の相手をしてなかったからか？

「じゃあ行こう」・ポイツ・

「．．．．ヒューン．．．ドサツ・ぐほっ!？」

朝飯朝飯

（食事室）

「「「いただきます!」「」」

「．．．ちよい．．．待って．．．」・ズル．．．ズル．．．；

あ、匍匐前進できやがった

「お父様、汚い」

「不比等様、汚れを玄関で払ってからきて下さい。掃除が大変なので」

「．．．」・ガクツ・

．．．不比等は踏んだり蹴ったりだな

「食事終了」

結局朝飯が終わっても不比等は復活してないんだぜ

「では私は不比等様が汚してしまった床を掃除してまいります」
ペーリ

「あ！私も手伝う！私のお父様が汚しちゃったから」

「ありがとうございます。妹紅様」

やけに二人の言葉に棘があるな

「……」
「ぶつぶつ」

不比等なんか体育座りしながら部屋の隅になんかぶつぶつ言ってるし

「……カオスだ」

……俺はどうしよう？

「じゃあ俺は夜まで暇だから寝てるわ」

「お休みなさいませ、千夜様」

「お休みなさい、千夜」

「……」
「……ぶつぶつ」

さっきから不比等はなに言ってるんだ？

「・・・(なんで私ばかりこんな目に合ってるんだちょっとふざけただけじゃないかそもそも本当に妹紅がやるとは思ってなかったし千夜も嫌ではないはずなのになぜなぜなぜなぜなぜな(ry)」
ぶつぶつ

・・・聞こえない、聞こえない

〈寝室〉

「っーいた」

じゃあ昼まで寝るとしますか

〈夜〉

「あゝ、よく寝たあああああー！ー！ー！」

もう夜じゃん！

「妹紅！は別に連れて行かなくていいか」

あ、でも不平等には言っとう

〈不平等の部屋〉

「おゝい不平等！居る・・・か？・・・」

「・・・ぶつぶつぶつ」

まだ壊れてたのかよ！

「いい加減目を覚ま、せ！！」・ゴオツ！・

「・・・ぶつぶゴン！・痛！」

水ハンマーだぜ！

「なにをする千夜！」・ガバツ・

「今ならかぐやに会えるぞ？行かないのか？」

「・・・！行くに決まってるだろう！」

「じゃあ先に行ってるから早くこい。じゃないともう会えなくなるぞ？」

「わかった！すぐ行く！」・バババツ・

じゃあ行くか

（かぐやの家）

ここらへんの人間が皆止まっている。・・・もう来てるのか

「かぐやを探さないとな」

どこだ？

選択肢

- ・ 屋敷の中に入る
- ・ かぐやの部屋に行く
- ・ 庭に行く
- ・ 俺は常識に捕らわれない！

またこれか、じゃあ今回は・・・

ニア・俺は常識に捕らわれない！

「ひゃっはー！」「ドッカーン！」

屋敷の壁を壊しながらド派手に登場だZ E

「ノックしてもしもしーし！」「ドカーン！ドカーン！」

んゝ止まってる人しか見当たらないな。ん？なんだお前ら？

月の使者A「……！！」「こそこそ」

月の使者B「……！！」「こそこそ」

服装からしてこいつらが月の使者か？

「ただちに所属と目的を答える！さもなければ……ガチャン！……死刑だ！」

月の使者A「はっはい！えくと、僕！あ、いや、私は月の使者でござりまする！えくと、目的は、開闢の使者、様に会いにきました！」

えっ？

月の使者B「自分も！月の使者でし！あう……噛みまひた……うっうん！自分も、終焉の使者、様に会いにきまひた！」

えっ？えっ？

「……かぐやを取りに来たんじゃないの？」

A・B「そんな事よりもこっちのほうが大切です！」

えええ、かぐやってたしか結構月のお偉いさんには大切な存在だったよな？

・それはぐーやの能力が関係しています。ぐーやの能力は”永遠と須臾を操る程度の能力”、つまり時間を操ることができる。一瞬を永遠にしたり永遠を一瞬にしたり……そこで月のお偉いさんは考えた。『体の成長（時間）を止めたりすれば不老になれんじゃね？でもこの発想には穴が大量にあったため実行はされなかった。それでも不老を諦めないやつらは『たぶんカグヤの能力に不老になるための手掛かりがあるはずだ！』』ということとでぐーやを月に連れ戻そうとしてる……

「そして時は現在に戻る」

月の使者A「握手して下さい!」

俺はアイドルじゃねえんだぞ!?

月の使者B「噂を聞いたときから好きでした!」

君はなにカミングアウトしての!?

月の使者C・D・E「なに?」「あ、」「来たのね!」

また増えやがった!

・月の使者Sは皆女です・

月の使者C「きゃー!本当に居るー!」「パシャッパシャッ、

「うおっ!カメラとんなくて!」

月の使者D「……」「ペタペタ、

「……そんなに俺の体を触って楽しいかい?」

月の使者D「……ん／＼」「こくん、

月の使者E「ねーねーお話聞かせてよ、色々なところに行ったんでしょ!」「キラキラ、

「おい永琳!月の使者に子供が混じってるぞ!」

月の使者E「子供じゃないよ！こつ見えても××××歳なんだから
！」・プンプン！

「・・・え”っ」

マジかよ・・・

月の使者？「うほっいい男！ヤ・ら・な・い・か？」

「すごく・・・大k言うかー！！」・ドーン！

月の使者？「アッー・・・」・キラッ

ふう、あんな気持ち悪い奴は星になつてろ

A「・こそこそ」（開關の使者様×ガチムチ・・・ありだわ！）

B「（至急月の本部に連絡よ！・・・次の同人会の売り上げ一位は
私たちのものだわ・・・！）」

・同人会とはようするにコミケです・

C「（待ちなさい！ここはガチムチが受身で開關の使者様が鬼畜攻
（閲覧除去されました）」

D「・・・」・コクコクコクコクコク(sy)

E「（なんかEが異常な早さで首を縦に振ってんだけど！）」

「・・・」・チャキチャキチャキ・

「・・・ねえ千夜？」

「・・・なんだ？」・ガシユン・・・ガチャン・

「なんで無言で武器の準備をしてるのかしら？」

「・・・アハ」・ギギギギギ・・・ガチャリ・

照準オツツケイイイ・・・

「やめなさい！」・ガバツ！・

「離せ！」・ギギギギ・・・ドカーン！・

くそっ！ハズれた！

「離せ永琳！あいつらを殺せない！」・ブンブン！・

「殺しちゃ駄目なのよ！」・ギユツ！・

くそっ！振りほどけねえ！

「なにか嫌なことを言ったのかもしれないけど殺しちゃ駄目！」

「・・・ちっ」・パシャン・

しょうがないから武器を全部水に戻してやったぜ

「ふう、まったくもう・・・」

「反省はしてる。だが後悔はしていない。あいつらが悪いんだ」

俺は悪くない！

「まったく・・・（あの子らが書く同人誌はすごく上手いんだから
・千夜がいなくて寂しい時にどれだけ世話になったのやら・・・）
」

「・・・なんか永琳も敵のような気がしてきた」

気のせいかな？

「あなたたち！もう帰っていいわよ！」

A「了解しました！」・ビシッ！

B「それでは私たちは早く帰ってやらなきゃいけないことがあります
すので失礼します！」・ビシッ！

C「・・・早く帰って編集しなきゃ・・・！」

D「・・・！」「・ビシッ！

E「（それでは永琳様、できあがったブツ）・・・は送ります
ね？）」

「（ええ、お願い）」

E「それでは！」「ピシッ！

「気をつけて帰るのよ」

「・・・えいりん」「ガシッ」

「なに千夜？まだ性交するには早っ！痛い痛い！」「ギリギリ・・・

「今の会話はなにかな？かな？」「ガシヤン・・・

「ちよつと報酬の話をしてただけよ！」

「・・・なにか言い残すことはあるかい？」「ガチン！

「・・・私の中にそんな大きいものは入らないよ／＼」

「じゃあな、来世で知り合いになれたらいいな」

「えっそこは恋人とかにしっ」「ピチューン」

はあ・・・

「かくや？」

「・・・なに？」

「ずっと他人の振りをしてました」

「この現状をどうにかできないか？」

「・・・記憶置換装置があるから使いましょう」

・記憶置換装置とは今持つてる記憶Aを都合のいい記憶Bに変える装置です・

おk、これでなんとかなるだろ

「じゃあ早く永琳を持ってどっか行け」

「・・・あなたが引き取ってくれないかしら？」

「無理ダナ」

「ですよー・・・」

じゃあこれから妹紅のところに「ぜー・・・ぜー・・・」お？

「不平等、遅かったな」

「お前・・・ここまでどれだけ距離があると思ってるんだ・・・！」

おっと、妖怪になってたから気にしてなかったがここまでくるのに山二つまたいでるんだよな

・まあ原作（竹取物語）ではそこまで詳しい描写がなかったんでそういうことにしといて下さい・

「それにしても・・・キヨロキヨロ・おお！あなた様がかぐや姫ですか！」

「ええ、そうよ」

「ほー」・ジロジロ・

「不平等、かぐやの本性はどうだ？」

「ふん！そんなの澄み渡ってるに決まってるでしょう！」

「・・・ふむ、この感じは・・・お主欲望に素直だな？」

「おお、当たり前だな」

「・・・否定はしないわ」

「ふむ、私は目的を達したし帰るとしようか」

「早っ！」

「そっ？じゃーねー」

「さらばだ千夜にかぐや姫よ」・スタスタ・

マジで帰りやがった・・・

「それじゃ私も雲隠れしましょうか」

「そっか・・・さりげなく永琳を置いて行くつもりか」

「・・・チツ、じゃーねー」

ったく・・・

「じゃあ竹取物語も終わったし、次は妹紅が不老不死になるのを待つだけか」

とりあえず帰るとしよう

PS、かぐやはこの後固まってる帝（記憶置換中でぼーっとしてる状態）の前に置換した記憶に合わせた内容の手紙と不死の薬を置いてきました

PS2、かぐやは置換した記憶（都合のいい記憶）を見て『なにこの私！こんなの私じゃない！』と悶えていました

こいつら腐ってやがる・・・！（後書き）

竹取物語がやっと終わった。

妹紅の修行が終わったら竹取物語編が終わりです。

まだアンケートは終わってないので返答はお早めに！

山は色々と怖い（）（）（∴）（）（）（）（）（）（）（前書き）

すみません。期末テストや風邪ですこし更新に間が空いてしま
しました（T ^ T）

今回も結構グダグダ

それでもいいと言う方はどうぞ！

ん？意外と妹紅の蹴りが強かったのか岩笠がよろけてるな．．．
いや、もう岩笠が歳だつてこともあるな

「．．．．．」ひゅーん．．．

あらら、崖から落ちちゃった．．．さすがにここからじゃ急いで
も間に合わないな、岩笠には不憫だけどそついう運命だつたとても
思つて静かに成仏してくれ

「．．．ふむ、妹紅に合流するか」

もしもなんの覚悟もなく蓬莱の薬を飲むようだつたら止めないとな
．．．例えその結果で将来（原作）が大変になるとしても、な

〈妹紅視点〉

はあ．．．はあ．．．はあ．．．！

「．．．ここまでくれば大丈夫かしら？」

まさか岩笠がああだつたなんて．．．

〈回想〉

「がさ．．．がさ．．．」

”にしてもこんなものが．．．”おいつ！迂闊に触ると．．．
”まあまあいいじゃない。別にこんなもの．．．””気をつけろ、
触れると蒸発するぞ．．．”いやなんでだよ．．．”

ふう、やっと追いついたわ

”なにをやっておる！絶対に触ってはいかんぞ！絶対だぞ！”
”了解しました！つまり触ってみろってことですね！”
”なんでもなるんじゃ！”

あそこで叫んでるのがあれ（・・・）を運んでる岩笠って人ね

”……………！”

あらら？危ない危ない。考えすぎて見失うところだったわ

「さっさと追いつきましょう」

待ってなさい千夜、どれだけ時間がかかろうと見つけだしてやるわ
……………

「それもこれもあのかぐや姫のせいだ……………」

そう、きつと千夜はかぐや姫になんかされたから家に帰ってこないんだわ！なにか他のことに夢中になっちゃって帰るのを忘れたとかは……………うん、無いはず

「そうだったら……………どうしましょ？」

……………気にしないで行きましょ。千夜も『明日は明日の風が吹く』
『って言ってたし。意味はわからなかったけど

「じゃあちよっと急ぎましょ」

「もこたん尾行中・・・」

ふう、一応話し声はつきり聞こえる範囲まで近づけたわ

”にしてもな、なんで俺がこんなことを・・・” そう言っ
て、ここに居る全員がそう思ってるさ” ”・・・後ろの奴ら見てみ
”ん？”

なんか緊張感が無いわね

「ワーワー」 「うおー！！」 ”海賊王に、俺はなる！” ”皆ー！
実は言わなきゃいけないことが・・・” ” O) O
” ひゃっはー！！汚物は消毒だー！！”

ちよつと待つて・・・あなたたちって確か正規の兵士だったわよね
？なのになんでこんなに自分勝手なの？

”・・・な？” ”・・・まともなのは私と君だけか、副長” ”そう
だぜ？隊長” ”とりあえず無事に帰ったら海賊王になる宣言してる
奴と今にも暴走しそうな変な髪型モヒカンの奴は退職させよう”

なんか大変そうね。でも私には関係無いわ

”・・・なんで俺はこんな奴らを選んでしまったんじゃろうな？”

そうね・・・ここに居る半分くらいが寝静まるのを待つてから盗ろ
うかしら？・・・いえ、あの副長と隊長をどうにかしないとイケな
さそうね。でもその二人がどうにかなれば後は簡単そうね

「・・・今はただ追いかけましょう」

くさらに尾行・・・

・ぜえ・・・ぜえ・・・

駄目だわ、疲れて、上手く、頭が、回らない・・・

”結構進んだね、そろそろ休もうか？” まだまだ大丈夫だろう。
こんな感じの奴らでも一応は一級の兵士なんだから” いや、俺が
心配してるのは・・・” なんだ副長？

休むの？休まないと、頭がおかしく、なりそうだわ

・ぜー・・・ぜー・・・” 岩笠様がもう限界っぽいんだが・・・
” おおっ！！まったく考えてなかった！” ... それって隊長
長としてどうよ？” 隊長だって間違いはあるものさ・・・”
・そうか、（え？まともなのでもしかして俺だけ？）”

・・・・休むみたいね、たすかったわ、ドサッ、もう立ってらんない
・

”・・・ちよつと僕は小便してくるからのう、好きにしといてくれ
” 了解いたしました” ういゝっす”

”ふう、歳を取ると便が我慢できなくなって大変じゃわい” ・ザッ
ザッザ！

あ、やばい、人が近づいてくる。でも動けないし睡魔が・・・
・ガクン、

岩笠は頑張つて妹紅を持ち上げようとしたがやはり歳には勝てなかったのか・・・無理だったようだ

「おおう・・・しょうがない、他の者らに運んでもらうとするかの」

く兵士たちが妹紅を運搬中・・・く

「なんでこんな山中に何も装備しないできたんですかねえ？」

「たぶん山なんて徒歩で行ったことが無いだろうからな、何が必要だったのかわからなかったのだろう」

「そうなんだろうな。服装的にどっかのお偉いさんの娘かなんかだろうよ」

「それが気になるのだが・・・とりあえず今は保護しとこう。それでこの仕事が終わったら家に送りとどければいいさ」

”はあ・・・はあ・・・！お嬢ちゃんが寝てる！” “これは・・・すぐく、そそります・・・！” “まてお前ら、まずは起こして反応を見てからだろう” “それじゃあさっそく・・・！”

「・・・シャキン！・・・お前らそこから動くなよ、全員切り捨ててやる・・・！」

「待て隊長！気持ちはわかるが今切り捨てると夜に警戒する人間が少なくなる！」 ・ガシッ！・・・

「離せ！今すぐ殺らないとお嬢ちゃんが大変なことになる！」、ジタバタ！」

「駄目だ！さすがに二人だけじゃあ強い妖怪が出たらお陀仏しちまう！」

どうやら副長は妖怪が出たら困にする気のようにだ

「……しょうがない、私と副長はお嬢さんを守るとしよう。他の者達は少し離れたところで警戒してろ」

”ぶー！ぶー！” 隊長と副長だけずるいぞ！” なかなか女子に会うことが無い俺達はこんな時にしか機会が無いんだぞ！”

「黙れお前ら！なかなか女子に会えないのは兵士として当然！それが嫌なら辞めちまえ！」

隊長は他の兵士たちがあまりにしつこいので本気でキレたようだ

「まあまあ隊長落ち着けて」

「……そうだな、今はとりあえず山頂を目指すとしよう。休憩は終わりだ！登山を始めるぞ！」

「……あれ？儂って空気？」

岩登は完全に忘れられてたとさ。

く登山中……く

「ふう、やっと山頂につきそうだな」

「ああ。でも隊長、他の奴らが嫌に静かすぎる、警戒しねえとな」

”・・・””・・・(こそこそ)””・・・!”

「・・・そうだな」

隊長がマジギレした後からずっとこそそと何かを話しているようだ

「・・・そ、それより儂を助けてくれんかのう？」・ゼー、ゼー
ー、ー

「岩笠様、もう少し頑張って下さい」

「そうだけ、早く山頂に行つてこの不死の薬？つて帝が言つてた
怪しい物体を捨てたらお嬢ちゃんの家を探さないといけねえんだか
ら」

「ええ、できるだけ早く、早くしないと兵士たちが暴走しそうなの
で」

「・・・そうか、なら頑張るとしようかのお」

「よっし、行くか」

〜夜〜

「今日はここで寝るとしましょ」

「お前ら！今日の夕飯を狩ってこい！」

”．．．はい”．．．了解しました”．．．ふん”

「よし、俺達はここで待ってようか」

「僕は寝てていいかのう？」

「はい。夕飯ができたなら起こしますので」

「じゃあ寝ておるぞ．．．バタン．．．すか．．．」

どうやら岩笠は疲れていたためすぐに眠ってしまったようだ

「．．．副長、気付いているか？」

「．．．ああ、兵士達の気配が一ヶ所に固まっているな」

「何をする気かわからんが、行かないと大変なことになる気がする」

「俺もだ。岩笠様とお嬢ちゃんだけ置いて行くのは少し心配だが早く行かないと取り返しがつかなくなりそうだ」

「じゃあ行くとするか」

（隊長&副長移動中．．．）

”はっはー！” ^よしっ！突撃するぞー！” ”待っててね女子ー！”

「．．．ゴクリ．．．やっぱりきて正解だったな」

「・・・ああ、こなきゃ取り返しのつかないことになってたぜ」

「・・・私がこいつらを止めてる間にお嬢さんを連れて逃げてくれ」

「はっ！そんなことできつかよ！ここで全滅させたほうがいいに決まってる！」

「では共に逝こう！」「ダッ！」

「まさかこんなところで散るとはな、まあ誰かを守ろうとした結果なんだから無駄では無いと思っておこう！」「ダッ！」

”む！隊長と副長がきたぞー！” 敵襲だー！” みんなー！殺つちまえー”

隊長と副長が見たものとはいったい！？

～次の日～

「ふあゝ、よく寝たのじゃ」

「・・・」「スー、スー、」

「お嬢ちゃんはまだ起きてきて無いのかのゝ、ん？」

べつやら岩笠は違和感に気づいたようだ

「兵士が一人もいない・・・？」

そう、兵士が全員いなくなってしまったことに

「・・・ふむ、とりあえず小便に行こうかの。ついでにわかる範囲で探して見つけなければお嬢ちゃんが起きるのを待って出発するしかないのお」「ザッ」

（岩笠探索中・・・）

「こ、これは!？」

岩笠はどつやら見つけてしまったようだ。変わり果てた兵士たちの姿を・・・

「・・・なんでこやつらは皆裸なんじゃ？」

そう、どつやら隊長と副長を除く兵士達は皆裸になって妹紅に突貫しようとしていたみたいだが、隊長と副長が勘付いて全員切り捨てたようだ

「・・・ふむ、お嬢ちゃんを起こして早急にここから離れるとしよう。帝様には『兵士達は妖怪に勇敢に立ち向かったが健闘に戦うも殉職する』と言っておこう」「ザッ!」

岩笠は一刻も早くここから立ち去りたいようだ。たぶん正常な人なら皆そう思うだろうが・・・

（妹紅視点）

んん、よく寝たわ

「あれ？ここは何処かしら？」

確か森の中で眠ってしまったはずなのだけど・・・

「ああお嬢ちゃん、起きたかい？」

「ええ、今起きたところだわ」

あれ？兵士達がない・・・

「じゃあ出発しよう。ここに居てはいけない」・グイッ・

「なんで？」

「・・・ここには頭をおかしくしてしまう恐ろしい妖怪が住んでいるんだ。実は僕は兵士達と一緒に登山していたんだが、皆その妖怪に殺られてしまったよ」

そんな妖怪がいたの！？

「わかったわ、早くここから離れましょう」・タッ・

「うむ、早急に、一刻も早く、直ちにここから離れないといけないんじゃない？」

よしっ、早く出発しましょう

く山頂く

「へへ、山頂ってこうなってるんだ・・・」

いつも通り過ぎてるだけだからまったく気にしてなかったわ

「ふむ、それではさっそく捨てよ」「こら〜!」「なんじゃ?」

「この山にそんなもの捨てちゃ駄目ですよ!」「ブンブン!」

「なんでじゃ?それとお主は誰じゃ?」

「私ですか?私は咲耶姫と呼ばれているものです」「ペコリ」

へ〜、咲耶姫さくやひめ・・・確か火を鎮める水の神だったかしら?

「今この山はとても不安定な状態です。今は私が抑えているんですが、そんなこの山にすごく力を持っている物を入れると・・・」

「入れると?」

「この山が活性化して私では抑えきれなくなります」

それは怖いわね・・・

「しかしのう・・・帝様の命令で天にもっとも近きところで処分せよと」「それでしたら」「ん?」

「昔この山より大きかった八ヶ岳がありますよ?」

「ほ〜、初耳じゃな。」

「ええ、昔この山と八ヶ岳を比べてみて八ヶ岳の方が高かったので

私が碎いてこの山より低く・ゲフン！…いえなんでもありません。
気にしないで下さい」

「そ、そうかの？気にしないでおい」

なんか咲耶姫って『儂く美しい』って聞いたんだけど…猫かぶ
ってそうね

「じゃあ儂らはもう行くわい」

「ええ、さよなら」

ふーむ、下山が一番盗りやすいかな？

く岩笠&妹紅下山中…

「それにしても…噂で聞いた咲耶姫と印象がだいぶ違かったわ
ね」

「噂とはそんなもんじゃい」

そついうものかしら？

「それより早く下山したいのじゃ…（あれ？確かもうすぐあの
兵士達の死体があるところだったかのお？）」

そつね、急ぎましょう

く例の兵士達の死体（笑）がある場所く

「な、なによこれ！」

「・・・（あ、やっぱりそうだったのう）」

いえ、でも妖怪に襲われたならこんなに綺麗に死体が残ってるはずがない・・・

- 妹紅は千夜の風呂をよく覗いていたので男の裸は見慣れています -

「もしかして・・・」

「どうかしたのかの？」

「これをやったのは岩笠！あなたね！」

「どうしてそうなったんじゃ！？」

私を誤魔化すことはできないわよ！

「あなたは兵士達の死体があるのに動揺しなかった、つまりこのことを知っていたのに私に教えなかった・・・」

なぜ兵士達が二人を抜いて皆裸なのかは・・・岩笠がそういう趣味だっただけにしておきましょう

「もうあなたと一緒に居られない！」・ドンッ！・・・

こんな変態といたら変態が移るわ！

「さようなら！」・ガシッ！・・・

「ぐおお・・・待て、さりげなく不死の薬を持ってくな」

・・・てへっ

「この薬は貰って行くわー」・ダツタツタツタツタ・・・

「くそう、あまりに理不尽」・ヨロヨロ・

それじゃ千夜を探す旅に行きますか。その前にお父様と翠に言うて
こよっと

「あ、とりあえずこの薬を飲んでおきましょう」・ゴクリ・

何これ！？不味いよ〜！

「うえ〜、しばらく何食っても味がしなさそうね」

じゃあ行くとしましょうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2543y/>

東方洪水域

2011年12月18日11時55分発行